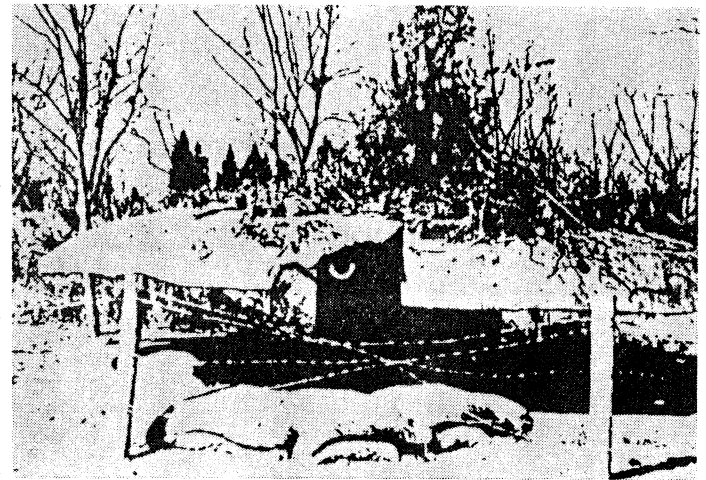


第五章 南京城の攻略と城内外掃蕩



雨花台の中国軍陣地

## 第一節 南京城攻略要領と作戦経過

### 一、「南京城攻略要領」の示達

中支那方面軍は、南京城攻略にあたり、秩序を保ち、整齊とした入城掃蕩戦を行うために、すでに述べた通り十二月七日「南京城攻略要領」を全軍に示達した。その概要は次のとおりである。

#### 「南京城攻略要領」

- 一、南京守城司令官若クハ市政府当局尚残留シアル場合ニハ開城ヲ勸告シテ平和裡ニ入城スルコトヲ図ル  
此際各師団ハ各々選抜セル歩兵一大隊〔注・九日に三大隊と訂正される〕ヲ基幹トスル部隊ヲ先ツ入城セシメ城内ノ地域ヲ分チテ掃蕩ス
- 二、敵ノ残兵尚城壁ニ拠リ抵抗ヲ行フ場合ニハ戰場ニ到着シアル全砲兵を展開シテ砲撃シテ城壁ヲ奪取シ各師団ハ歩兵一聯隊ヲ基幹トスル部隊ヲモツテ城内ヲ掃蕩ス
- 三、城内掃蕩戦ニ於テハ作戦地域ヲ指定シ之ヲ敵ニ確守セシメ以テ友軍相撃ヲ防キ且不法行為ニ対スル責任ヲ明カナラシム
- 四、城内ニオケル兩軍ノ作戦地域左ノ如シ

共和門—公園路—中正街—中正路—漢中路  
五、各軍ニ対スル配当城門

派遣軍 中山門、太平門、和平門  
第十軍 共和門、中華門、水西門

### 南京入城後ニ於ケル処置

一、各兵团ニ地域ヲ指定シテ警備ニ任セシメ 主力ハ城外適宜ノ地点ニ集結ス  
二、五、入城式 合同慰靈祭 防空部隊ノ推進 南京警備部隊ノ配備等ノ件(略)

### 「南京城ノ攻略及入城ニ関スル注意事項」

一、皇軍カ外国ノ首都ニ入城スルハ有史以来ノ盛事ニシテ永ク竹帛ニ垂ルヘキ事績タリト世界ノ齊シク注目シアル大事件ナルニ鑑ミ正々堂々将来ノ模範タルヘキ心組ヲモツテ各部隊ノ乱入友軍ノ相撃不法行為等絶対ニ無カラシムルヲ要ス

二、部隊ノ軍紀風紀ヲ特ニ厳肅ニシ支那軍民ヲシテ皇軍ノ威風ニ敬仰帰服セシメ苟モ名譽ヲ毀損スルカ如キ行為ノ絶無ヲ期スルヲ要ス

三、別ニ示ス要図ニ基キ外国權益特ニ外交機関ニハ絶対ニ接近セサルハ固ヨリ特ニ外交団カ設定ヲ提議シ我軍ニ拒否セラレタル中立地帯(安全区)ニハ必要ノ外立入ヲ禁シ所要ノ地点ニ歩哨ヲ配置ス

又城外ニ於ケル中山陵其他革命志士ノ墓及明孝陵ニハ立入ルコトヲ禁ス

四、入城部隊ハ師団長カ特ニ選抜セルモノニシテ予メ注意事項特ニ城内外国權益ノ位置等ヲ徹底セシメ絶対ニ過誤ナキヲ期シ要スレハ歩哨ヲ配置ス

五、掠奪行為ヲナシ又不注意ト雖火ヲ失スルモノハ嚴罰ニ処ス

軍隊ト同時ニ多数ノ憲兵補助憲兵ヲ入城セシメ不法行為ヲ摘発セシム

城内に進入した金沢の歩兵第六旅団の「入城、城内掃蕩に関する旅団命令」(後掲)は現存しているが、前記の内容が明示されている。また、立入禁止の中立地帯(いわゆる難民区)と外国權益の位置を朱書した要図が各部隊に配布され、その一部は戦車第一大隊(岩仲戦車隊)第一中隊長・城島赳夫氏が保存している。

また、第六師団参謀長・下野一霍<sup>23期</sup>大佐の手記によれば、第十軍方面においても、この「攻略要領」は各師団に徹底されていた。

### 二、投降勧告文と総攻撃の開始

十二月八日、各師団の追撃隊は、湯水鎮—淳化鎮—方山—東善橋の前哨陣地を突破して、南京城外廓の主防禦陣地に迫った。

松井方面軍司令官は、十二月九日、次のような「和平開城ノ勧告文」(中国語)とともに、「回答は、十二月十日正午、句容街道上の歩哨線で受領する。もしも、貴軍が代表する責任者を派遣する時は、そこで南京城接收に関する必要な協定を行う。指定時間内に回答がない時は、やむを得ず南京攻略を開始する」という中国語訳の文書を、飛行機により城内に散布した。

日軍百万すでに江南を席捲せり。南京城は正に包囲の中に在り。戦局の大勢よりみれば今後の交戦はたゞ百害あつて一利なし。惟ふに江寧の地は中国の旧都にして民国の首府なり。明の孝陵、中山陵など古蹟、名勝蟄集し、宛然東亜文化の精髓の感あり。日軍は抵抗者に対しては極めて峻烈にして寛恕せざるも、無辜の民衆および敵意なき中国軍隊に対しては寛大をもつてし、これを犯さず、東亜文化に至りては「力をつくして」之を保護保存するの熱意あり。而して貴軍にして交戦を継続せんとするならば、南京は勢ひ必ずや戦禍を免れ難し。而して千載の文化を灰燼に帰し、十年の経営は全く泡沫とならん。仍つて本司令官は日本軍を代表し貴軍に勧告す。即ち南京城を和平裡に開放し、而して左記の処置に出でよ。

大日本陸軍総司令官 松井 石根

〔注〕 訳文は昭和十二年十二月十日付『国民新聞』掲載記事による（極東裁判提出）。なお「」内は中国語原文に従つた。

十二月十日、中支方面軍の武藤参謀副長、中山参謀、岡田尚通たかし訳官らは、中山門―句容道上において午後一時まで「回答」を待っていたが、中国側の軍使は来ない。守城司令官唐生智は、「降伏勧告」を拒否したのである。ここにおいて、松井大將は「支那軍ハ我勧告ヲ容レスシテ依然抵抗ヲ続ケツツアリ 上海派遣軍並ニ第十軍ハ攻略ヲ続行シ、城内ヲ掃蕩スヘシ」と命じ、総攻撃が開始された。

松井大將は、後日東京裁判において、キーンナン首席検事の冒頭陳述に対し次のような意見書を提出している。

「南京攻撃は、上海占領後、支那軍を追撃した最後の戦闘なり。キーンナン氏が、無警告に南京を攻撃せり、というは誤りなり。予は、南京攻略の際、とくに慎重に平和裡に、南京の占領を欲したるにより、特に飛行機上より南京守

備の支那軍に対し、降伏勧告文を投じ、平和的手段により、南京城を授受すべきことを申し出たり。

特に二十四時間の時間を猶予したるも、支那軍はこれに対し、何等の回答を行うことなく、或は一部をもって要撃し、或は多数の軍隊を、船舶をもって移動する等の処置を講じたるをもって、遂に我軍は二十四時間後の十二月十日、攻撃実行によりこれを占領するに至りしなり。」

首都抗戦となれば、残留南京市民、建物、財産に戦火が及ぶことは自明のことである。蒋介石は、すでに南京を放棄して首都機能を重慶に移転している。何のために南京を戦火に捲きこむのか。

国民政府の国内向け、ならびに外国に対する宣伝謀略的ゼスチュアだったのかも知れない。前章に述べたとおり『抗戦簡史』（中華民国国防部史政処編）によると、南京守備の目的は「敵の消耗を増大する」にあつたとしているが、『中国抗日戦争史稿』は「十一月中旬の幕僚会議で劉斐は、象徴的な防守にとどめ、適当に抵抗して撤退するを上策となし、唐生智は固守を主張した。蒋介石は一方で固守せよといい、他方で直系軍主力を撤退させた」としている。

### 三、南京城攻略作戦の経過

（要図18参照）

南京城守備の中国軍は、十二日夜間、退却し始め、攻囲中のわが第一線部隊は、十三日六時には光華門、中山門、中華門等の城壁を完全に占領した。各師団はあらかじめ示達された「攻略要領」にもとづき、城内での交戦態勢をととのえ所命の部隊が進入して掃蕩を開始した。

第十六師団の右側支隊（歩三八基幹）および紫金山を占領した歩兵第三十三聯隊主力は、十三日午後には下関に進



出し、揚子江を舟や筏で退却する中国軍に射撃を浴びせ、また南京城西方の揚子江岸を北進した第六師団の歩兵第四十五聯隊は、城外に脱出を図る中国軍を撃破しつつ、十四日午前下関に進出した。

城内における中国軍の抵抗は予期に反して微弱であり、城内掃蕩戦は十五日には概ね終わり、十七日には入城式、十八日には城内飛行場で合同慰霊祭が執行された。

その後、秩序回復にともない、第九師団の城内部隊は二十二日頃から蘇州方面に転進、第十六師団は主力をもって城内、一部をもって主要城門外に駐留して警備に任じた。また一部を城内西南部に進入させていた第六師団と第四百四師団は、前者が十二月二十日以降蕪湖方面へ、後者が十五日頃から杭州方面へ転進を開始した。

その後、城外においては敗残兵の掃蕩、城内においては治安維持の必要から安全区内の「兵民分離」が行われるうちに昭和十三年を迎えた。

\*

また、南京攻略にあたって第三飛行団は偵察一ヶ中隊を上海派遣軍に配属、主力をもって第十軍に協力した。すなわち、王浜および竜華飛行場を根拠地とし、常州、広徳、長興を前進飛行場として活発な地上作戦直接協力を行った。とくに中国軍退却の情況、抵抗線の偵察等は軍の作戦指導上極めて有用であった。また弾薬の空輸にも従事し、南京城壁を爆撃するなど、第一線兵団の戦闘に密接に協力した。とくに、揚子江上を退却する敵舟艇群に対して、あるいは蕪湖付近や寧国を経て南方に退却する敵大部隊に加えた爆撃は効果が大きであった。〔戦史叢書〕

南京攻略戦（十二年十一月九日～十三年一月十八日）に陸軍航空部隊の使用した爆弾量は、二百二十八トである（航空兵大佐・青木喬<sup>32</sup>期講述『航空戦史講授録』Ⅱ昭和十五年航空専科学生用・陸軍大学校出版Ⅱによる）。ちなみに徐州会戦では七百五十ト、武漢会戦は千四百三十二トである。（引用文献同上）

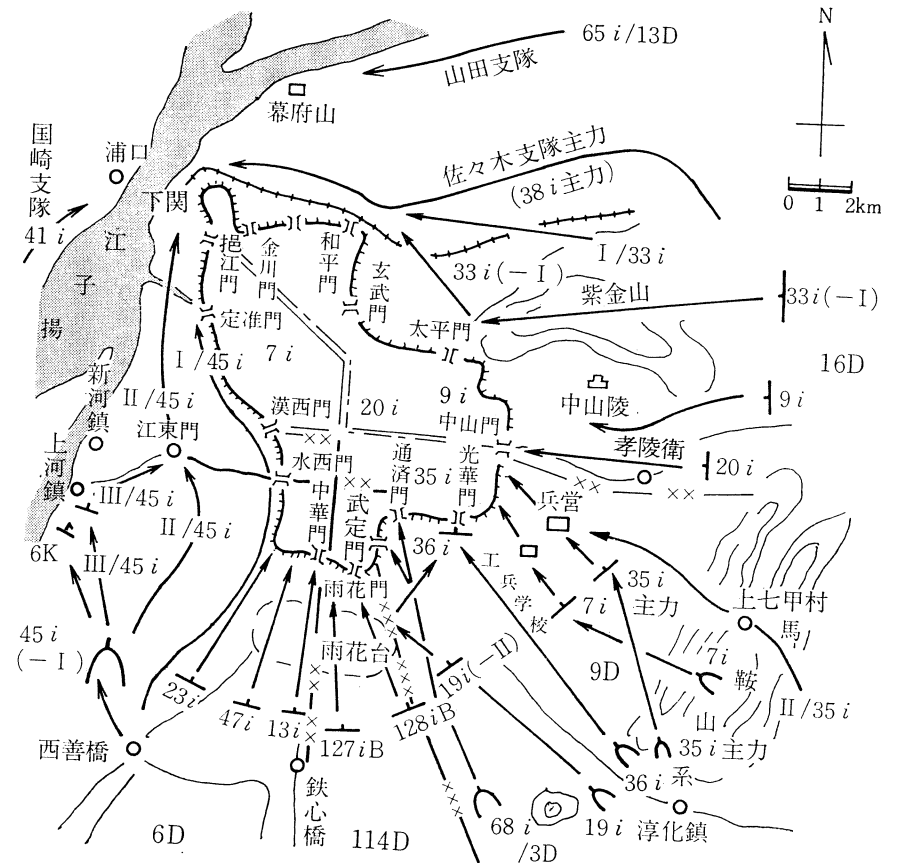
海軍の第一聯合航空隊（中攻三八、艦戦一二）・第二聯合航空隊（艦戦二四、艦爆三〇、艦攻二二）・第一航空隊（加賀の艦戦二一、艦爆一二、艦攻九）、第二航空隊（電驥、鳳翔の艦戦二一、艦爆二二、艦攻一八）、第三航空隊（神威、神川丸の水偵三〇）の活動は、遙かに陸軍航空を凌駕していた。

「南京に対する我が海軍航空隊の空襲は回を重ねること五十余回に及び、参加飛行機九百余機、投下爆弾百六十余ト。事変発生以来の我が海軍機の損害は六十一機〔十二月九日現在〕」

「陸軍部隊が漸次南京を包囲、潮の如き進撃を続けるや、南京及付近重要地点に攻撃を集中、十二月二日の南京空襲に於ては第一回空襲以来の壮烈なる空中戦を演じ、我に数倍せる敵蘇聯製戦闘機約三十機、重爆六機の挑戦を奮然一蹴、忽ち戦闘機十機、重爆三機を撃墜、其の間大校飛行場を爆撃して全機凱歌を奏して悠々無事帰還した」

〔支那事変に於ける帝国海軍の行動〕海軍省海軍軍事普及部・昭和十三年一月三十一日発行による）

要図18 方面軍の南京攻略概要図



## 第二節 第十六師団の城門・下関の攻略と城内外の掃蕩

一、歩兵第三十旅団の太平門・下関付近における戦闘と城内外掃蕩

### 1、一般経過

(要図9、18、19参照)

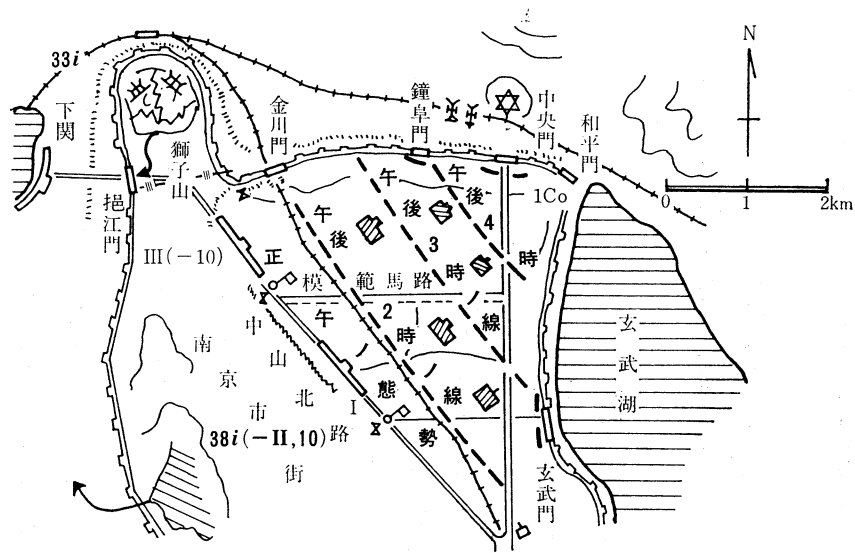
第十六師団の右側支隊(長歩兵第三十旅団長・佐々木少将の指揮する、歩三八と歩三三の第一大隊、独立軽装甲車第八中隊、野砲兵第一大隊基幹)は、その主力をもって十二日夜までに、57高地(紅山東方二き)―馬宮―岔路口地域に集結し、翌十三日の下関突進を準備した。

支隊は翌十二月十三日早朝、歩三三第一大隊をもって中国軍三十六師複廓陣地の右拠点である紅山を攻略して支隊主力(歩三八)の下関地区突進を容易ならしめた。かくして独立軽装甲車第八中隊は午後一時四十分、歩三八主力は午後三時、下関付近に進出し、中国軍の退路を遮断した。

中島師団長は、十二日夜半までの、縦長に延びきった右側支隊の状況に鑑みて、師団の右翼隊として紫金山攻撃を担当した歩三三(第一大隊欠)を十三日午前八時天文台攻略後、一部をもって太平門を占領させ、主力を玄武湖東側を経て、歩兵第三十旅団に追及復帰を命令した。十三日午前十時、歩三三主力は旅団に復帰した。

下関進出後城内外掃蕩に関し、佐々木少将は次のような命令を下達した。

要図19 歩兵第30旅団の南京北部地区掃蕩概況図  
12月14日



- 歩兵第三十旅団命令 十二月十四日午前四時五十分 於中央門外
- 一、敵ハ全面的ニ敗北セルモ、尚抵抗ノ意志ヲ有スルモノ散在ス
  - 二、旅団ハ本十四日南京北部城内及城外ヲ徹底的ニ掃蕩セントス
  - 三、歩兵第三十三聯隊ハ、金川門（之ヲ含ム）以西ノ城門ヲ守備シ下関及北極閣ヲ東西ニ連ヌル線及城内中央ヨリ獅子山ニ通スル道路（含ム）ノ城内三角地帯ヲ掃蕩シ支那兵ヲ撃滅スヘシ
  - 四、歩兵第三十八聯隊（第二大隊欠）ハ、金川門（之ヲ含マス）以東ノ城門ヲ守備シ、歩兵第三十三聯隊ノ掃蕩区域以東ノ城内及和平門中央大学農林ヲ連ヌル線以西地区ヲ掃蕩シ支那兵ヲ撃滅スヘシ
  - 五、歩兵第三十八聯隊第二大隊ハ玄武湖及紫金山ノ中間ニアル山岳地帯（之ヲ含ム以北ノ地区）ヲ掃蕩シ支那兵ヲ撃滅スヘシ
  - 六、各隊ハ師団ノ指示アル迄捕虜ヲ受付ルヲ許サス
  - 七、〔以下略〕

支隊長・佐々木少將

この旅団命令の中に「徹底的ニ掃蕩セントス」、「支那兵ヲ撃滅スヘシ」、「師団ノ指示アル迄捕虜ヲ受付ルヲ許サス」という厳しい文言があるのが注目される。

以下、下関付近の戦闘と城内外の掃蕩について『佐々木少将私記』『歩兵第三十三聯隊史・同戦闘詳報』『歩兵第三十八聯隊戦闘詳報』、さらに参戦者の証言を交えて、その実相を眺めてみたい。

## 2、歩兵第三十三聯隊の下関付近の戦闘と城内外掃蕩

(要図9参照)

歩三三(一大欠)は十三日午前九時すぎ、「一部ヲモツテ太平門ヲ守備セシメ、主力ハ下関方向ニ前進シテ敵ノ退路ヲ遮断スヘキ」命令を受領した。

聯隊は十三日午前十時ごろ、第六中隊(機関銃一小隊、工兵一小隊配属)を太平門守備に残置し、第二大隊(一中隊欠)を前衛として、天文台北側の道路を駆けくんだり、太平門―和平門―下関道を下関に向かい突進した。

そのころ、最後の抵抗を試みた中国軍は、総崩れとなって、下関方面に退路を求めて敗走し、南京城内より脱出をはかるものと混淆し混乱をきわめていた。太平門守備に任じた歩三三第六中隊基幹の部隊は、その付近において千数百の敗残兵を撃滅した。

聯隊主力は、午後二時三十分その先頭をもって下関に到着した。中国軍は、所在の機帆船、小舟、筏などを利用して、揚子江上を対岸めざして逃走中である。江岸に展開した聯隊は、これに対して重火器の火力を集中し、敵に与えた損害二千を下らぬものと判断された。

折りから溯江してきたわが海軍の艦艇もこれに射撃を加えた。

下関は交通の要衝として繁華な街並みであったが、中国軍の堅壁清野作戦と砲爆撃により、見る影もなく破壊しつくされていた。

十三日夜、この廃墟にひとしい町中に露營した聯隊は、翌十四日から、第二大隊をもって城内の西北角一帯を、第

一、第三大隊をもって下関地区の掃蕩を開始した。

中国兵の大半は逃走したが、まだ相当数の敗残兵が潜伏しており、獅子山砲台に立て籠って最後まで抗戦した中国兵は、この日武器を捨てて投降しはじめ、その数は約二百人に達した。

さらに十六日以降も歩三三は、その一部を以て和平門・下関地区の城外掃蕩を実施した。

『歩兵第三十三聯隊戦闘詳報』による十二月十日～十四日間のわが方の死傷者、将校八、下士官兵一九六

射耗弾 小銃四一、〇五一発、機関銃二、四九〇発、擲弾筒二八七発、拳銃一九三発、大隊砲弾一三五発、速射砲弾  
二二五発、聯隊砲弾二二七発

敵の遺棄死体 十日二二〇、十一日三七〇、十二日七四〇、十三日五、五〇〇(処決セシ敗残兵ヲ含ム)

鹵獲兵器 小銃一、四四〇、軽機八二、重機一四、銃剣一、〇三〇、十五糎重砲八、要塞軽砲二、高射砲一、高射機  
関銃一、速射砲三、山砲二、迫撃砲六、弾薬多数

俘虜 将校一四、下士官兵三、〇八二、計三、〇九六(俘虜ハ処断ス)

「敗残兵、捕虜の処断」とその数について

(1) 『歩兵第三十三聯隊戦闘詳報』によると、十三日の遺棄死体五、五〇〇の中に「処決セシ敗残兵ヲ含ム」とある。

この日は、下関に向かう退路遮断の戦闘であったから、敗走する敵兵を捕え射殺したのであるが、その五、五〇〇という数字について平井秋雄氏(49期聯隊本部通信班長)の意見を求めたところ、平井氏は「戦闘詳報の五、五〇〇は、恐らく当時、各大・中隊からの報告を、そのまま集計した概数であろうが、正確な数字とは思えない」と

述べた。

(2) 「俘虜ハ処断ス」といえば、捕虜として收容後、殺したことを意味する。しかも、この捕虜は将校一四と下士官兵三、〇八二と細かく区分しているのである。

もし、この捕虜が十四日に生じたとすれば、後に述べる歩四五の第二大隊が下関で捕え第十六師団に引き渡したという四千〜五千の捕虜との関係などについて、平井氏と堤千里氏(第三大隊副官)に再度確認を求めた。

両氏は歩三三の現存者に問い合わせたが、「捕虜は獅子山砲台で捕えた約二百だけと聞いている。各隊ごとに捕えた捕虜があったとしても、数百であろう。三千という捕虜を捕えて処分したなどという話はきいていない。また、歩四五から大量の捕虜を受け取った事実はない」と強く否定された。(歩四五の捕虜は釈放された公算が大きい)

『佐々木少将私記』十二月十三日〜十六日の記載によれば、「支隊の作戦地域内の遺棄死体は一万数千、江上に撃滅したもの、各部隊の捕虜を合算すれば、支隊のみにて二万以上を殲滅した」とあるが、南京の総防衛兵力から考えると、この数字には多分に誇張、憶測がある。

### 3、歩兵第三十八聯隊の域内外掃蕩

(要図9、19参照)

十二月十四日、歩兵第三十旅団長は、歩兵第三十三聯隊を併せ指揮し、中央門外に位置していたが、歩三三は遠く下関に進出しており、連絡がやや困難であった。

同日早朝、南京域内外の掃蕩を徹底的に実施するため、佐々木旅団長は前述のとおり中央門外において旅団命令を下達した。「歩兵第三十旅団命令」および『歩兵第三十八聯隊戦闘詳報』により、十四日の域内掃蕩の状況を概観する。

旅団は両聯隊を併列して、それぞれ掃蕩区域を担当させた。一部の兵力で和平門から金川門を経て挹江門に至る城門を準備し、歩三三は下関および獅子山砲台地区を、歩三八(一大欠)は正午ごろ中山北路の線から攻撃を発起し、城内東北の三角地帯を掃蕩した。歩三八の第二大隊は、玄武湖以東、紫金山北側に至る間の域外を掃蕩した。

歩三八主力は、右掃蕩隊(第一大隊)、左掃蕩隊(第三大隊)を併列して、進出線を逐次統制しながら掃蕩し、午後五時三十分掃蕩を終わり、下関に兵力を集結して村落露営した。

戦闘詳報によると、「この区域は既に歩兵第二十聯隊の一部〔注・第三、第四中隊と推定される〕が掃蕩した区域であって、戦果は鹵獲兵器のみであり、功績顕著なるものなし」と述べている。

一方域外にあって堯化門守備の任務を持つ歩三八第十中隊は、十二月十四日午前八時三十分頃、白旗を掲げた敵を收容、午後一時武装を解除して七、二〇〇名(将校七〇、准士官下士官・兵七、一三〇)を俘虜とし、後日これらを南京に護送した。

また、歩三八第二大隊は十二月十六日、和平門↓仙鶴門鎮↓東流鎮↓復興橋に至る域外を掃蕩し、翌十七日復興橋↓和平門に至る地区の掃蕩にあたった。

### 4、下関・挹江門方面の情況

(地図1参照)

下関・挹江門方面の戦闘については、多数の参戦者から証言を寄せられたが、要約して紹介する。

平井秋雄氏(歩兵第三十三聯隊通信班長)の証言

「十三日午後二時三十分、聯隊本部は獅子山砲台北側の域外壕の路上に達した。この時中国兵が揚子江上を浮遊

物に取りすがって逃走中の姿が望見されたので、重火器の火力を約一時間余集中した。このころ、海軍の揚子江艦隊が溯江してきて艦砲をもって射撃を始めたので、聯隊は海軍艦艇に危害を与えることを考え射撃を中止した。この江上を逃走した敵中に一般住民の混入など、とても考えられない。その数は千〜二千ぐらいであったろうか。日没時、私は聯隊長の命令により、下関棧橋に碇泊していた砲艦『勢多』の寺崎中佐のところに連絡に行った。

十四日朝、獅子山砲台付近（城外）の宿营地出発、挹江門に到着。挹江門は外側に土囊を積みあげて閉塞され入城できない。約二時間の作業で漸く通過できるようになった。城門の右側には数本のロープが吊り下がっている。最後まで抵抗した中国兵は、このロープにすがり脱出して、揚子江に向かい逃走したのであろう。城内から脱出するためにはこのロープに頼るしかない。老幼婦女などは到底脱出することはできないものと思われた。

聯隊は残敵に遭遇することなく中山北路より太平路に前進し、南京市政府地区に宿営した。  
当時、難民区である中山北路南側地区は、立入禁止区域に指定されていた。」

島田勝巳氏（歩兵第三十三聯隊第二機関銃中隊長）の証言

「城内掃蕩で獅子山付近で百四、五十名の敗残兵を見つけ、襲いかかって殺した。中国兵は小銃は捨てても懐中に手榴弾や拳銃を隠し持っている者が、かなりいた。紛戦状態の戦場に身を置く戦闘者の心理を振り返ってみると、敵を殺さなければ次の瞬間、こちらが殺される」という切実な論理にしたがって行動したというのが、偽らざる実態であった。」

羽田武夫氏（同機関銃中隊一等兵）の証言

「私は第二大隊本部と共に行動するのが任務でしたので、中隊ごとの掃蕩がほぼ終了した時点で本部とともに前進したのですが、挹江門は土囊でギッシリと固められており、城壁にはたしか十五、六本のいろいろな布切れの綱

が垂れ下がっていました。挹江門前の広場には約三百と推定される死体が、わりあい広範囲に散らばっていたことをはっきり記憶しています。

この死体は、城壁からころがり落ちた者、あるいは慌てて跳び下りた者ではないでしょうか。逃げ場を失った敵兵が狼狼のあげく、布を伝って降りたものと想像されます。

私たちは十四日夕刻城内に入り、集結地である市役所まで行軍しました。市内にはほとんど死体を見ず、ほんとうに静かなものでした。」

藤田清氏（独立軽装甲車第二中隊本部曹長）の証言

「十七日であったと思うが、サイドカーに乗って首都飯店の軍司令部に命令受領に行った。命令受領後挹江門をくぐって下関に出た。まったくの焼け野原で死屍累々、戦場掃除が始まっており、死体を揚子江流線部に運んで水葬するらしい。腐乱して死臭を発しているものがあつたから、相当以前に死んだものであろうと思った。私は死体数を数千と見たが、民船二隻で運んでいた工兵に尋ねると、全部終わるまでには十五日ぐらいかかるだろうと言っていた。」

新井敏治氏（歩兵第三十八聯隊第二中隊軍曹）の証言

「十二月十九日か二十日ごろ、清掃のため兵十数人を連れて下関の揚子江岸に行きました。入江に漂着した死体を押し流す作業でしたが、死体は三百以上ありました。この漂着死体は、十二月十二日、南京上流の蕪湖に進出したわが軍が、退却中の中国兵を砲撃した死体が漂着したものと思う。」

（注）平井秋雄氏も、下関の江岸に漂着した死体は、上流の新河鎮、蕪湖方面から押し流されたものではないかと述べている。

佐々木元勝氏の『野戦郵便長日記』

佐々木元勝氏は上海派遣軍の野戦郵便長として従軍し、十二月十五日上海出発トラックで十六日南京に入城した。この間の戦場の情景を日記に記している。

佐々木氏の資料は、南京攻略戦から若干の時日を隔て、伝聞推測を交えてはいるが、当時現場にあって実相を見聞した記録としての意義がある。

「十六日夕日が沈まんとする頃、トラックを走らせて揚子江河岸停車場近傍の郵政局に向う。ここは上海の閘北の如く荒れている。揚子江河岸にも支那兵の殺された無数の跡があり、駆逐艦が浮んでいる。新局舎の前には、軍帽を被った支那兵（士官）が脚から腹の方を焼かれ、まだ燃えている。壊れた煉瓦の上では、少し前殺されたらしい中老の死体が、口と鼻から血を出して倒れている。

南京で俘虜は四万二千とか。揚子江岸からの帰り、続々と夥しい行列をなして兵に連れられて行く。苦力の大群（俘虜）は三組あり、警戒の兵にトラックの窓から聞くと、皆殺してしまうのだと答えた。便衣に変装して避難しているのを、一網打尽にされたので、日の丸の腕章をつけたのが多く、十五、六歳の給仕みたいのもいた。月が蒼白くのぼり、此宵一夜の命の俘虜の群れは、歴史的悲劇には違いない。

碼頭の局に行った運転手の兵等が、大分遅くなってからドヤドヤ帰ってきたが、碼頭で二千名の俘虜を銃殺したという話。手を縛り、河に追い込み銃で射ち殺す。逃げようとするのは機関銃でやる。三人四人ずつ追い立て、刺しても斬っても御自由というわけで、運転手の兵も十五名は撃ったという。」

角 良晴氏（<sup>32</sup>期松井大将専属副官）の証言

「十八日朝、第六師団から、下関の支那人十二、三万人の処理について方面軍情報課に問い合せてきた。松井軍司令官は「解放せよ」と命じたにかかわらず、長参謀は「ヤッチマエ」と命じて殺害した。私は二十日朝、軍司令官とともに自動車で下関の江岸に行き、累々と死体が横たわる惨状を目撃した。」

（注）この証言には幾多の矛盾があり、信憑性に欠けるが、松井大将の専属副官の証言であるので紹介しておく。詳細は資料集『南京戦史研究ノート』を参照されたい。

## 5、太平門、富貴山地区の情況

（要図1参照）

島田勝巳氏（<sup>38</sup>期歩三三第二機関銃中隊長）の証言

「太平門あたりでは多くの敗残兵を捕えたが、ヤッチマエと襲いかかるケースが多かった。」

前述のように「小銃を捨てても中国兵は懷中に手榴弾や拳銃を隠し持っている者が多かった」という。

中沢三夫氏（第十六師団参謀長）の証言

「此両地区ハ、防者ノ重点存在セシ地区ノ後方陣地帯ニシテ、第一線ノ支撐ト收容トノ任務ヲ負担シタルコト明カニシテ第一線部隊ノ衛生機関等ノ存在セシハ、疑フノ余地無ク、自然死者ノ処理多カリシモノナルベシ。

殊ニ、太平門、富貴山間ハ、我方ニ遮蔽セル谷地ニシテ、死傷多カリシ紫金山陣地ノ收容ニハ、位置並（ニ）地形上、最モ好適ナリシノミナラズ、富貴山ニハ、平時ヨリ完全ナル大防空設備完成セラレ、後方陣地ノ任務ニ備ヘ居タリ。

——紅土橋——北極門——地点未詳ナルモ、北極門ハ、北極園〔閣〕ノ北方ナラント想像シテ、左ノ事実ヲ挙ゲン。

入城時、外交部ノ建物内ニハ大兵站病院ガ開設セラレアリ。(難民ト共ニ外人指導下ニ在リ)数千ヲ以テ算スル多数ノ患者ヲ擁シ、(重傷者多シ)日々、三、四十名落命シツツアリタリ。

是レ等ノ処理ヲ、運搬具乏シキ當時、如何ニセシヤ疑問ニシテ、附近ニ埋葬セラレタルコト確實ナリ。

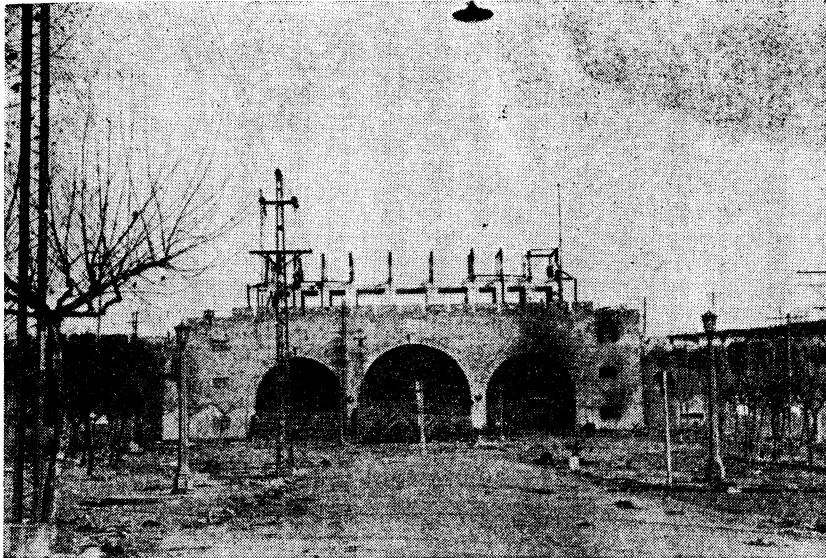
外国人ノ日誌ニヨレバ、『十一月下旬南京ハ遠ク前線ノ戦死傷者ヲ收容シ、南京ハ戦死傷者ノ收容所ト化シ、全市ニ医薬ノ香瀾<sup>シ</sup>シ、移転後ノ政府機関ハ勿論、私人ノ宅マデ強制的ニ病室ニアテラレタ状態』ナリシヲ以ッテ、コレヲヨリ生ズル死者マタ尠カラズ。コレヲ市内ニ於テ埋葬セラレタルハ明ラカナリ。』

また、石松政敏氏(第二野戦高射砲司令部副官)は、「なお太平門外の深い壕(地隙)に在った死体は千以下であり、城壁曲折部の百近い死体は、爆雷(手榴弾か)によるもののように、戦闘行為による死者と思う」と述べている。歩九第七中隊長・西浦節三氏(42期大尉)も「十三日右側支隊の紛戦救援のため急派され翌十四日歩九に復帰する途中太平門外を南進するとき地隙内にかなり多くの中国兵の死体が集められていたのを見た。しかし、それらは丁重に並べられていたことから紫金山の戦闘で戦死し、後送収容されたものである」と述べている。

石毛 源 「江南戦線」昭和14年

城壁に脚絆つなぎてさがりをり つたはり逃げし敵のさまおもふ

『昭和万葉集秀歌』講談社現代新書より



挹江門・昭和12年12月14日午後 第十軍参謀・谷田勇大佐撮影

第十軍司令部は14日朝、秣陵関を発し雨花台の麓を過ぎ中華門を通過して正午やや過ぎ南京路の上海儲備銀行に司令部を置いた。私は司令部が落ち着いたところで午後3時ごろ衛兵一分隊を従え車を駆って南京市街を巡回したが、街路はすでに平靜に帰っていた。ただ下関付近には千以上の平服も交じった屍が横たわり、莫愁湖に若干の死体の浮かぶのを見た。この挹江門と上海路のスナップ(385ページ)はそのとき、すなわち14日午後3時ごろ、谷田みずからが撮影したものである。(当時、第十軍参謀・大佐・谷田勇<sup>27</sup>期投稿)



## 二、歩兵第十九旅団の中山門入城と城内外掃蕩

### 1、中山門入城

歩兵第二十聯隊は十三日早朝中山門を占領した。そして中山門近くの城壁の破壊地点から歩二〇（第一、第二大隊）と歩九（第二、第三大隊）が入城した。

ついで、第十六師団は中山東路以北、中山北路以東の地区を掃蕩し、第九師団（歩三五）は中山東路以南の地区の掃蕩を担当した。また歩九と歩二〇の境界は城内鉄道とし、歩九はその東側、歩二〇はその西側の掃蕩を担当した。歩九、歩二〇共に担任地区を掃蕩後、歩二〇第一大隊の第一線は中山北路の線に進出し、歩哨を配置して入城第一夜を迎えた。歩九の第一大隊は、紫金山南麓の掃蕩を担当し、歩二〇の第三大隊は師団の予備となり鉄匠營に集結した。

十四日未明、師団は城内外の掃蕩区域を南北に二分し、北部を三十旅団、南部を十九旅団の担当とした。南部を担当した歩九第二、三大隊と歩二〇の第二大隊は十三、十四の両日も、一部をのぞきほとんど銃火を交えることなく掃蕩を終えた。

北部を担当した歩兵第三十旅団は前に記述したとおり、掃蕩を実施した。

こうして師団は十四日中に城内掃蕩を終了し、十五日から十七日までの間は主として城外掃蕩を実施した。

師団司令部は十五日に入城して当初、中央飯店に入ったが不便なため、国民政府の総理府跡に移動し、城内外の警備を指揮した。中島師団長は蒋介石の公邸に入ったが、電気・水道は不通、井戸水も悪くて使用できず、中央飯店で

食事をとったという。

### 2、城内の掃蕩

旅団は、中山東路以北、中山北路以東を掃蕩することになり、掃蕩区域のほぼ中央を南北に走る軽便鉄道線以東を歩九、同線以西を歩二〇に担当させた。

歩九は、第二大隊をもって鉄道線路に沿う地区を、第三大隊をもって城壁に沿う地区（富貴山から鶏鳴寺付近一帯）をそれぞれ二回掃蕩したが、富貴山砲台で大量の遺棄兵器を押収したのみで敗残兵はほとんど見かけなかった。この地域は、建物が粗散であり、敗残兵が潜伏できる状況ではなかった。

軽便鉄道線以西の掃蕩を担当した歩二〇の第一大隊は、第四中隊を除き戦果はほとんどなかった。

第四中隊（中隊長・坂清<sup>46</sup>期中尉）は、『陣中日誌』の十二月十四日の項に「午前十時ヨリ第二次掃蕩区域ノ掃蕩ヲ実施ス、敗残兵三二八名ヲ銃殺シ埋葬ス」と記してあるように、三二八名の敗残兵を摘発し銃殺した。またこの時、小銃一八〇、拳銃六〇等を押収した。

同中隊増田六助氏（第二小隊第二分隊長）の手記によると、十四日の状況を「大きな建物から六百近くの敗残兵を玄武門近くに引き立てて銃殺した」と記しており、前記『陣中日誌』の記述と符合する。

中山門方面の入城後の状況は、参戦者等の証言等によると次のようである。

城内掃蕩では、難民区以外の城内には殆ど住民を見ず、婦女子は煉瓦壁のある建物（金陵女子大学か）に收容され、難民区には多数の中国人が集合していたが、入城当初から立入禁止区域として嚴重に警戒されていた。

佐々木元勝日記に「軍政部の前通りから数丁の間、真に驚くべき兵の殲滅が行われたらしく、死体は殆んど片付けられているが、鉄兜や衣服が狼藉を極めている。ここで、二、三万の兵が一時に掃殺されたものであろう」と早合点しているが、後日の日記には改めて「中国兵が衣服を脱ぎすてて逃走した跡にすぎない」と訂正している。

十六師団参謀長・中沢三夫氏と同師団副官・宮本四郎氏は、それぞれ東京裁判における口供書遺稿においてともに、「中山門から下関に通ずる公路上には、紺に緑がかった軍服、軍帽、剣、弾入れなどが延々一キロにわたり道路一杯に捨てられていた。これは中国兵が便衣となって難民区に潜入したものである」と述べている。

また、中沢参謀長は、「攻略当時、支那側の行政責任者が全部逃亡して、治安維持の交渉相手を見出すことができず、わが軍で整理するしかない状態であった。日本軍としても、支那住民としても大変不便であった」と歎いている。また、城内に入った歩九・歩二〇の将兵も、口を揃えて城内の静けさを「死の街」と表現している。

### 3、城外掃蕩

十三日午前十時ごろ明孝陵を占領し、次いで遺族学校西方広場に集結した歩九第一大隊は、旅団直轄となり、午後二時より主力をもって紫金山連峯以南本道（湯水鎮—中山門道）以北の地区の残敵を掃蕩することとなった。

そのため大隊は、天文台以西の山頂部に第三中隊主力を配置し、その南斜面に第二中隊を、明孝陵から中央運動場にかけて第四中隊を出動させ、各隊はそれぞれ担当区域を掃蕩した。掃蕩は十四日にも行われたが、紫金山南麓地区にはほとんど敗残兵を見ることはなかった。

十二月十三日早朝、仙鶴門鎮付近に布陣していた攻城重砲兵第二大隊等が、南京を脱出した敵の大軍に襲われた。この為、師団の予備として鉄匠營付近にあった歩二〇の第三大隊のうち第九中隊が応援として派遣された。

翌十四日朝、再び重砲陣地等を襲った敵は撃退され、同日午後白旗を掲げて続々と投降してきた。師団の後方地域を警備中の歩三八の第十中隊及び応援の歩二〇の第九中隊等は、これら大量の投降兵を武装解除し、堯化門付近に收容した。その数は七、二〇〇であった。『歩三八戦闘詳報』、『攻城重砲兵第二大隊戦闘詳報』、歩二〇の『牧原信夫日記』、等）

また、歩二〇の第十二中隊は、十四日朝、馬群付近への増援を命ぜられ、輜重隊を襲撃した約二〜三百名の敗残兵を捕え、応援に來た第三機関銃中隊と共に、これら全員を残敵掃蕩として銃殺した。『牧原信夫日記』、『小戦例集』十五日、歩二〇の第三中隊と第六中隊は、前述の七千二百名の捕虜の監視・護送を命ぜられ、下麒麟門付近の仮收容所に收容した。（歩二〇の『林正明日記』、池田早苗、森英生、富田龍太郎氏の証言）

なお、これらの捕虜は、二、三日後に南京城内の監獄に護送收容されたのである。『野戦郵便旗』、『歩兵第三十八聯隊行動概見表』等）

師団は、十七日の入城式に備え、各旅団に城外の掃蕩を命じた。第十九旅団は、十五日夜掃蕩命令を下達、紫金山南麓一帯を歩九、紫金山東南の平地部を歩二〇の担任とした。

歩九は、十六日第二、第三大隊を並列して紫金山南麓一帯を掃蕩するとともに、紫金山山頂部を警備中の第三中隊をもって上・下旗林付近までを掃蕩した。

歩二〇も、十六日〜十七日、各大隊の一〜二ヶ中隊をもって蒼波鎮を含むその以南地区、第一大隊をもってその以北地区を、それぞれ平野部から東方の黄竜山南北隘路口まで掃蕩した。この地域は、歩二〇が南京を目ざして進撃突破してきたところであり、付近一帯には敗残兵も見あたらず、十六・十七日の往復掃蕩の戦果はなかった。



昭和12年12月15日、16師団司令部の将兵の宿舎と決められた南京中央飯店に到着した司令部一行 師団経理部・金丸吉生軍曹撮影

### 第三節 第九師団の光華門占領と城内掃蕩

#### 一、第九師団の作戦経過の概要

(要図20参照)

第九師団の歩三五、歩七は十二月十一日中山門東方五百メートルの稜線から工兵学校西側護城河の線に進出、歩三六は十日夕以来一部を以て光華門の一角を占領、歩一九は雨花台の曾家門陣地を十日から十二日払暁に亘り攻略した。

右翼隊 (歩兵第六旅団基幹 長秋山義兌少将)

右翼隊右第一線 (歩三五基幹)

中山門東南方の陸軍兵營付近の城壁を占領し、中山門より城内に進入する

右翼隊左第一線 (歩七基幹)

工兵学校前面、中山門―光華門中間地区の城壁を占領し、その破壊口から城内に進入する

左翼隊 (歩兵第十八旅団基幹 長井出宣時少将)

歩兵第三十六聯隊基幹、光華門を占領する

歩兵第十九聯隊基幹、雨花台から転進して、歩兵第三十六聯隊を増援し、その後同聯隊を超越して光華門から城内に進入する

当時、師団に協力する戦車第五大隊 (長細見惟雄<sup>25</sup>中佐) と軍砲兵隊は後方を鋭意追及中であつた。いち早く光

華門正門に進出した歩三六第一大隊は、九日払曉以来、実に三十六時間におよぶ激戦の末、十日午後五時ごろ決死隊によって光華門城壁の一部を占領し、一番乗りの日章旗を揚げた。

その後、十一、十二日にわたり、戦果の拡張にとめたが奏功せず十二日、軍砲兵による城壁破壊射撃の成果を利用して突入を準備中、敵が退却を開始したので、十三日午前六時ごろ光華門両側の城壁を完全に占領した。

右翼隊（歩兵第六旅団）は、十一日概ね中山門東方五百呎の稜線から、工兵学校西側クリーク（護城河）の線に進出したが水濠に阻まれた。十二日、軍砲兵が城壁に破壊口を概成して突撃を準備したが、夜半中国兵が退却したため、十三日六時ごろ、中山門南側の城壁を占領した。

こうして、十三日午前八時ごろまでには、師団の全正面にわたり、城壁に部隊を進めることができた。その後、右翼隊（第六旅団）主力をもって城内掃蕩に任じたが、左翼隊の歩兵第十九聯隊は十時ごろ光華門から城内に進入し、東南部を掃蕩して通済門西側地区に兵力を集結した。

『第九師団作戦経過の概要』（昭和十三年一月、第九師団参謀部）によると、淳化鎮―南京占領間の彼我の損害は次のとおりである。

我軍 死者 将校以下 四六〇名

負傷者 将校以下一、一五六名

敵軍 死体 四、五〇〇名

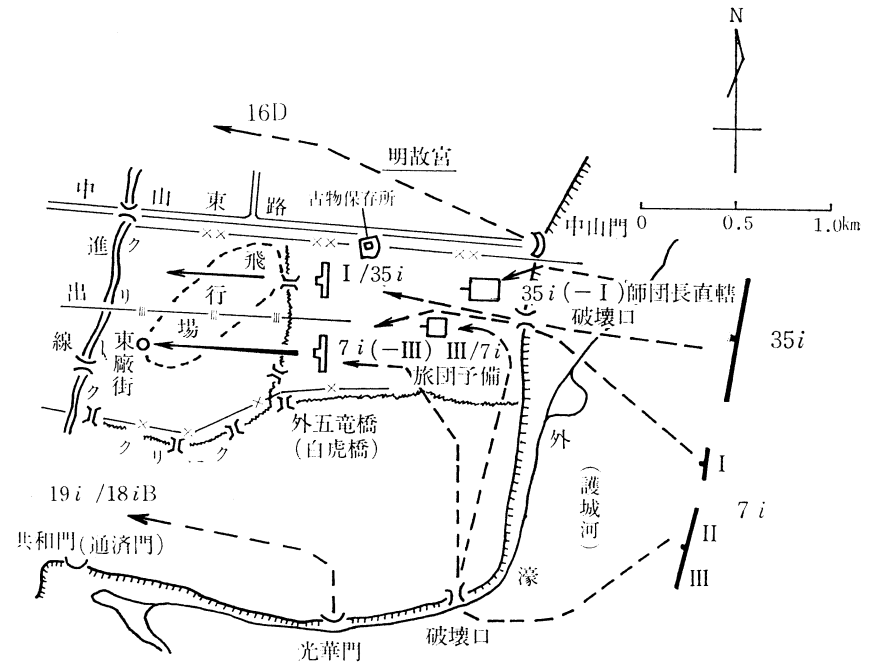
このほか、城内掃蕩で約七千余の敗残兵を殲滅した。

鹵獲兵器 MG一二挺、戦車七輛、LG一四挺、小銃四二〇挺、迫撃砲五門、歩兵砲四門、機関砲一門、飛行機四

機、手榴弾約二五、〇〇〇、小銃（MG）弾約四十万発、迫撃砲弾約七千発、火薬庫六棟。

（注）遺棄死体数四、五〇〇は淳化鎮―光華門正面の敵約二ヶ師からみると、過大である。

要図20 歩兵第6旅団城内進入要図  
12月13日午前



二、左翼隊第一線、歩兵第三十六聯隊の光華門占領

聯隊は九日払暁、その第一大隊をもって光華門正面に進出した。

光華門は門扉を堅く閉じ、外濠幅約三十五呎、深さ約四呎、城壁の高さ約十三呎。門に通ずる道路は対戦車壕ならびに五条の拒馬をもって阻絶し、道路の両側は水際に至るまで鉄条網を張りめぐらし、城門の両側、城壁には十数個の機関銃眼を設けて堅固に守備していた。

聯隊長はまず配属山砲二門に城門の破壊射撃を命じたが携行弾薬が少なく、門扉の一部を破壊したのみで突撃路を開設するには至らなかつたので、工兵による爆破を行うこととした。小坂工兵大尉指揮の決死隊は、軽装甲車と伊藤善光大隊の支援射撃のもとに、拒馬を排除して、二回にわたり爆破を行ったが、爆薬量が足りず不成功。さらに午後八時ごろ、爆薬量を増加して行ったが完全な突撃路を開くことはできなかった。

この間、雨花台方向からの敵の砲撃が盛んとなり人馬の死傷が増加したが、右第一線の第一大隊は工兵の作業を支援して光華門に対する突撃を、左第一線の第二大隊は通済門に対する攻撃を準備し、予備隊の第三大隊は、防空学校の西南方に対し警戒しつつ夜を徹した。

九日午後から夜にかけて、敵兵の逆襲夜襲が盛んとなり、そのうえに敗残兵が城外から光華門に入ろうとして四辺に充満し、敵の銃砲火も激しくなった。さらに、雨花台および紫金山方向からの敵砲兵の集中射撃を受け、わが軍の損害はさらに増加した。

翌十日、七堯橋の旅団司令部と聯隊との連絡は杜絶し、この間に取り残されている敵陣地や充満している敗残兵のため、命令受領者や電話線補修作業の通信兵も相次いで死傷するありさまであった。旅団副官・武田丈夫<sup>35期</sup>大尉が、

山砲弾薬五百発と機関銃弾を軽装甲車によって敵中を突破して補給し、ようやく旅団司令部との連絡もとれるようになった。

弾薬の補給をうけた聯隊長は、配属山砲に城門射撃を命じ、さらに第一大隊に対しその成果を利用して十日午後五時三十分を期して城内突入を命じた。

午後三時、山砲の直接照準によるツルベ射ちの破壊射撃によってやっと城門の上部を閉塞していた土囊がだんだん崩れ落ちて急な斜面ができあがり、午後五時やや前に辛うじて突撃路が開設された。

この時、敵の重迫撃砲弾十数発が観測所、戦闘指揮所付近に集中して屋根は崩れ、耳は聞こえず、目は眩み、濛々たる爆煙に包まれたが、敵の砲撃がわが戦闘指揮所に集中している好機に乗じ、伊藤大隊長は独断突入を命じ、第一中隊、ついで第四中隊が突入を敢行して、午後五時ごろ光華門（前門）に日章旗を打ち立てた。

しかしながら、城門内に突入した大隊主力は、敵の集中射撃を浴び伊藤義光大隊長戦死、逆襲する敵と手榴弾戦を交えるなど肉弾相搏つ悲惨な戦況となったが十一、十二日と、土囊を積み上げ木材などで被った掩壕を急造して占領した陣地を死守した。

十二日午後二時ごろ、通済門正面の攻撃を担当していた第二大隊が救援にかけつけ、弾薬食糧も補給されて将兵の志気は大いにあがった。同日夜半から敵の銃声、手榴弾投擲も次第に減少し、十三日午前四時にはまったく聞こえなくなった。偵察の結果、中国軍が退却していることが判明したので、城壁上に躍りあがり「一番乗り」を喜びあった。後日、聯隊は派遣軍司令官から感状を授与され、陣頭に立って突入した山際喜一少尉は、朝香宮殿下から佩刀を賜わった。

本戦闘における歩三六の戦死二百五十七名、負傷五百四十六名。

この戦闘で軍砲兵隊は、陣地を推進して城壁の破壊射撃を行った。佐々木孟久氏（31期野戦重砲兵第十五聯隊第二大隊長）の証言によると、

「大隊（十四年式十加八門・二ヶ中隊）は十二月九日、南京城外に進出して、紅土山―安五菅に陣地を占領し南京城攻撃を支援したが、軍命令により次の射撃禁止区域が指定された。①中山陵、②明孝陵、③城内の外国領事館、④住民の収容施設（これらは地図に朱書されていた）。

大隊はこれらを避けて射撃したが、戦場付近には住民は一人も見当たらなかった。

十一、十二日両日、城壁の破壊射撃をおこなったが破壊できなかったので、陣地を強行推進し土橋第四中隊は城外・大校飛行場に放列を布置、眼前千八百呎の城壁に直射弾を浴びせ、光華門東側に傾斜四十五度の突撃路を開設し、脇坂（歩三六）部隊はこの破壊斜面を登って、南京一番乗りを果たした。」

なお、榎木義雄氏（野戦重砲兵第十聯隊・観測掛伍長）は、「九日から十日正午までは、降伏勧告に対する回答を待って射撃（四年式十五榴二十四門・六ヶ中隊）を中止したが、敵は構わず猛射を浴びせてくるので、多くの死傷者が出た」と述べている。

### 三、左翼隊、歩兵第十九聯隊入城後の状況

（要図21参照）

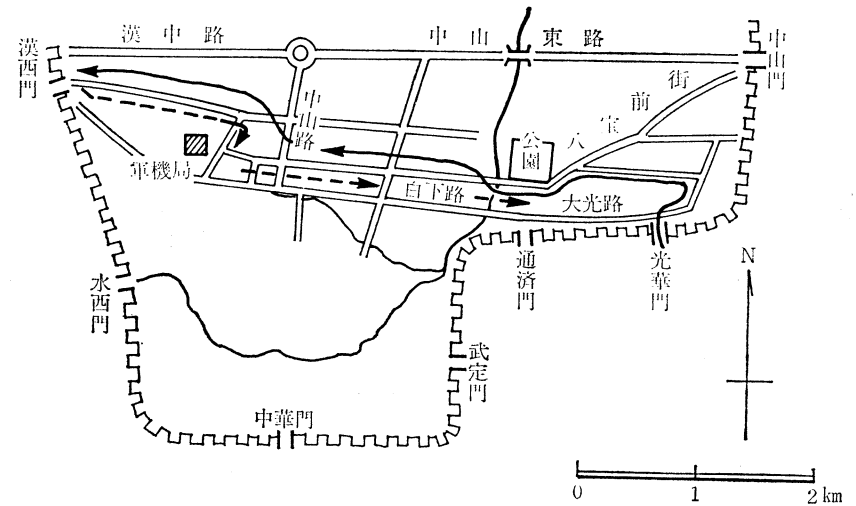
歩兵第十九聯隊は、光華門を占領した歩兵第三十六聯隊を超越して城内に進入し、主として通済門西北側の城壁に沿う地区を掃蕩し、同地区の民家に宿営した。

土屋正治氏（46期歩一九第四中隊長）は次のように証言している。

「十三日、脇坂部隊を超越して、聯隊の先陣として進入し、公園付近から大光路、白下路付近を掃蕩した。

要図21 歩兵第19聯隊第4中隊城内掃蕩經過要図

12月13日



注 第四中隊長・土屋正治氏の日記に記述されている地域

城壁こそ砲撃によって破壊されていたが、街並みの家々は全く損壊しておらず、瓦一つ落ちていない。ただ無気味な静寂、異様な寂莫感がわれわれを包み、勇敢な部下も一瞬たじろいだ。未だかつて味わったことのない、言葉では表わせないこの静けさは、いつのまにか私を中隊の先頭に立たせていた。

市街に深く進入すればするほど、まさに『死の街』という感じを深くした。敵弾の飛来はもちろん、人影一つ見えず、肅然とした軒並みのみが果てしなく続いていった。何きぐらい前進したであろうか。とある大きな鉄筋コンクリート造りの建物に到達したが、ここで全く思いがけぬことに遭遇した。

それは、講堂らしい室内に入ると、後送の余裕がなく取り残された中国重傷兵の枕辺に、多数の白衣の看護婦が毅然として立っている光景であった。私は深く頭を垂れてそこを退去した。戦闘を覚悟して入城したのだが、この日は無血のうちに夕刻を迎えた。

歩一九、歩三六に関する限り、十三日の城内進入後は戦闘行為はなく、捕虜を捕えたこともない。

十九聯隊主力(第二大隊は湯水鎮の警備に派遣)は、城内掃蕩後、通濟門北西地区に集結し、三十六聯隊は光華門外の防空学校付近に集結し、一部をもって城門付近の掃蕩に任じた。

城内進入後、十二月三十一日までの間、私の中隊は聯隊主力と離れて行動し、雨花台の戦闘で敵陣に突入後行方不明になった一名の兵を捜し求めて、城内全域を歩き回ったが、城内で死体はほとんど目にしなかった。

ただし、時折り、難民区から摘発された中国兵がどこに行くのか、トラックに乗せられて走って行く光景を目撃した。

また、安川定義氏(歩一九第一大隊本部附軍曹、のち中尉)は、

「光華門より入城して城壁に沿い西面して掃蕩したが敵兵を見ず、銃火を交えることはなかった。公園路付近(西

方の道路か?)で民服を着た遺棄死体を散見した。……日時は定かでないが、西島剛大隊長に同行して中山路から掘江門を出て下関に行ったが、門外の道路南側で中国兵の死体が累々と連なっているのを見た。」と述べている。

内山正良 「ことだま」昭和16年8月

数多<sup>あまた</sup>なるいのち死なしめし城壁の崩れ仰ぐに二間<sup>けん</sup>に足らず

『昭和万葉集秀歌』講談社現代新書

#### 四、歩兵第六旅団の城内進入と掃蕩

(要図20、22参照)

右翼隊右第一線 歩兵第三十五聯隊

中山門正門の敵陣地は、城壁から約千百呎の線を第一線とし、鉄条網を有する三線の陣地を構築していた。聯隊は十二月十一日午後二時、敵の第一線陣地を突破後、引き続き力攻して全陣地を奪取し、城壁上の敵と相対したが、敵守備兵力は予想外に僅少と判断された。

十二日夜、敵の射撃は次第に衰えつつあり、十三日午前五時三十分将校斥候を派遣すると敵はすでに退却、城壁上に敵兵なきを知り、午前七時第二中隊は中山門を完全に占領した。聯隊主力は、中山門左側三百呎の城壁の破壊口をよじて城内に進入、まず飛行場を占領した。

右翼隊左第一線 歩兵第七聯隊

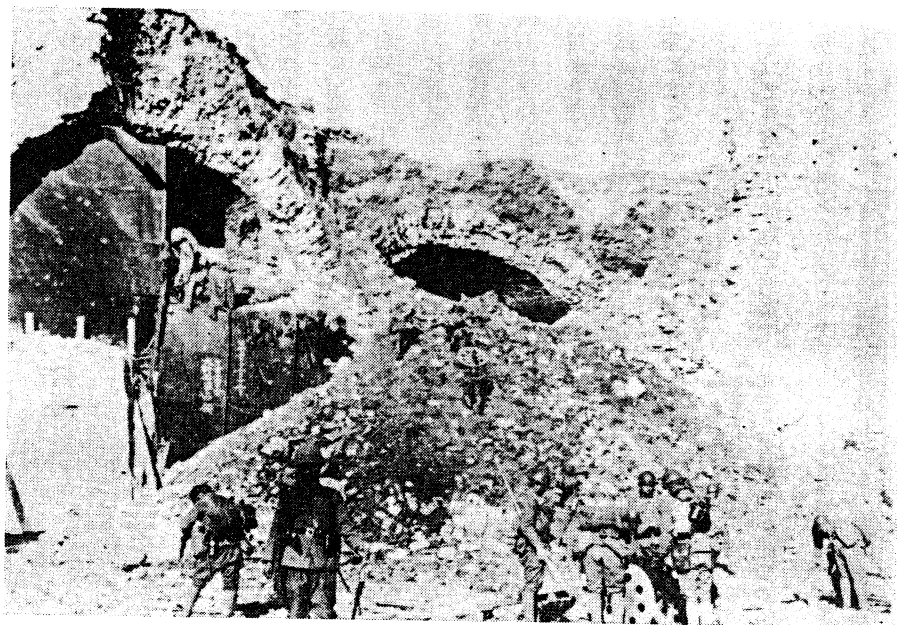
十一日午後工兵学校とその周辺五〇・五高地を占領した聯隊は、夕刻までに城壁に近接し攻撃を準備した。城壁は高さ二十七呎あり登るのが困難なため、翌十二日からの野戦重砲の破壊射撃に期待することとしたが、この間、退路を失った敵が、数十名ずつの一団となり城壁の外を右往左往しているのを撃滅した。

十二日、砲撃による城壁破壊口が二カ所開設せられ(要図20)、第一線は城壁前四〇五百呎の線にあって突撃の機を窺った。

この間斥候を以て外濠の徒渉点を偵察中、たまたま敵兵が徒渉するのを目撃する幸運に遭い、外濠の突破に支障のないことが分かった。

十三日暁方近くなるに従って、敵の銃声が沈静し、その退却を察知したので、第一線各中隊は一斉に破壊口から





主に二十四榴の射撃効果による中山門付近城壁破壊口



城門扉の文字

攀登を開始して城壁を完全に占領した。

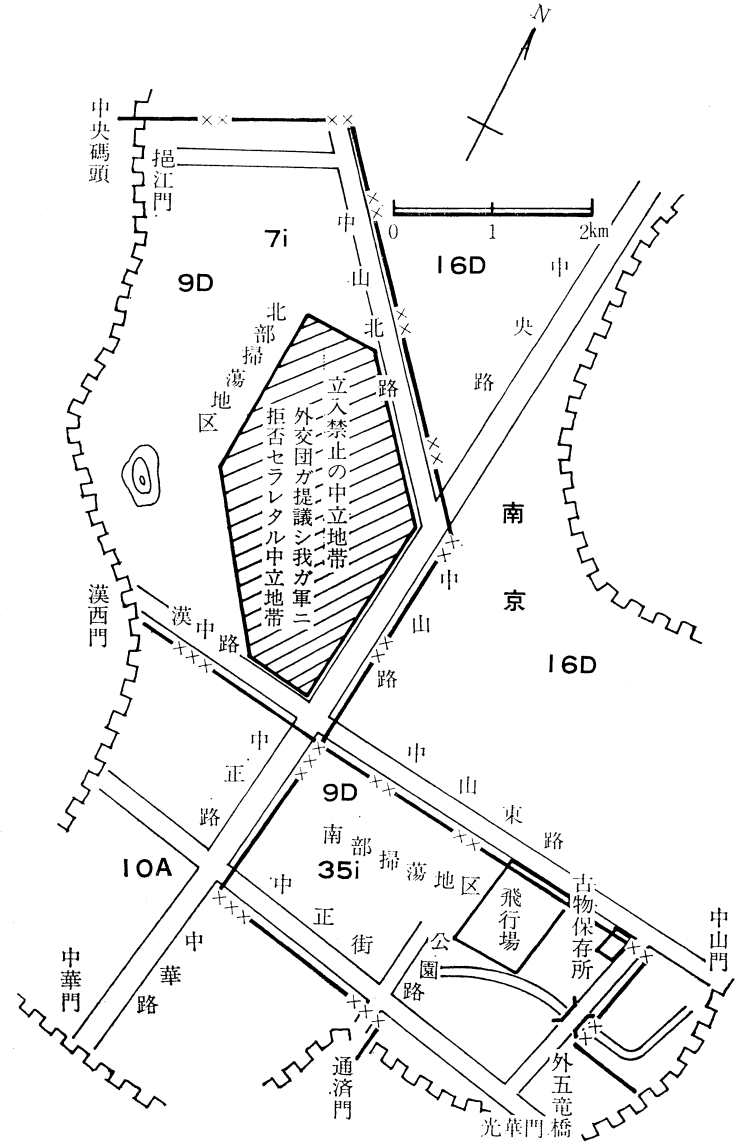
この朝期せずして、中山門には三十五聯隊、光華門には三十六聯隊、そして今この城壁上には我が七聯隊の日章旗が翩翩とひるがえり、將兵の感慨一入深いものがあつた。

そして旅団は、「城内進入に関する旅団命令」にもとづき城内に進入し、歩七は北部掃蕩地区（中山北路以西、漢中路以北の地域）、歩三五は南部掃蕩地区（中山東路以南、中正路以東の地域）の掃蕩を担当したのである。

なお中山門付近城壁三カ所の破壊口の開設は、主として難路を冒して上海から推進してきた攻城重砲兵第一聯隊第一大隊（長小笠原勝国<sup>28期</sup>少佐）の四五式二十四榴二門と重砲兵学校編成の臨時攻城重砲兵中隊（長岡田皓一<sup>36期</sup>大尉）の試製九六式二十四榴一門の射撃効果によるものである。

また、一カ月の日子を費やして上海から人力で輓曳して来た独立攻城重砲兵第五大隊（長鈴木茂<sup>29期</sup>少佐）の十五白のうち六門が、中山門付近の中国軍陣地を砲撃した。

要図22 第9師団歩兵第6旅団城内掃蕩地区割要図



城内進入に関する旅団命令

(要図20、22参照)

師団の右翼隊である歩兵第六旅団(旅団長・秋山義允少将)は、十三日早朝中山門以南の城壁を占領したが、午前十時ごろ要旨次のような旅団命令を下達した。

- (1) 旅団は当面の敵を撃破して、中山門西方約二キ、南北に流れるクリークの線に進出する。
- (2) 第十六師団との戦闘地境は中山路とし、中山路は第十六師団に属する。  
左翼隊(歩三六・歩一九)との戦闘地境は、外五竜橋(白虎橋、中山門西方約一キ)およびその西方クリークの線に延伸する。線上は左翼隊に属する。
- (3) 歩三五(第一大隊欠)は中山門西南方地区に集結して、師団長の直轄となり、第一大隊は右第一線となって、中山路(注・中山東路の意)に沿う地区をクリークの線に向かい進出する。
- (4) 歩七(第三大隊欠)は左第一線となり、なるべく速やかに外五竜橋以北の地区に転移し、クリークの線に進出する。
- (5) 両第一線の戦闘地境は、飛行場中央を連ねる線に延伸する。
- (6) 両第一線聯隊は、特に有力な一部をもって前進地域を掃蕩する。城内の戦闘にあたっては、「南京入城に関する軍司令官注意事項」により、特に古物保存所に立ち入ることを禁じ、その保存に注意すること。
- (7) 戦車第一中隊は、中山道(注・中山東路の意味)西南側に集結して待機せよ。

### 「南京城内の掃蕩要領」

- (1) 城内の残敵掃蕩に関しては、入城に関する注意事項を厳守せよ。ただし敵が抵抗する場合はこの限りにあらず。
- (2) 敵が抵抗する場合、家屋の焼却には特別の注意を払うこと。
- (3) 発電所、電気局、郵便電信局、水源地、瓦斯会社、諸倉庫、工場などは、速やかに占領し、敵の破壊焼却を予防すること。

遁走する敵は、大部分が便衣に化したものと判断されるので、その疑いある者は悉く検挙し、適宜の位置に監禁せよ。

- (4) 国旗等で先頭、側方等を標示せよ。
- (5) 地雷、爆破装置、毒瓦斯、毒物投入等に注意せよ。
- (6) 軍用資源を調査し、必要に応じ、これに監視兵を付するとともに、速やかに報告せよ。
- (7) 注意事項の履行が補助憲兵だけでは困難な場合は、掃蕩隊長直轄の下に多数の巡察を派遣し、その目的を達せよ。

### 「掃蕩実施に関する注意事項」

- (1) 軍司令官の注意事項を一兵に至るまで徹底させた後、掃蕩を実施せよ。
- (2) 外国権益の建物は敵がこれを利用してしている場合のほか、立ち入りを厳禁する。重要な箇所には歩哨を配置せよ。
- (3) 掃蕩隊は残敵掃蕩を任とし、必ず将校（准尉を含む）の指揮する部隊をもって実施し、下士官以下各個の行動を絶対に禁ずる。

- (4) 青壮年はすべて敗残兵または便衣兵とみなし、すべてこれを逮捕監禁せよ。青壮年以外の敵意のない支那人民、とくに老幼婦女子に対しては寛容の心をもって接し、彼らをして皇軍の威風に敬仰させよ。

- (5) 銀行、銭荘等には侵入を禁止し、歩哨を配置せよ。
- (6) 家屋内に侵入し掠奪に類する行動を厳に戒め、必要以外の物品を濫用廃棄してはならない。
- (7) 放火は勿論、失火といえども厳罰に処する。
- (8) 合言葉は「金沢」、「富山」と定める。
- (9) 掃蕩実施部隊は、師団長が特に選抜した部隊であるから、軍紀を厳にし、その行動を慎重にせよ。
- (10) 火災を発見したならば、掃蕩隊は消火につとめよ。

この命令に基づいて、右第一線、左第一線部隊は午前十一時三十分過ぎから行動を発起し、敵の攻撃を受けることなく午後一時頃までに命ぜられたクリークの線に進出した。

これよりさき、戦車第一大隊第一中隊（長城島大尉）は、第十六師団の戦闘に協力し、十三日午前八時三十分中山門外に進出したが、中山門到着と共に、第九師団歩兵第六旅団に配属された。同中隊は、前に述べたように中山門の土囊排除作業の完了するのを門外で待機していた。

### 「城内掃蕩に関する命令」

（要図22参照）

ついで歩兵第六旅団長は、十三日午後四時三十分掃蕩のため「第六旅団作命第三百三十八号」を下達した。その要旨は次のとおりである。

- (1) 歩兵第七聯隊（戦車一ヶ中隊Ⅱ一小隊欠、工兵一ヶ中隊Ⅱ一小隊欠を配属）は北部掃蕩隊となり、別紙にしめす



## 五、歩兵第七聯隊の城内掃蕩

(要図22、23参照)

十二月十三日(晴)の掃蕩行動

歩兵第七聯隊は午前十一時三十分、旅団命令を受領し、直ちに右より第二、第一大隊(第四中隊欠)を第一線とし、第四中隊を聯隊予備として追撃に移り、午後一時ごろにはおおむね城内のクリークの線に進出した。旅団予備となっていた第三大隊は、午後三時ごろ飛行場西端付近に到着して聯隊に復帰した。

中山門外に待機していた戦車第一中隊は、午後四時過ぎ土囊の除去作業が完了したので、戦闘車輛のみ中山門西方約一キロの古物保存所付近に兵力を集結し、歩兵第六旅団の直轄となつて掃蕩を準備した。

歩兵第七聯隊は、各大隊に工兵一ヶ小隊を配属して地雷、障害物の排除にあたらせるとともに、担任区域を示し掃蕩にあたらせた。各大隊は掃蕩に兵力の三分の二を使用し、その余は予備隊として「東廠街」に待機した。各大隊は十三日午後三時前後には、一応の掃蕩を終わって帰還した。

平本渥氏(第二中隊第三小隊現役兵)の証言

「夜半過ぎまで烈しく抵抗した敵の射撃も、次第に潮が引くように遠退いて朝靄の中を城壁突入を目指す各部隊の影が動く。中山門寄りの破壊口を、一人二人と蟻のように攀登って行く。城壁下の濠を左回りして行くと、水濠には浮きあがった魚が白い腹を見せている。先を越されてなるものか、駆ける足が宙に浮く。ようやく城壁上に躍り出

て、先陣の仲間と万歳三唱。

ここから中山門までは約二百五十呎、その間には人影は全くなく、旗も立っていない。城門から約百呎手前で、城内へ斜降する道があるので、そこから一目散に走りおりて城門に着いた。門内に入ってみると、衛兵の番所らしい土間があり、囲炉裏に釣り下げられた大きな鍋の中には野菜のゴツタ煮がある。これを頬張り、飛行場を横断して、中隊は市街掃蕩の先陣を進む。私たちはただ、無我夢中で前進した。

夕闇迫るころ、難民収容所らしい司法行政院に行くと、真っ暗な建物の中には多数の難民たちが、揺らぐローソクの灯りの中でうごめいている。私たちは、施す術もなくそこを出る。

大通りを走りつづけて行くと、右方に立派な近代建築の四階建ての外交部の建物が見える。ここには中国軍の負傷兵が充満していた。翌日、中隊がこの建物の前を通過した時には、某部隊警備隊という分厚い表札が掛かって、日本の衛兵が着剣して立哨していた。あの外交部の建物に満ちあふれていた中国兵、負傷者たちは、友軍の医療をうけていくことである。

掃蕩中、宏壮な蔣総統秘書長の豪邸が、ひっそり閑として人の気配もなく、主のない悲哀と戦争の無情を暗示していた。」

\*

戦車第一中隊は、これよりさき、「湯水鎮付近に多数の敗残兵が出没しているので、戦車一ヶ小隊を湯水鎮に派遣し、軍副官の指示を受けよ」という旅団命令を受領し、一ヶ小隊を同地に派遣した。中隊主力は午後六時五十分ごろ古物保存所を出発、中山東路を前進して午後七時二十分ごろ中央十字路に達し、ここで停止して歩兵の掃蕩行動を支援した。

当時の状況について、戦車第一中隊長・城島越夫氏は次のように述べている。

「残留住民は家の奥の方にはいたようであるが、街路両側の民家は戸を締めており静かであった。本道上には障礙物はなかったが、中央ロータリーのところにトーチカ式の銃座があった。

一触即発のような緊張した状態ではなく、注意しながら前進したが、敗残兵と銃火を交えることもなく、示威行進で、歩兵の支援後援、精神的支援にすぎなかった。午後九時三十分ごろ古物保存所南側の車庫に帰還した。」

#### 十二月十四日（晴）の掃蕩行動

歩兵第七聯隊長・伊佐一男<sup>23</sup>大佐は、十三日午後九時三十分、東廠街の聯隊本部において、十四日の掃蕩に関し、大要次のような命令を下達した。

- (1) 各大隊の掃蕩区域は別紙要図（要図23）のとおり。掃蕩に使用する兵力は、歩兵中隊と機関銃中隊を主とし、必要に応じ他の部隊を用いる。
- (2) 掃蕩は午前九時宿営地を出発し、夕刻までに帰還する。掃蕩隊の服装は軍装にして背囊を除く。
- (3) 掃蕩にあたっては、旅団長の「掃蕩に関する注意」を厳守し、掃蕩の結果は各大隊ごとに取りまとめて報告すること。
- (4) 戦車中隊（第一小隊欠）は、午前十時宿営地を出発し、担任区域外周に沿う主要道路（中山北路、漢中路）を掃蕩して帰還せよ。
- (5) 工兵中隊（第一小隊欠）は一部を残置し、主力は午前八時宿営地出発、担任区域内の重要道路および広場の地雷をさがし出して撤去せよ。

(6) 各隊は、その担任区域内に衛兵を配置して、警備と軍紀風紀の保持にあたれ。これがため、しばしば巡察を派遣し、また、外国の建物、銭荘等には歩哨を配置せよ。衛兵の交代は毎日午後三時とし、その服装は軍装とし、立哨中のものは背囊を除く。

十四日の掃蕩実施間、歩兵第七聯隊長は、大要次のような「捕虜、外国権益に対する注意」を下令し、徹底を図った。

- (1) 担任区域内には、無用の軍人の立入りを厳禁し、歩七以外の部隊の勝手な行動を絶対に禁止せよ。
- (2) 各隊の捕虜は、その担任地区内の一カ所に收容し、その食糧は師団に請求せよ。
- (3) 歩兵第七聯隊は城内に宿営するのではなく、掃蕩隊として入城したものである。掃蕩が完了したならば、城外に出ることを忘れてはならない。
- (4) 外国権益内に敗残兵が多数いるの見込みであるが、これに対しては語学堪能者を選抜してあたらせるから、各隊は外方より監視しておけ。
- (5) 言語不通のため外国人との間に誤解を生じ衝突するようなことがないよう気をつけよ。

戦車中隊は、十四日午前九時三十分、第四、第二小隊、中隊長車、第三小隊の順序で、古物保存所付近を出発し、中央十字路を経て中山北路を前進し、鼓樓東北の三叉路付近に進出した。

そして、主として歩兵第七聯隊第三大隊の北部地区掃蕩に協力し、多数の捕虜および兵器を鹵獲して、午後五時三十分集結地に帰還した。

捕虜	二五〇名
小銃	二三〇
乗用自動車	五
軽機関銃	一一
側車付自動二輪車	五
対戦車砲	二
人員輸送車	二
機関砲	一
自動貨車	二

この掃蕩間、反抗の気配があった敗残兵約七、八十名を射殺し、残余を捕虜として収容した。十四日の掃蕩について、戦車長・村岡実氏、榎勝春氏は次のように証言している。

「中山路の十字路で停車して警戒中、兵が下車して付近の講堂のような建物に入ると敗残兵らしい者数十名から銃撃をうけて急いで乗車したが、大目玉をくらった。中山路左側の通信隊の兵舎に対しては機関銃の威嚇射撃をおこない、約一五〇名ぐらいの武装兵を捕虜とし、抵抗の気配のあった三、四名を射殺した。敗残兵をおびき出すために銃撃はしたが、戦車砲は使わなかった。

また、本部附草場軍曹は、軽装甲車で歩七との連絡に任じていたが、漢西門外で銃声がするので門の出口まで行ってみると友軍歩兵が、正規兵八十名余りを機関銃で射殺している光景を見た。」

また、戦車中隊長・城島赳夫氏は、敵兵を戦車で蹂躪したなどという憶説を強く否定し、戦車は夜はメクラであるから早目に引き揚げて宿営に帰った、と述べている。

## 十二月十五日（晴）の掃蕩行動

第九師団は十五、十六日にわたり、師団作戦地域内で「官憲徴発」を実施するとともに、掃蕩隊をもって残敵の掃蕩を行った。

歩兵第七聯隊は、五ヶの徴発掩護隊（将校または准尉一、下士官兵三十二名とし、小銃四分隊編成）を編成し、師団兵器部長および経理部長の区処をうけて徴発を実施した。

また、聯隊は新たに軽装甲車一ヶ中隊を配属せられ、各隊は前任務を続行して、速やかに残敵の掃蕩を図った。師団掃蕩隊長の秋山少将は将校の指揮する小銃、軽機各一分隊と、戦車二をしたがえ、歩七、歩三五両聯隊の掃蕩区域を巡視した。

歩兵第七聯隊戦友会機関紙（昭和四十五年六月二十日号）によると、「伊佐聯隊長は十五日午後、西本願寺法主・大谷光昭氏の慰問をうけた。法主は伊佐聯隊長が旧制一高の配属将校当時の学生であった。前夜は湯水鎮の朝香宮殿下の司令部に泊まったとのことで、新聞記者以外の民間人では最初の入城者」と記されている。

## 十二月十六日（晴）の難民区内の掃蕩

歩兵第七聯隊は、難民区内に潜入している敗残兵の掃蕩を引き続き実施した。十五日午後八時三十分発令の「歩兵第七聯隊作戦命令」の大意は次のとおりである。

- (1) 十五日までに捕獲した捕虜を調べたところ、ほとんど下士官兵のみで将校は認められない。将校は便衣に着替えて難民区内に潜入しているようである。

- (2) 聯隊は明十六日、全力を難民地区に指向し徹底的に敗残兵を捕捉殲滅する。憲兵隊は聯隊に協力する。
- (3) 各大隊は明十六日早朝から、その担任地域内とくに難民区の掃蕩を続行せよ。
- (4) 戦車第一中隊、独立軽装甲車第七中隊は待機せよ。
- (5) 聯隊長は十六日午後以降、最高法院西方約一キ、赤壁路の聯隊本部に在る。

こうして、担任地域内の掃蕩は一応終わり、十七日(晴)の入城式、十八日(曇微雪)の陸海軍合同慰霊祭を迎えるのであるが、十九日(晴)、二十日(曇)、二十一日(晴)、二十二日(晴)、二十三日(曇後雨)も一部を以て引き続き掃蕩を実施し、二十四日になって任務を解除せられ第十六師団に申し送っている。

## 六、難民区掃蕩の実態

(要図23、32参照)

『歩兵第七聯隊戦闘詳報』によれば「聯隊の十二月十三日から二十四日にわたる城内掃蕩間の射耗弾は小銃五千発、重機関銃二千発、敗残兵刺射殺数六、六七〇」と記されている。また、莫大な武器を鹵獲しているのが注意をひく。細部は資料集を参照せられたい。

『伊佐聯隊長日記』によれば、

「十二月十四日 朝来掃蕩ヲ行フ。地区内ニ難民区アリ。避難民十萬ト算セラル」

「十二月十五日 朝来担任地域内ノ掃蕩ヲ行フ、午前九時半ヨリ旅団長閣下ト共ニ地区内ヲ巡視ス」

「十二月十六日 三日間ニ亘ル掃蕩ニテ約六五〇〇ヲ敵重処分ス」

と簡潔に記載されているほか、具体的な記述はない。

\*

その後歩兵第七聯隊第二中隊(佐分利隊のちの場合)の昭和八年兵・井家又一氏から日記の提供を受け、難民区掃蕩の実態を初めてつまびらかにすることができた。の場合隊の属する第一大隊は難民区北半部の掃蕩を担当した部隊である。

井家氏の目に映った難民区掃蕩の実態を、その日記によって追ってみよう。

拾貳月拾四日

……南京の避難民は此の地区の外人の建物の大建築にあふれて居る。朝日新聞記者の報にて現場にかけつける。約六〇〇名の敗残兵が外人の建物にあふれているのである。南京落城の為逃場を失つたのである。此の処置を日本大使館に委任す。

拾貳月拾六日

午前拾時から残敵掃蕩に出かける。高射砲一門を捕獲す。午後又出かける。若い奴を三百三十五名を捕えてくる。避難民の中から敗残兵らしき奴を皆連れて来るのである。全く此の中には家族も居るであろう。全く此を連れ出すのに只々泣くのが困る。手にすがる、体にすがる全く困つた。新聞記者が此を記事にせんとして自働車から下りて来る……十重二十重にまし来る支那人の為、流石の新聞記者もつひに逃げ去る。

揚子江附近に此の敗残兵三百三十五名を連れて他の兵が射殺に行つた。

此の寒月拾四日〔注・十二月十七日が満月である〕皎々と光る中に永久の旅に出する者……何かの縁なのである。皇道宣布の犠牲になりて行くのだ。日本軍司令部も二度と腰の立て得ない様にする為に若人は皆殺すので



ある。

憲兵隊が独逸人家屋に侵入を禁ずと筆太く書かれている。市街の何処に行けど日ノ丸の旗が掲げられている。肩に荷いてあるく物<sup>モノ</sup>でさへ旗を手に持つて歩く奴も居るし、又腕に巻きつけている奴も多数あるのである。

拾貳月貳拾貳日

満月の月は日々にかけて行く、夜の寒さは一入身に泌みる。

夕闇迫る午後五時大隊本部に集合して敗残兵を殺<sup>ころ</sup>に行くのだと。見れば本部の庭に百六十一名の支那人が神明にひかえている。後の死が近づくのも知らず我々の行動を眺めていた。百六十余名を連れて南京外人街を叱りつゝ、古林寺附近の要地帯に掩蓋銃座を至る所に見る。日はすでに西山に没<sup>く</sup>してすでに人の変動<sup>変動</sup>が分るのみである。池のふちにつれ来、一軒家にぶちこめた。家屋から五人連<sup>五人連</sup>をつれ来ては突くのである。

\*

また、歩七第一中隊の水谷莊一等兵の日記には次のように記されている。

十三日

引続いて市内の掃蕩に移る。……夥しい若者を狩り出して来る。色々の角度から調べて、敵の軍人らしい者二十一名を残し、あとは全部放免する。

十四日

昨日に続き、今日も市内の残敵掃蕩に当り、若い男子の殆ど、大勢の人員が狩り出されて来る。靴づれのある者、面タコのある者、きわめて姿勢のよい者、目付の鋭い者、等よく検討して残した。昨日の二十一名と共に射殺する。

十五日

行けども行けども、何処迄歩いても衣服は道路を埋め尽し、これを踏みつけては歩き通した。この軍服を脱ぎ捨てた敵將兵が悉く市内に潜伏しているとしたら、城内には夥しい残敵が便衣をまとい好機を狙っているのかも知れない。この点は特に十分な警戒が必要であろう。今日も夕方になって漸く宿舎が決定、難民区の中に、各中隊分散して宿舎に入った。

十六日

各中隊共何百名も狩り出して来るが、第一中隊は目立って少い方だった。それでも百数十名を引立てて来る。市民と認められる者は直ぐ帰して、三六名を銃殺する。

十七日

昨夜十二時頃、非常呼集があつて、第一機関銃中隊は揚子江岸に一、二〇〇名の銃殺に行っていたが、夜に入り、それ迄死体を装っていた多数の相手に包囲され苦戦中との事、急遽出動したが、途中で大隊本部よりの命令で、概ね鎮圧した由、長以下一〇名が応援に行き他は帰る。

\*

また歩七所属のY・N氏（本人の希望により匿名とした）の昭和六十一年一月二十六日付追懐記には次のように記されている。

昭和十二年十二月十六日、難民区内で各中隊定められた区画ごとに辻々に立哨し、掃蕩・摘発した敗残兵と覚しき男たちを一ヶ所に集め、夕刻より命令に従い挹江門外下関に連行しました。連行の方法は、先と後尾に二名位、側衛として左右各四〜五名で包囲しました。私たちが敗残兵も、以心伝心的に下関へ行けば俘虜収容所があつて、

そこへ申送れば用済みと思っていたので、途中逃亡などを企てる者ともなく黙々と行進し、下関へ着いたのは薄暮だったと記憶しております。

私たち以外の部隊もそれぞれ同じように引率して来ており、相当な人数に上りました。およその見当では千単位ではないかと思えます。

下関に着いてからも何をどうするという指示もなく大部時間がたちました。その中何処からともなく刺殺する部隊が出て来、(以下中略)

皓々たる月光を浴びつつ帰途の道すがら小隊長(昭和十三年秋戦死)が、「今からの戦争は、民族と民族の戦いだから……」と私達に話すというよりむしろ、自らを納得させるかのように発言された言葉、今尚耳朶に存している。

なお、『井家日記』『水谷日記』は全文を資料集に収録した。

歩七の掃蕩について高橋編集委員が再度金沢に赴き、歩七戦友会会長ほか参戦者と対談し、次のような談話を聞くことができた。

- (1) 聯隊は城内掃蕩後、速やかに城外の工兵学校付近に引き揚げるように命令されていた。城内では攻撃してはならぬ建物を示され、師団の名譽を傷つけるな、市民を殺してはならぬ、難民区收容所内に立ち入ってはならぬと厳しく注意されていた。また城内で銃を射つと難民が恐れて帰らなくなるので、なるべく射撃するなといわれていた。
- (2) 五台山の麓の收容所には難民が多数收容されていたが、收容所内には立ち入らなかつた。

- (3) 城内進入後、旅団司令部を一時、何応欽將軍の官舎に置かれたことがある。書斎は荒らされておらず、整然としており、日本陸軍の『成規類聚』が置いてあったことを覚えていた。

- (4) 大隊の掃蕩隊は、各中隊から選抜して編成し、約一ヶ小隊ぐらいの兵力であった。私は中山北路を巡察したが、空家で人が居らず、「戦果なし」の報告が多かつた。

- (5) 城内掃蕩で、敗残兵を射殺したとしても、これは戦闘行為である。一般市民を拉致して殺したのであれば、虐殺といわれても致し方ないが、作戦命令による戦闘行動と不法行為とは、きびしく区別することが必要である。

\*

石松政敏氏(第二野戦高射砲兵司令部副官)、松川晴策氏(千葉鉄道第一聯隊下士官)は、下関碼頭で便衣兵三百〇名内外が処分される現場を目撃し、石松氏は、これが「南京大虐殺の実体」だと言う。

石松政敏氏の述懐

「南京大虐殺」の問題点とは、と聞かれますと、私は一言に要約すると便衣兵の処分であると申しあげたい。

南京入城時にはすでに難民区が設けられ、入城後は日本軍の指導により内部の秩序を維持し、この区域への軍人軍属の出入は、選抜された警備隊によって厳禁されていました。南京陥落とともに、中国軍兵が難民区に遁入しましたので、日本軍は治安維持会と協力して、難民には通行票を発行しました。

潜入した便衣兵は、憲兵隊によって摘発され、さらに軍法に照らし審査のうえ、下関で銃殺になったように承知しております。

南京に入城した部隊は、選抜された部隊でした。軍紀維持につきましても、上海戦以来たびたび厳しい要求がな

され、とくに南京入城後、故宮広場での松井軍司令官の訓示は、終生忘れ得ません。

また、残念ながら南京戦における若干の婦女暴行につきましても、慰安所が開設されるまでの短期間に発生した事件であります。中国側が抗議し発表した事実や写真についても、当時の実状とは著しく相違しています。

注意を要することは、郷土新聞社からの従軍記者や写真班が望むがままに、無思慮な言葉を吐き、大勢のなかには刺殺、斬首などの真似をした馬鹿者もおりました。これらの報道が誤解を招いたのだと思います。

城内には多数の外国公館がありソ連公館は鼓楼の西北に、アメリカ、イギリスの公館は挹江門の近くにありました。日本軍が入城後、重機関銃などを使用して捕虜を大量に殺しておれば、外国公館に判らぬはずはなかったと思います。千人ものひとを射殺するとなると、これは大変なことで、もちろん重機関銃でなければならず、この銃声を秘匿することなど、とてもできません。

下関の多数の死体は機関銃によるものですが、南京攻略戦のさいの脱出者、残敵掃蕩戦による戦死者であり、捕虜ではありません。

巷間で伝えられる下関での殺害というのは、摘出した便衣兵処分ではないかと思えます。入城後数日、下関で毎日、捕虜が処分されているという噂を聞き、また実際にその光景を見ました。

岸壁から数本の木製栈橋が、約十数枚、江上に突き出ていました。そのたもとの岸壁には、両手を後ろ手にしばられた便衣兵が三〇四十人蹲っており、栈橋の先には一名の日本兵が待ち構えておりました。一人ずつ歩かせて栈橋の端に来た時、突き落として小銃で射殺していました。

三つの栈橋でやっていったように覚えていますが、当時、浦口への渡船に任じていた工兵の生存者がおれば、その詳細が判ると思えます。

そのうちに、下関で捕虜を殺しているという話がひろがり、外国公館からも問い合わせがあったとかで、下流に移されたと聞きました。

この便衣兵の処分が、「南京虐殺」と言われるものの実体ではないかと思えます。」

#### 松川晴策氏の証言

「私は一下士官として南京戦に参加しましたが、このまま胸にしまって置くことは、後に悔いが残るような気がするのです。今まで誰にも話したことはないのです。家内と相談のうえ、老いの身に意を決してお手紙を差しあげる次第です。

私たちの部隊は、昭和十二年七月二十五日に千葉を出発し、最初北支、ついで上海―南京戦に参加しました。

十二月十三日の南京落城の日には、中山陵の裏側にあたる堯化門というところにいました。大きな気球があたり、南京の陥落を知りました。

その翌日、光華門〔注・中山門の誤りであろう〕から南京城内に入りましたが、街は肅然としており、歩いて中山路を一路北に進み、市内を縦断して挹江門に出ました。途中ほとんど屍体を見なかったが、挹江門付近には相当数の中国兵の屍体が折り重なっていました。

土囊と死体が一緒くたになって、約一丈ぐらいの高さに積み重ねられ、その上を車が通るといふ場面を見ました。しかし、それは、ほんの三〇四層ぐらいです。その付近、道路の両側にも死体があり、その数は百以上だったと思います。

私たちは鉄道聯隊なので、早速、下関駅の復旧業務に従事しました。十五、十六日のことであつたと思えます

が、下関埠頭で便衣兵が一行にならばされ、兵士が次から次へと銃剣で突き刺したり、あるいは銃で撃っているのを見ました。その数は百や二百ではなかったが、千人とはいかなかったことも事実です。何千、何万というような数では絶対にありません。入城式前と記憶していますから、十六日のことかも知れません。

城内は極めて平穏で、すでに市民も帰りはじめ、中山北路あたりは露天商も店を開き、平和が甦ったという感じでした。」

#### 第四節 第三師団先遣隊の通済門および武定門占領

(要図24参照)

鎮江・丹陽付近の警備に任じていた第三師団は、軍命令により一部を南京城攻略に参加させることとなり、十二月十日、歩兵第六十八聯隊(長鷹森孝<sup>20</sup>期大佐)に「天王寺―馬山頭―湖熟鎮―上坊門―南京道ニ沿フ地区ヲ南京ヘ向ヒ急進、第九師団・第一百十四師団ノ中間地区ニ進出シ、南京城ヲ攻撃スヘシ」との任務を与えた。

十一日早朝、軽装となり五<sup>五</sup>の強行軍を開始した鷹森聯隊は、急進して十二日夕刻、上坊門南側地区に到着し、南京城に対する攻撃を準備した。

十三日払暁、第二大隊をもって武定門に対する攻撃を開始しようとしたところ、武定門は、すでに雨花門から進撃した第一百十四師団の歩兵第五百十聯隊が占領していることが判明したので、第二大隊主力を門から入れ、午前九時三十分、武定門とその両側の城壁を確保し、引き続き第三大隊は正面から、第二大隊の一部は城壁に沿って通済門を攻撃、午後零時頃までに門を占領した。

さらに、十三日夕、第一大隊をもって武定門外の火薬庫と陸軍兵營を掃蕩したが、すべて軽戦にとどまった。以後、聯隊は鎮江付近の師団主力に復帰するまでの間、通済門・武定門と、その門外地区の警備に任じた。

飯沼派遣軍参謀長は十二月十一日の日記に、

「3Dノ一部(68i)ヲシテ南京城武定門ヲ攻撃セシメラル。明日正午頃迄ニハ戦場ニ到着シ得ヘシ。道路ノ関係

上師団砲兵ヲ伴ヒ得サルヲ以テ考慮シタルモ軍砲兵ノ一部ニテ協力セシムルコト、シ師団ノ希望モアリ其名譽ノ為ニ参加セシム。」

と記している。上海戦に勇戦した第三師団から代表として鷹森部隊をえらび、「其名譽ノ為ニ」南京攻略戦に参加させたのである。

師団砲兵である野砲兵第三聯隊は十二日午前十一時四十分、各中隊から先遣隊を選抜し、湯水鎮―麒麟門道を急進させたのであるが、句容以西は、道路不良、十三日夕、土橋鎮付近に宿営するの止むなきに至り、南京には偵察將校を派遣したに止まった。

このとき、偵察將校として単騎、武定門から城内に入った第一大隊観測班長・大杉浩<sup>49</sup>期砲兵少尉は、

「十三日だつたと思ひますが夕刻頃、城内に入りました。そこには彼我の戦死体が点々と散在して居ましたが、その中に一人の日本兵が手足を立木に縛られた儘、身に数弾を受けて死んでおりました。私は一見して、俘虜となつた日本兵が支那軍によつて虐殺されたのだと感じ、縄を切つて地上に下ろしておきました。城壁の近くには支那軍の戦死体が相当数ありましたが、常民の死体は見ませんでした。

私は城門から一軒位しか入りませんでした。その間の銀行や官庁には既に憲兵が配置されており、日本軍の立入禁止の札が貼布されておりました。又一般民家も殆んど破壊されておませんでした。私は南京の市街を始めて見ましたが、大体旧態を存してゐると思ひました。火事は少しも見ませんでした。

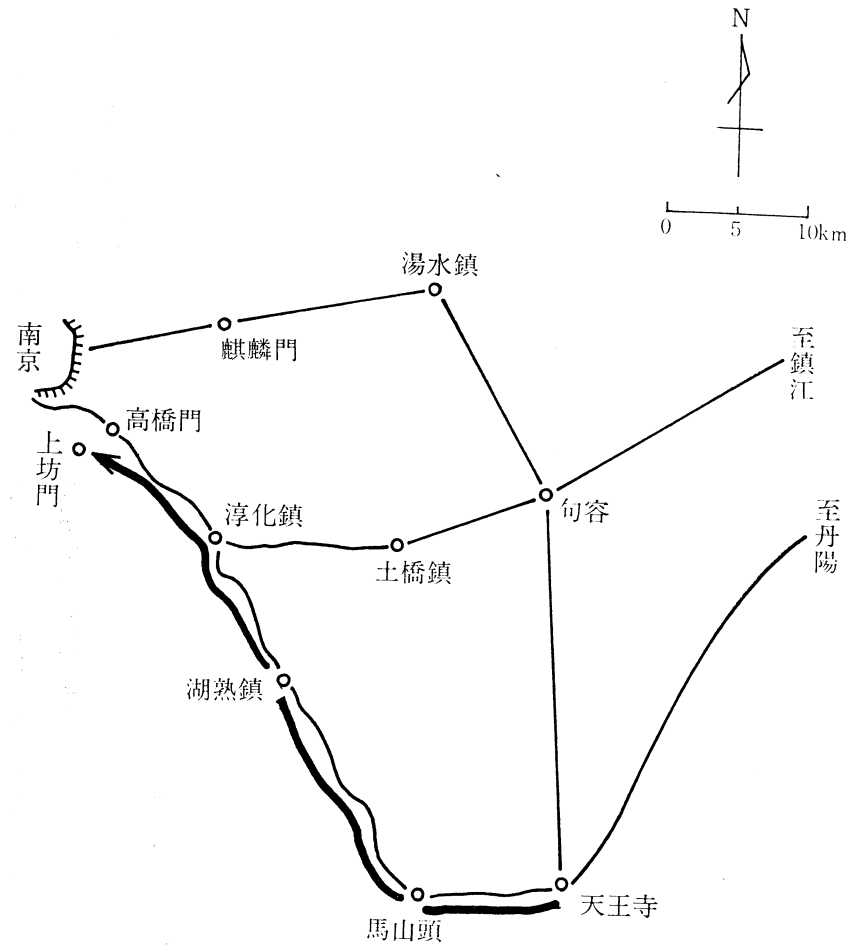
作戦の全期間を通じて最も困つたのは便衣隊であります。即ち急迫されると武器をかくして常民を装ひ、我々が心を許すと再び武器をとつて抵抗します。武器を捨てたときは常民との区別が全くつけにくいので、遂に私達は必要に

応じ全部落民を村の一隅に集結させ監視する方法を採つたこともあります。そして便衣の兵が自首したり、又は治安が回復したときに常民は全て解放しました。便衣の兵は之を憲兵に引渡しました。」

と、極東裁判で証言している。

(極東軍事裁判速記録第三〇九号)

要図24 第3師団歩兵第68聯隊の南京にむかう急進経路



注 野砲兵第3聯隊は先遣隊を選抜し句容—土橋鎮—淳化鎮道を急進させたのであるが、句容以西は道路不良のため、12月13日夕、已むなく土橋鎮付近に宿営し、引返して湯水鎮—麒麟門道を進んだ。

## 第五節 第一百十四師団の南京城東南角突入

### 雨花門方面

(注) 雨花門は鉄道列車用の通行門でトンネル式になっており、一般の城門と構造を異にしている。

師団の右翼隊右第一線であつた歩兵第百五十聯隊『戦闘詳報』によれば、山本聯隊長は十二日午前十一時四十分「現在ノ線ニ先ス突撃ヲ準備シ砲兵ノ射撃終了ト共ニ南京城東南角ニ突入」を下令している。

「砲兵ハ射撃ヲ開始シ城壁ニ命中轟々タル爆音ハ青空ニ響キ一弾毎ニ弾着良ク逐次破壊ノ度ヲ進ム」が、突撃は外濠に阻まれ、「煙幕ヲ構成シ架橋決死隊先ツ突進シ辛ウシテ一列ヲ以テ通過シ得ル架橋終ルヤ間髪ヲ入レス爆破班之ヲ超越シテ突進ス……轟然タル爆音ハ耳ヲ聾シ濛々タル黒煙ハ天ヲ掩ヘリ爆薬ノ装着不完全ナル為カ城門〔雨花門〕ハ僅ニ匍匐シテ通スル程度ニ破壊セラレタルノミナリ」

第二大隊長・児森(高槌)少佐以下四名が雨花門内に突入したが、

「爾後土砂ノ崩壊ニヨリ破壊口ヲ閉塞セラレシカ寡兵克ク拠点ヲ確保セリ」

聯隊長は軍旗を捧じて城壁破壊口を登る。時に十二日午後四時七分。

午後五時五十分児森少佐重傷死。

午後八時二十分命令「聯隊ハ既ニ奪取セル地歩ヲ堅固ニ保持シ夜ヲ徹セントス」「日ハ没シタレトモ十日ノ月ハ沖

天ニ懸リ剩ヘ南方部落ニ火災起リタルタメ城壁上ニ行動スル我ハ一兵ト雖空際ニ投影シ敵ハ其ノ都度迫撃砲自動火器ヲ以テ猛射シ我カ行動ハ大ニ制肘セラレタリ。午後五時<sup>五時</sup>兵力不明ノ敵大部隊ハ喇叭ヲ吹奏シツ、大逆襲ヲ試ミタリシカ午前六時三十分頃ヨリ附近ハ全ク静穏トナリ」。「午前七時十分頃ヨリ掃蕩ニ着手シ午前八時三十分武定門ヲ占領ス此頃歩兵第百十五聯隊〔右翼隊左第一線〕ハ軍旗ヲ擁シテ城壁上ニ至リ万歳ヲ三唱セリ」

「当時第三師団ハ武定門ヨリ入城スル能ハサルタメ当該ノ占領セル雨花門ヨリ入城セシメラレ度キ旨通報ヲ受ケ聯隊長之ヲ承認ス。該師団〔步六八鷹森聯隊〕ハ約一コ中隊ヲ雨花門ヨリ入城セシメ内側ヨリ武定門ヲ開キ該門ヨリ主力ヲ入城セシメタリ」

「午後五時掃蕩隊ハ担当区域ノ掃蕩ヲ完了ス」

南京戦における歩兵第百五十聯隊の損害は、戦死・将校四、下士官兵五十一、負傷・将校十三、下士官兵百三十六である。

### 中華門方面

第百十四師団左翼隊である秋山歩兵第百二十七旅団は十三日、歩兵第百二聯隊、歩兵第六十六聯隊の順に城門に重撃突撃させたのであるが、そのまゝに「中華門門扉ヲ鎖サレ退路ヲ失ヒシ敵ヲ城壁南側クリークノ線ニ圧迫シ殆ンド殲滅シ其策動ヲ封スルヲ得タ」。

步六六（欠第二大隊）は、師団左翼隊右第一線部隊として白家水洞付近の敵陣地を攻撃、十二日早朝敵の撤退に伴い、十二日正午頃までに雨花台北端に進出し、中華門東側地区の城壁に対する攻撃を準備した。（注・步六六第一大隊は師団予備となる）

以下、步六六第一大隊の戦闘について『戦闘詳報』から抜粋する。

### 步六六第一大隊の戦闘経過

十二月十二日の戦闘

第四中隊ハ驀進シ来タレル配属ノ軽装甲車中隊〔注・戦車第五大隊の品川大尉指揮の集成軽装甲車隊〕ト協力シ、擲弾筒、手榴弾ヲ以テ頑強ニ家屋ニ拠リ抵抗スル敵ヲ制圧シツ、進入ス。

敵ハ最初歩兵砲ヲ撃チ手榴弾ヲ屋上ヨリ投擲シテ抵抗セルモ、装甲車ノ威力ト歩兵ノ勇敢ナル突進ニ惧レヲナシ、逐次白旗ヲ掲ケテ投降スルモノ続出セリ。此ノ間各将兵ハ手榴弾ノ下ヲ潜リテ屋内ニ侵入シ、或ハ階上ニ駈ケ登リテ随所ニ白兵戦ヲ演ス。敵將校中ニハ投降ヲ肯セス最後マテ抵抗シ、或ハ投降セントスル部下ヲ後方ヨリ射殺セルモノアリ。第四中隊田名綱伍長ノ如キハ敵歩兵砲ノ火制セル直前ニ突入シ、該砲ヲ鹵獲セリ。

第一中隊方面ハ頭初、屋上ヨリ投擲スル手榴弾ノタメ侵入困難ナル情況ニアリシカ、第四中隊方面ノ進捗ニ伴ヒ、之ニ呼応シテ猛突シ逐次掃蕩シ、之又多数ノ捕虜ヲ得。

第三中隊方面ハ大ナル抵抗ヲ受クルコトナク、予定通り進捗セリ。

午後七時頃、手榴弾ノ爆音モ断続的トナリ、概ネ掃蕩ヲ終リ、我が損害極メテ軽微ナルニ反シ、敵七〇〇名ヲ殲シ捕虜一五〇〇余名及多数ノ兵器弾薬ヲ鹵獲シ、該方面ニ遁入、南門城扉ヲ鎖サレ退路ヲ失ヒシ敵ヲ城壁南側「クリーク」ノ線ニ圧迫シ、殆ント殲滅シ其策動ヲ封スルヲ得タリ。

最初ノ捕虜ヲ得タル際、隊長ハ其ノ三名ヲ伝令トシテ、抵抗ヲ断念シテ投降セハ助命スル旨ヲ含メテ派遣セルニ、其ノ効果大ニシテ其ノ結果我カ軍ノ犠牲ヲ尠ナカラシメタルモノナリ。捕虜ハ鉄道線路上ニ集結セシメ服装検査ヲナ

シ、負傷者ハ勞ハリ、又日本軍ノ寛大ナル処置ヲ一般ニ目撃セシメ、更ニ伝令ヲ派シテ残敵ノ投降ヲ勸告セシメタリ、一般ニ觀念シ監視兵ノ言ヲ敵守セリ。

#### 十二月十三日の戦闘

十三日、日出前五時〇分、聯隊の中華門占領命令に基づき第一大隊長は左の掃蕩命令を下達した。  
大隊命令 十二月十三日午前五時〇分 於南京東南高地大隊本部

1、敵ハ城壁ニ於テ最後ノ抵抗ヲ試ミツ、アリ、旅団ハ本十三日更ニ中華門突撃ヲ敢行ス

野砲兵第一大隊、重砲兵一中隊ヲ以テ直接協力セラル、突撃実施要領左ノ如シ

重砲兵ノ中華門附近ノ城壁ノ破壊、次テ野砲隊ノ支援射撃ノ下ニ突入ス、突入ニ当リテハ各種重火器等ヲ屋上及雨花台高地ニ配置シ、徹底セル支援射撃ヲ実施ス、突撃順序ハ第百二聯隊次テ第六十六聯隊トス

2、大隊ハ午前七時迄ニ雨花台高地ヲ占領シ、聯隊ノ中華門突入ヲ援護シ、併セテ昨日ニ引続キ殘敵ノ掃蕩ヲ実施セントス、各隊ハ同時刻迄ニ配備ヲ完了シアルヘシ、細部ニ関シテハ現地ニ於テ指示ス

3、軍旗中隊タル第二中隊ハ、聯隊本部ト共ニ掃蕩成功後城内ニ入り、楼上ニ上リ皇居ヲ遙拝スルニツキ、其ノ時機ニ於テ大隊ハ共ニ皇居ヲ遙拝スヘシ

第一大隊長代理 渋谷大尉

午前七時三〇分予定ノ如ク行動ヲ起シ、機関銃ヲ斉射シテ聯隊主力ノ城門進入ヲ援護スルト同時ニ、当面ノ掃蕩ヲ開始ス。(注・突入部隊は第三大隊基幹であった)

午前七時四十分頃日ノ出ヲ見ルヤ、全軍一斉ニ立ち上リ万歳ヲ唱へ、遙カニ皇居ヲ遙拝シ感激ニヒタル。

掃蕩愈々進歩スルニ伴ヒ投降スルモノ続出シ、午前九時頃迄ニ三百余名ヲ得、友軍砲弾ハ盛ニ城内ニ命中スルヲ見ル。午前十時遙ニ破壊サレタル南門城壁上ニ日ノ丸ノ揚ルヲ認め、聯隊主力ノ南京城入城セルヲ知り、全員ハ隊長ノ音頭ヲ以テ感激ノ万歳ヲ三唱シ皇居ヲ遙拝ス。

この歩六六第一大隊の掃蕩命令に關し、鶴飼敏定氏(第六師団通信隊小隊長)は次のように回想している。

私は中華門西方付近にいたが、十三日午前七時頃、第六師団の右翼隊右第一線たる歩兵第十三聯隊は、十二日の夜間作業によって工兵隊の架設した橋(中華門西側至近距離にあった)を渡ってすでに城内に進入していた。従って「大隊命令」にあるような砲兵の城壁破壊射撃は実際には行われなかったはずである。

午後二時〇分、聯隊長ヨリ左ノ命令ヲ受ク、

左記

イ、旅団命令ニヨリ捕虜ハ全部殺スヘシ。其ノ方法ハ十数名ヲ捕縛シ、逐次銃殺シテハ如何。

ロ、兵器ハ集積ノ上別ニ指示スル迄監視ヲ付シ置クヘシ。

ハ、聯隊ハ旅団命令ニ依リ主力ヲ以テ城内ヲ掃蕩中ナリ。貴大隊ノ任務ハ前通り。

右命令ニ基キ午後三時三十分、各中隊長ヲ集メ捕虜ノ処分ニ附意見ノ交換ヲナシタル結果、各中隊(第一、第三、第四中隊)ニ等分ニ分配シ、監禁室ヨリ五十名宛連レ出シ、第一中隊ハ露營地南方谷地、第三中隊ハ露營地西南方凹地、第四中隊ハ露營地東南方谷地附近ニ於テ刺殺セシムルコト、セリ。



但シ、監禁室ノ周囲ハ嚴重ニ警戒兵ヲ配置シ、連レ出ス際絶対ニ感知サレサル如ク注意ス。  
 各隊共ニ午後五時準備終リ、刺殺ヲ開始シ概ネ午後七時三十分刺殺ヲ終リ、聯隊ニ報告ス。  
 第一中隊ハ当初ノ予定ヲ変更シテ、一氣ニ監禁シ焼カントシテ失敗セリ。  
 捕虜ハ觀念シ恐レズ、軍刀ノ前ニ首ヲ差シ伸フルモノ、銃劍ノ前ニ乗り出シ從容トシ居ルモノアリタルモ、中ニハ泣キ喚キ救助ヲ嘆願セルモノアリ。特ニ隊長巡視ノ際ハ各所ニ其ノ声起レリ。

なお、十二月十三日午後九時の歩兵第六十六聯隊命令によると、「聯隊ハ十三日午前十一時三十分南京南門ヲ奪取シ、次テ掃蕩隊ヲシテ指定区域ヲ掃蕩シ、殘敵約百名ヲ斃シ南京ヲ明朗化セリ尚鹵獲兵器彈藥物資多數」と述べている。

歩兵第六十六聯隊第一大隊戰鬥詳報第參号附表

備考	員数	種類	
		俘虜	戦利品
一、戰場ニ於ケル敵ノ遺棄死体ハ約一、四〇〇ナリ	18	将校 准下士 士官 卒	銃 砲 實 彈 具 銃 機 銃 手 榴 彈 車 鏡
	602 5 60,000 300 17 20石 20 7 40 31 35 1 6	銃 砲 包 彈 具 銃 機 銃 手 榴 彈 車 鏡	糧 食 銃 重 輕 拳 手 自 眼

昭和十二年十二月 自十日 至十三日 第一大隊鹵獲表

捕虜の刺殺について

歩兵第六十六聯隊第一大隊關係者の手記と証言

第三中隊長・西沢弁吉氏著『われらの大陸戦記』によると、「雨花台の敗残兵約三千が城内に遁走するのを阻止する戦果をあげた」と記しているが、捕虜の処分には触れていない。

第四中隊長・手塚清氏著『聖戦の思い出』には、大要次のように記して、捕虜処分の事実を認めている。

「十五日午後、館野軍医中尉が、入院中の一刈第一大隊長を迎えに来た。その話によれば、第四中隊は南門城外で逃げ遅れた敵兵千二百四十名を武装解除して捕虜としたが、捕虜に給する食糧がないので、これらを第一、第三中隊その他に分配、各隊は適宜処置したとのことである。」

この捕虜の刺殺について直接西沢、手塚両氏に質問したものの手記の範囲を出なかったが、第四中隊第四分隊・高松半市氏は次のように述べた。

「数は、それほど多くなく、その半数以下であったと思う。私の中隊だけでは処分しきれないので、他の中隊に手伝ってもらった。私の中隊で処分したのは百名ぐらいと思う。当時中隊で満足に行動できる兵は七、八十名で、捕虜監視に多くの兵力を割くことは不可能であった。」

師団の転進

第百十四師団は十三日夕までに南京城東南部第十軍の担当地区の東半分（中華路以東）の城内掃蕩を終え、十五日正午、師団司令部は南京に入城したが、「杭州方面ニ転進スベキ」軍命令（十五日下令）により、その先頭部隊は十

七日早朝、中華門をくぐり激戦の地・雨花台を後に杭州に向かって行軍を開始した。

師団の戦闘詳報によれば、師団正面の敵の遺棄死体、約五千とあり、また歩六六第一大隊正面だけで遺棄死体、約千四百と戦闘詳報にある。当面の敵は八十八師が主体であり、その総兵力から推定して過大な報告と思われる。



雨花門

## 第六節 第六師団の中華門占領と城内進入

### 一、師団の攻撃部署

(要図25参照)

十二月十一日、雨花台および安德門一帯の陣地帯を攻略して雨花台北側台端に進出した第六師団は、十二日払暁から南京城壁に対する攻撃を開始した。師団の攻撃は中華門を含み西方、西南角に至る約千五百呎の城壁占領であった。

谷師団長は、右翼隊(歩兵第十一旅団基幹)で中華門及び西南突角に至る城壁の占領を、左翼隊(歩兵第三十六旅団基幹)を逐次西北方に移動させ、水西門、漢西門及びその以西地区を攻撃するように部署した。

これに対し左翼隊長・牛島少将は、歩兵第二十三聯隊がすでに城壁西南突角前八百呎に進出して攻撃を準備していること、西南突角を奪取しなければ左翼隊が城西の低湿地帯を西北方に移動するのが困難なこと、すでに歩兵四十五聯隊主力を左側支隊とし城西地区を下関に向かい派遣していることを理由として、城壁西南角の攻撃を旅団に許されたいと師団長に意見具申し、師団長は左翼隊長の意見具申を容れて突撃目標を次の通り変更した。

右翼隊 中華門および中華門と西南突角との中間城壁の占領

左翼隊 西南突角および水西門の占領

砲兵隊 主力をもって城壁西南突角の突撃路の開設(射法の関係上、西南突角城壁付近は開闊地であるために射撃

が効果的に実施できるため)

右翼隊は三里店および三里店東側台地において、左翼隊は師範学校西側台地においてそれぞれ、外濠の渡河と城門・城壁の攻撃を準備した。

## 二、中華門 占領

(要図25参照)

歩兵第四十七聯隊は、歩兵第十三聯隊の左に展開し、第一大隊(長緒方敬志少佐)を第一線に、第三大隊(長江島虎雄少佐)を第二線として第一大隊の攻撃を支援させた。

外濠はこの付近で幅三十呎、水深三呎に達し流速はかなり速い。外濠は秦淮河といい、源を遠く溧水県や句容に発し、城の南東で合流して城壁に沿い西流して城の外濠となり、城壁脚をめぐって北流し水西門に至り、さらに西北流して三汊河となり揚子江に注いでいる。中華門は数ある南京城門中最も堅固に構築された表門である。城門は内から土囊を積みあげ、鉄扉を閉じ、野砲級の射撃ではビクともしない。敵は城壁から俯瞰して盛んに我を射撃する。

第十軍司令官・柳川平助中將が歩四七第三中隊に与えた感状から、中華門西側城壁占領の様相を述べる。

「三家店北側白壁高地に達した第三中隊長・三明保真大尉は十二日正午頃、安東軍曹および中津留伍長を長とする二斥候を先遣し主力を以てその後を続行した。両斥候は猛烈な敵の十字火を冒し、城壁直前至近の距離にある外濠を小舟によって渡河して城壁直下に驀進し、中華門西方四百呎に携行した急造竹梯子(長さ約五・五呎)を架けて断崖をのぼろうとしたが、城壁の高さは二十呎を超え、三本継いだ梯子をもってしてもなお三々四四及ばず、これより上は壁面に足懸かりを求めて上るより方法がなく、白壁台地から友軍重火器の支援する中を、雑生する樹根に危うく身を支えつついに頂上に達した。時に十二時二十分頃である。敵の猛烈な逆襲のため、戦死四、負傷一を出して斥候

は中津留伍長一人となる。そこへ井ノ上少尉及び祥雲伍長が、七、八名の部下を従え城壁上に上り逆襲を阻止するうち、逐次中隊の主力が城壁上に進出し軽機や重機を吊りあげて応戦、十六時四十分敵の逆襲を撃退して城壁を確保した。」

歩兵第十三聯隊は、中華門に至る橋梁が破壊されていて午後に至っても外濠を渡ることができない。第一大隊(大隊長・十時和彦中佐)配属の工兵第二中隊の軽渡橋架設特別班が、外濠に仮橋を架設したのは十二日十四時三十分である。ようやく攻撃路が出来て、まず城門爆破の工兵特別班が橋を渡り、続いて第二中隊がこれを渡って城壁にたどりつき、工兵の爆破作業によって城門左側城壁の突撃路を補足して城壁を登ったのは十三日一時である。工兵隊が土囊を除去して城門を開放したのは三時三十分であった。

山崎正男氏(35期第一軍作戦課参謀)は、十四日の日記に「城門(注・中華門)付近敵ノ死屍累々、実ニ惨憺タリ。前ニハ我軍及濠アリ、後ニハ城壁アリテ堅ク城門ヲ鎖シ、進退兩難ニテ殲滅セラレタルモノナラン」と記している。

## 三、城壁西南突角の占領

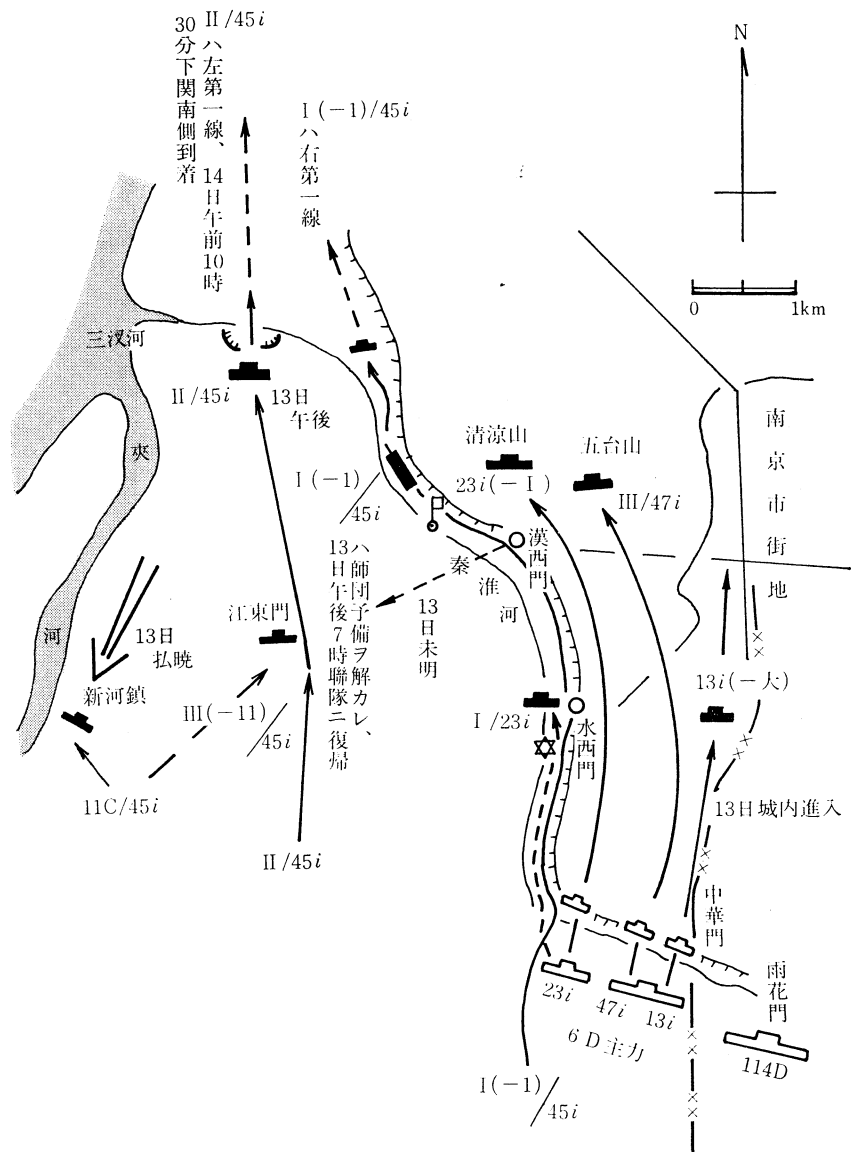
(要図25)

十二日払暁から攻撃前進を起こした歩兵第二十三聯隊は、九時概ね城壁の南四百呎の線に進出した。聯隊長は第二大隊に城壁の攻撃を命じた。

十時、左翼隊長・牛島少將は歩兵第二十三聯隊長に対し、十六時を期し南京城突角の占領を命じた。

十五時頃から安德門東西の地区に陣地を占領した野戦重砲兵聯隊の十五榴が砲撃を開始すると、その威力は物凄く、さすがの城壁も上部から崩れ始め、約一時間で西南突角の右寄りに相当幅にわたって城壁が破壊せられ、大きな

要図25 第6師団城内掃蕩および城西地区戦闘経過要図

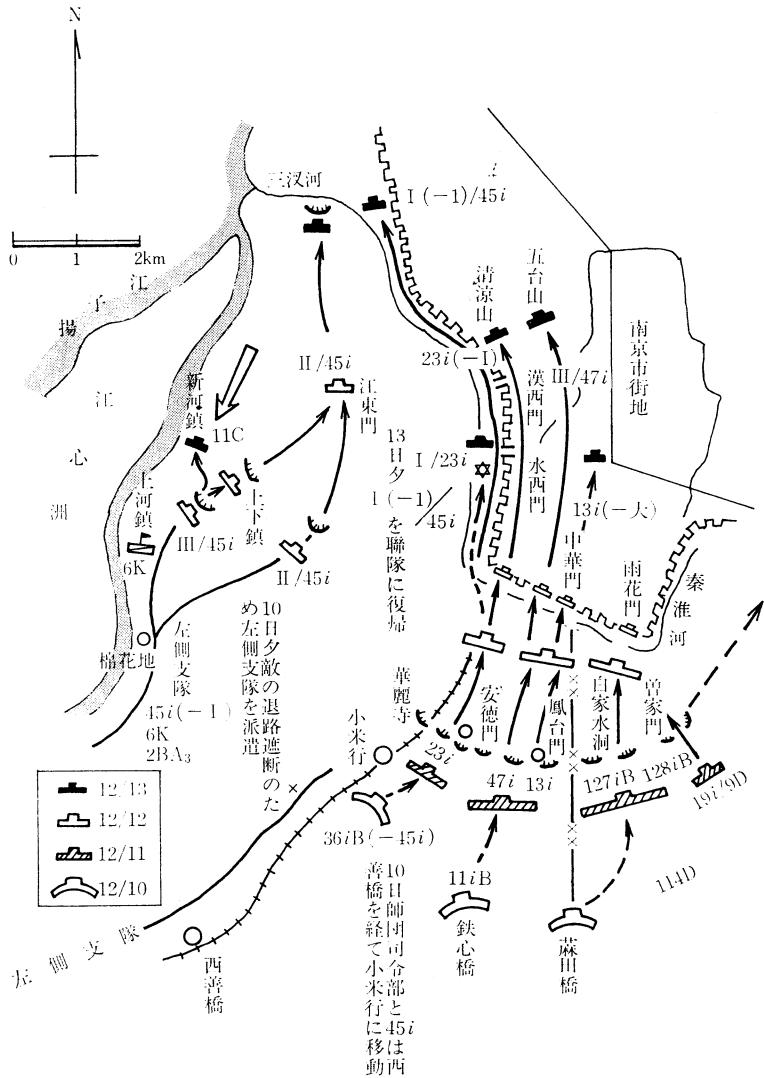


突撃路が出来た。この間に配属工兵小隊は、外濠に小舟を利用して応急の橋桁を渡し舟橋を造った。聯隊長は第三大隊に、第二大隊を超越して城壁の占領を命じ、十四時四十分第九中隊（長肥後大尉）が突撃路を上って西南突角の城壁を占領した。

城壁脚で第三大隊が第二大隊を超越する際混淆したが、第二大隊も第三大隊に続いて突撃路を上り城壁を占領した。

夜に入って牛島旅団長は城壁上から南側に下り、歩兵第二十三聯隊長は第九中隊を城壁上に残して敵の逆襲に備え、主力を城壁南側地区に集結して十三日の攻撃を準備した。

要図26 第6師団の雨花台および南京攻略経過要図



#### 四、城内掃蕩

(要図26参照)

南京城壁西南突角を占領した後、水西門の占領任務を有する牛島第三十六旅団長は、十三日歩兵第二十三聯隊に水西門の攻撃を命じた。水西門は城西の主要な城門で、十三日八時、歩二三は城壁西南突角の破壊口を通って城内に入りその西南隅に集結した後、十時十分、第三大隊は城壁に沿う地区を、第二大隊はその東を北進した。城内にはすでに敵兵の姿はなく、十四時三十分漢西門北方八百餘の清涼山に達し、第二大隊は清涼山で重砲六門を擧獲した。聯隊の一部を以て清涼山と城壁の要点を占領して、その南側に集結、翌十四日師団の指示に基づき水西門東側地区に後退した。

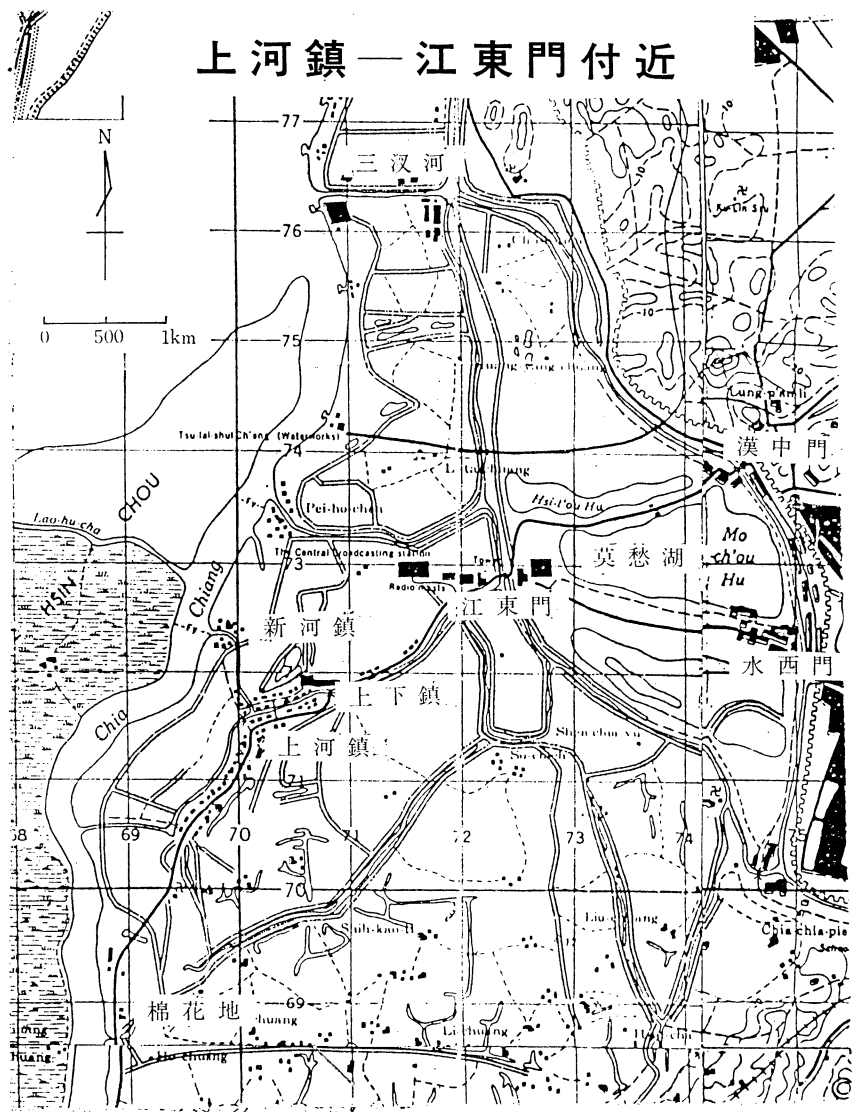
本隊に追隨できなかった聯隊砲、大隊砲隊の馬匹と車輛は中華門を通過して、それぞれ本隊に合流した。

第十一旅団正面でも、歩兵第十三聯隊はその一ヶ大隊が城内に進入、中正路南端までの掃蕩を、歩兵第四十七聯隊第二大隊は城内五台山までの掃蕩に当たったが、敵兵はもとより住民の姿さえほとんど見なかった。

守田省吾氏(47期歩四七通信班長)は「その当時、中華門付近の城内にはほとんど敵兵を見ず、ましてや、一般住民はその姿を発見することさえ困難であった」と言い、当時陸軍士官学校予科区隊長に転任の内命を受けていた安部康彦氏(46期歩四七速射砲中隊長)は「掃蕩といっても、敵の遺棄した軍服、兵器、装備、資材の跡片づけが主な仕事だったよ」と述べている。

また、当時の朝日新聞記者近藤俊清氏は「中華門は激戦で日本兵の死体も、中国兵の死体もあったが、それほど多数という印象はない。市民の死体は全く見当たらなかった」と述べている。

上河鎮—江東門付近



五、歩兵第四十五聯隊の城西地区の戦闘

(要図26、地図5参照)

十二月十一日夜明け前、棉花地に到達した歩兵第四十五聯隊(第一大隊欠)は騎兵斥候の搜索により上河鎮部落に敵兵のあるを知り、聯隊長は第三大隊に上河鎮の攻撃を命じた。

第三大隊長・小原重孝少佐は先頭の第十一中隊に上河鎮の攻撃を命じた。第十一中隊は上河鎮部落による敵を攻撃して部落の核心部上下鎮陣地前に進出した。大隊長は第一線を第十二中隊(長田中軍吉大尉)に代えて攻撃を続行したが、小隊長・益田少尉、今林少尉が戦死、攻撃は進展しなかった。

ここにおいて聯隊長は、新たに後方を前進していた第二大隊を第三大隊の右に増加し、江東門(水西門と上河鎮の間)を占領して下関方向への突進を命じた。第二大隊は所在の敵を撃破しつつ江東門—三汊河—下関道を前進し、三汊河付近において十二日夕から十三日朝にかけて深い朝霞の中で脱出を図る敵の大集団と激烈な近接戦闘を交えるに至ったが、十四日ついに下関に進出した。

この方面の戦闘について、『歩兵第四十五聯隊史』を中心に、第二大隊長・成友藤夫氏、第十一中隊軍曹・浜崎富藏氏、師団通信隊小隊長・鶴飼敏定氏、配属の独立山砲兵第二聯隊小隊長・高橋義彦氏らの証言により述べる。

第二大隊の江東門—三汊河—下関の戦闘

第二大隊(長成友藤夫<sup>28</sup>期少佐)は、上河鎮の第三大隊方面の銃声を左に聞きつつ、第七中隊を先頭としてクリーク堤防上の道を前進した。道路以外は湿地帯であったが、敵の大きな抵抗を受けることもなく江東門を占領した。江東門西側には中国の陸海軍監獄があり、その収容能力は三百人程度であったが、占領当時囚人はいなかった。

当時、城内の中国軍は、十二日夜から城外脱出を図り、下関から揚子江岸に沿って南下し、新河鎮方向に殺到しつつあったのである。

第二大隊は十三日早朝、折りからの濃霧のなかを敵を撃破しながら前進し、下関南方約一・五キロの三汊河南方に進出した。

三汊河部落に拠る敵は、秦淮河を背に背水の陣を敷いて頑強に抵抗したが、追及してきた機関銃中隊、大隊砲、速射砲が第一線中隊の攻撃を支援したので、敵は再び下関方面に退却を開始した。

一時、幅約二十呎のクリークを挟んで激戦が展開、ことに敵の迫撃砲に悩まされたが、中国軍は多数の戦死者を残して退却した。これがためクリークは長さ四、五十呎にわたり屍体で埋まった。

十四日早朝、第二大隊は下関に向かい前進し、三十教門に及ぶ砲車、大量の小銃、機関銃、数百頭の軍馬を鹵獲した。

英国旗や米国旗を掲げた家屋には、多数の中国兵が隠れていたが、第三国の国旗の下ではどうすることもできなかった。途中、敵の抵抗を受けることなく下関に到着すると、中国兵が広場一杯に溢れている。ことごとく丸腰である。その数五千〜六千名、おどおどした表情の者が多かった。

そこで、「当方面の戦闘はこれで終わった。生命は助けてやるから、揚子江を渡って郷里に帰れ」と言った。

ところが、中国兵が「大人は揚子江を渡って帰れと言われるが、船はどうしてくれるか」と申し出たので大笑いとなったという。

鶴飼氏や浜崎氏の言によると、「ヒゲが両耳から顎まで垂れさがっていた人（第六中隊長の山本隼人大尉）が訓示して全員を釈放した」という。

かれこれしているうちに、城内から第十六師団が進出してきた。また江上には数隻の駆逐艦も溯航してきた。折りから「江東門に下がって宿営すべき」聯隊命令に接したので、第二大隊は江東門に転進した。

その場で釈放された捕虜の一部は、四、五十人の群ごとにそれぞれ白旗を持ち江東門を通過して蕪湖方向に脱出したと思われるが、当時の状況から見ると悉くが脱出することは不可能で、一部は再び後方から進出して来た日本軍の捕虜となったことと想像される。釈放された捕虜の主力は舟筏を利用し江興洲に脱出した模様である。

十二月十四日、新河鎮の激戦を了えた歩四五の第十一中隊は江東門に移動して同地付近を警備中、夕闇迫る頃、下関付近で捕虜から釈放された四、五十人の中国兵グループと出合い、何かのハズミで争いとなり、我が方はこのグループに射撃を加え、一部を射殺、他は逃亡したが、我が方も上等兵一人戦死という事故を惹起した。

### 第十一中隊の新河鎮の激戦

(要図26参照)

第十一中隊長・大藪庄蔵大尉は十二日真夜中の十二時頃、「第十一中隊へ左追撃隊トナリ、工兵ニケ分隊、山砲一門ト共ニ江岸堤防沿ヒニ下関方向ニ前進シ、敵ノ退路ヲ遮断スヘキ」命令を受けた。

南京から脱出した中国軍の大部隊が、下関から揚子江岸道を新河鎮に向かい、その先頭が新河鎮北側の北河鎮に至っているなどとは知る由もなかった。

小行李から弾薬を補充し携行弾薬を百六十発としたため、出発が一時遅れ十三日六時三十分、第十一中隊は新河鎮を出発した。

尖兵が前進すると間もなく敵の将校斥候と遭遇して直ちに戦闘配置につく、敵の大集団が薄暗い本道を南下して行くのが見える。兵数は不明であるが、二千や三千という少数ではない。敵の先頭との距離は百呎もない。軽機を据え

ると直ぐ射撃開始。敵は続々と押し寄せてくる。

中隊長は、中隊の全力を展開した。やがて全正面で白兵戦が起こり、混戦となる。雲霞のような敵の大部隊が、ラッパを吹きながら突撃してくる。彼我の雄叫び、手榴弾の炸裂、戦場は阿鼻叫喚の巷となった。

「中隊長、戦死」、悲痛な叫びが聞こえる。軽機の銃身が真っ赤に焼ける。すぐ横の池の水をブッかけて銃身を冷やす。小銃弾を射ちつくし、敵の死体から弾薬を取って射ち続ける。敵は日本軍と同じ三八式歩兵銃を持っていたのである。

田圃の真ん中に、敵が迫撃砲を据えようとしている。すかさず集中射撃を浴びせてこれを制圧する。激しい戦闘がつづく。砲兵が山砲を路上に引っ張りあげる。数名が傷ついたが、砲を据えるや敵の真っ只中に砲弾を射ちこむ。砲弾は僅か十八発しかない。陽が高くなるころ、さしもの敵の攻撃も鈍ってきたようである。敵は横へ横へと移動して揚子江岸に殺到し、河に飛びこみ筏や舟で逃走を企てる。

急に銃声がやみ戦闘は終わった。耳が鳴り頭がボーッとしている。死屍は累々として広い田圃をおおい、中国兵は着剣し突撃の姿勢で倒れている。時に十時三十分、戦闘は四時間続いたのである。

第十一中隊 戦死・中隊長・大藪大尉以下十六名 負傷・三十六名

敵の損害 参謀長以下二千三百名 軍旗二旒、迫撃砲、チェコ機関銃多数を鹵獲。

十五日、師団長、旅団長、聯隊長の戦場視察があり、第十一中隊の一ヶ小隊が戦場掃除にあたった。なお、第十一中隊はこの戦闘によって師団長・谷中將から賞詞を受けた。

新河鎮の戦闘について、独立山砲兵第二聯隊本部附中尉・高橋義彦氏<sup>47</sup>期の証言

一砲兵は全部零距离射撃の連続で、砲腔の中を通ってくる銃弾もあり、血のしたたる『血弾』をこめて射撃した。反覆突撃の当初は軍官学校生徒が第一波で、さすがに勇敢で我々を手こずらせたが、次第に弱兵となった。後の突撃部隊は異様なヘッピリ腰の民兵で、大型モーゼル拳銃をかまえた督戦隊によって押し出されたものだ。督戦隊員は「督戦」という腕章をつけ、後退しようとする兵を射殺しているのが見えた。死体は枕木を敷きつめたように泥濘地帯を埋め、その上を跳び越え、這いずり回っての乱闘となった。十一時頃からは敵は戦意を失い、揚子江岸に飛びこむもの、丸太や筏にすがって脱出を図るものなど、あたかも海水浴場のような光景を呈したが、わが銃火を浴びて下流に押し流されて行った。」

## 六、江東門付近の戦闘

(地図5参照)

以下、江東門付近一帯の戦闘を一部重複して要約すれば次の通りである。

当時、南京の西の正門は水西門であったが、明の時代(一三六八〜一六三六年)は江東門が南京城の西の正門であった。今もその頃の外濠であった秦淮河の支流が江東門の東を三汊河鎮に北流している。江東門の東三<sup>キ</sup>に水西門、西南二<sup>キ</sup>に上河鎮があり、北は約三<sup>キ</sup>の三汊河鎮を経て下関に至る。この三汊河鎮に至る道路の東側、江東門北端に江東門監獄がある。

(注) この監獄は刑期満了間近い模範囚を収監するところで、数棟の小さな平屋建てで、収容人員は通常三百人、最大限五百人を超えない。歩四五の第三大隊が上河鎮から江東門に入った当時、囚人はいなかった。

十二月十二日ごろこの城西地区には中国軍五十一師、五十八師の計約四千が守備し、我が軍は敵の退路遮断のため、第六師団の左側支隊(歩四五(第一大隊欠)・山砲兵第二聯隊基幹)が下関に向かっていった。



十二月十二日午後、第三大隊は上河鎮においてやや堅固な敵陣地に遭遇、これを攻撃して夜となり、第二大隊は第三大隊の東側を迂回してその後方拠点江東門を占領したのはその夜遅くであり、そのとき敵の守兵はすでにいなかった。

十三日は朝から深い霧のたちこめるなか、第二大隊は夜明けと共に江東門を発ち、水路に沿って北上、三汊河鎮において中国軍と交戦したが、これが城西地区最後の戦闘となった。

一方、第三大隊主力方面に於ては十三日未明、江東門、陸海軍監獄正面で脱出する敵と不期遭遇戦を交え、濃霧のなかの白兵戦で、歩兵砲小隊長・岩間少尉戦死、第九中隊長・前川参次大尉重傷、その他多くの戦死傷者を出した。

また、江東門西方二ギの揚子江岸新河鎮北方地区では、第三大隊の左追撃隊となって下関に向かおうとした第十一中隊基幹が十三日早朝、下関から南下脱出しようとした敵大部隊と延々四時間に及ぶ激戦のすえ、敵の参謀長以下二千余名を撃滅したことは前項で述べたとおりである。

## 七、彼我の損害と師団の情況

### 彼我の損害

本戦闘における第六師団の損害は戦死三〇三名、負傷一、一四一名。(この損害は牛首山以降南京城攻略までのもので、主体は雨花台陣地帯突破時のものである)

『熊本兵団史』によると、「十二日から十三日にかけての南京城壁の戦闘では、中国兵約一、五〇〇の損害を与え

た、この戦闘損害には城内の掃蕩戦を含む」と述べ、坂元氏(歩二三大隊長)は、九日～十二日の四日間の歩兵第二十三聯隊正面の遺棄死体は約二、〇〇〇、捕虜二四名という。

### 師団の態勢

十二月十四日夕における第六師団の態勢は要図27の通りである。

城内進入後の情況については『折小野日記』(歩二三第三中隊長)に次のように記されている。

十二月十三日 晴、午前九時中隊ハ軍旗ヲ護衛シ破壊口ヲ登リ城壁上ニ登ル。城壁上ニ休止、午後二時水西門ニ至ル。午後清涼山砲台ニ登リ夕宿営ニ就ク。夜間犬ノ遠吠エモナク、南京城内誠ニ静カナリ。

十二月十四日 晴、久シ振リニ理髪ス。午前中功績上申ニ着手ス。

十二月十五日 晴、午前十時ヨリ聯隊本部ト共ニ城内ニ移転、風呂アリ室モ多数アリ入浴シ更衣ス。

十二月十六日 晴、終日戦後ノ整理、手紙ヲ認ム。

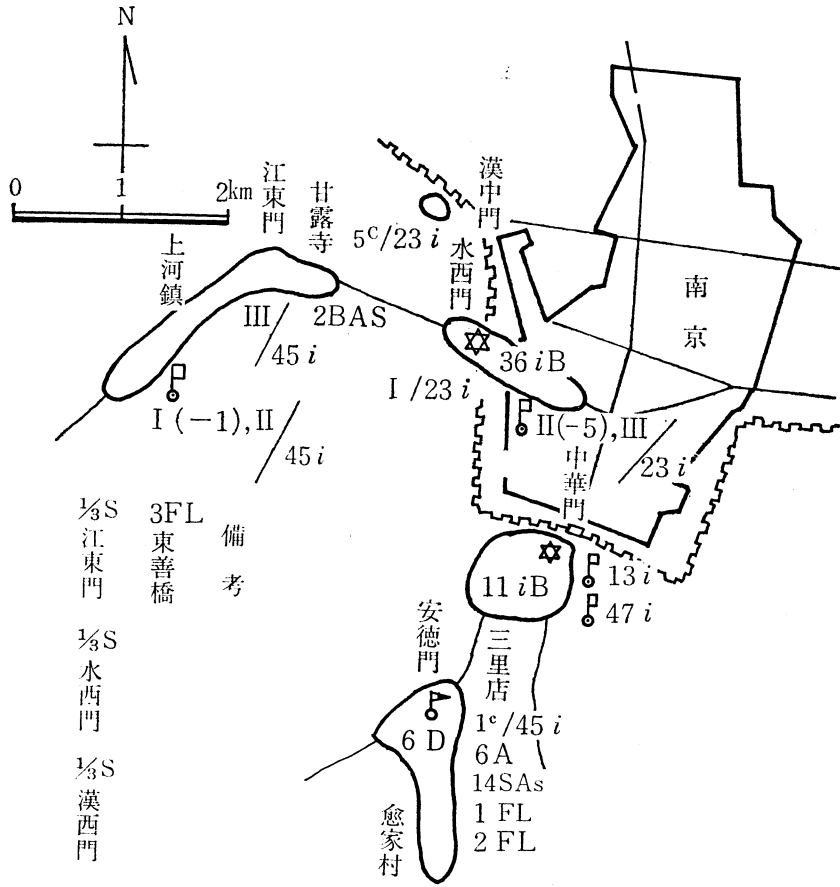
十二月十七日 晴暖、午前十一時出発中山路上ニ整列入城式アリ。酒、煙草支給セラル、恩賜ノ酒モ共ニ下賜。付近ニ火災アリ夜梱包シ準備シ置ク。聯隊本部前火災ニ赴援隊ヲ出ス。

十二月十八日 曇、昨夜聯隊本部付近ニ火災アリ風強ク雪降り寒サ甚シク、午前十一時五十分ヨリ飛行場ニ於テ慰霊祭アリ。家庭ニ手紙ヲ出ス。

師団その後の情況

南京占領に伴う爾後の配備に関する方面軍命令により、第十軍は大湖中央を東西に連ねる線以南の地区を警備することになり、第六師団は太平府、蕪湖へ転進を命ぜられ、おおむね十二月二十日以降逐次に南京を発ち蕪湖へ転進した。

要図27 第6師団警戒態勢要図  
12月14日夕以降



## 第七節 方面軍の南京城内初期掃蕩

(要図28参照)

(注) 本節は前述の諸節と若干重複するところがあるが、総括して記述した。

南京城内戦は十二月十三、十四日の両日掃蕩戦の形で遂行され、安全区と第三国建物以外の地区においては所在の敗残兵、便衣兵を掃滅した。

この城内戦を開始した十二月十三日頃における彼我の態勢を概述すると次のようである。

### 一、十二月十三日における我が方の態勢

揚子江右岸地区においては、第十三師団の山田支隊は十三日午後、一部を以て烏竜山砲台を占領し主力は幕府山に向かつて前進中。第十六師団正面では、佐々木支隊は早朝紅山を攻略して午後下関に突入、師団主力の右正面においては、十二日午後六時紫金山を占領し、十三日早朝天文台高地、次いで太平門を占領、左正面においては十三日黎明中山門を占領し引続き城内掃蕩を開始。第九師団正面においては中山門より光華門に至る間、第三師団の歩兵第六十八聯隊が通済門と武定門を、第一百十四師団は雨花門正面を、第六師団主力は中華門および西南突角を占領し、各師団とも城内掃蕩を開始。また第六師団の歩兵第四十五聯隊は江東門を占領し、その第二大隊は下関南方の三汊河鎮を占領して下関突入を準備する状況で、まさに南京城包囲の態勢を完成した。

さらに揚子江左岸地区においては、慈湖鎮付近で揚子江を渡河した国崎支隊は十三日南京対岸の浦口を占領、第十八師団は十日蕪湖を占領。海軍の第十一戦隊は十三日午後下関碼頭に突入した。

### 二、十二月十三日前後における中国軍の状況

中国軍側から、この戦況を見てみよう。

『抗戦簡史』『抗日戦史』の記述によれば、十二日午後、雨花台、工兵学校、紫金山の各要地は次々に陥落し、城内は日本軍砲兵の火制下におかれた。そして中華門には日本軍が突入し市街戦が起こった。光華門、中山門も相次いで突破され、蕪湖も占領される所となり、揚子江を渡江した日本軍は浦口に進出し、中国軍は完全に包囲下に陥った。南京防衛司令官唐生智は、戦局挽回の方策なしと判断し、南京を放棄して各部隊ごとに包囲を突破するよう命令を下達した。南京はついに十三日陥落したのである。

第三国人ダーディン記者のレポートを要約すると、

中国軍の大半は、十二月十日には城内に撤退していた。

本格的な総退却が始まったのは十二日からである、八十八師の一部がこれを食い止めようとしたが、もはやそれは不可能だった。中国軍部隊のうち数千名は下関に辿りつくと、数少ないジャンク、ランチを使って揚子江の向こう岸に着くことができた。

十三日、ある中国軍団は南京東部(紅山)と北西部(三汊河)とで、なお日本軍と戦火を交えつつづけていた。しかし城内に閉じ込められた中国軍の大多数はもはや戦う気力を失い、数千名の兵士が武器を捨てて南京安全区国際委員会に出頭した。国際委員会は当初日本軍が捕虜を寛大に扱うものと信じて、彼等を受け入れた。その頃、日本軍は下関地区に進出し南京を完全に包囲してしまった。下関地区で逃げおくれた兵士は捕えられ組織的に掃蕩された。

十三日夜遅くまで、南京城内での散発的な小競り合いがあったが、日本軍は南部、南東部、西部地区を制圧した。そして十四日昼までには、なお武装して抵抗していた中国兵士は完全に排除され、かくして日本軍は南京をその手中に入れたのである。

以上が、中国軍側および第三国人の観た十二月十三日前後の南京の状況である。

### 三、初期城内掃蕩の特色

十二月十三日から十四日にかけての初期城内掃蕩は、わが軍にとっては上海戦以来の追撃戦の終末戦闘であった。つまり中国軍の捕捉殲滅を目的としていた。

以上のことは、各部隊ごとに文言に多少の差異はあるが、明瞭な命令として発せられた例を一、二、示すこととする。

#### (1) 第十軍の城内攻撃命令

丁集作命甲号外

丁集団命令 十二月十三日午前八時三十分 於秣陵関

- 一、敵ハ南京城内ニ於テ頑強ニ抵抗ヲ続ケツツアリ
- 二、集団ハ南京城内ノ敵ヲ殲滅セントス
- 三、(略)
- 四、各兵团ハ城内ニ対シ砲撃ハ固ヨリ有ラユル手段ヲ尽シ敵ヲ殲滅スヘシ

#### (2) 第一百十四師団の城内攻撃命令

之カ為要スレハ城内ヲ焼却シ特ニ敗敵ノ欺瞞行為ニ乗セラレサルヲ要ス

第一百十四師団命令 十二月十三日午前九時半 於朱家楼子北方高地

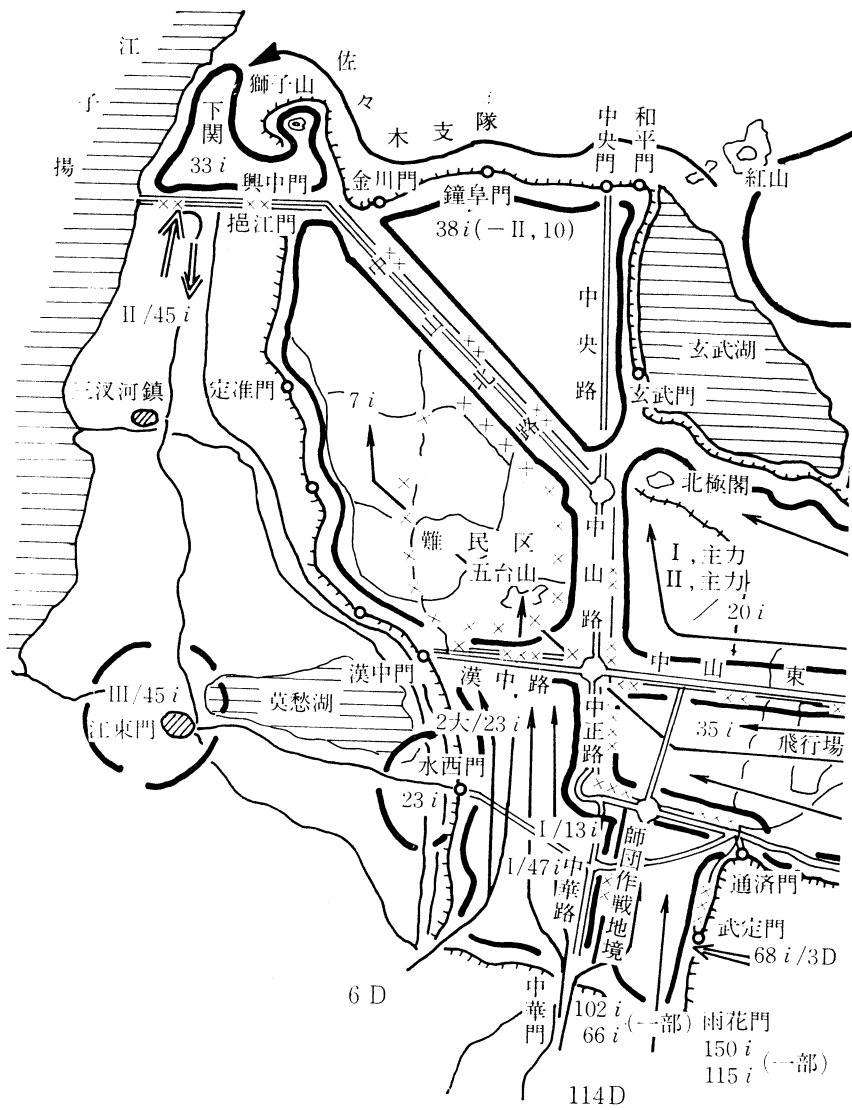
- 一、城内ノ敵ハ頑強ニ抵抗シツツアリ
- 二、師団ハ攻撃ヲ続行シ城内ノ敵ヲ殲滅セントス
- 三、両翼隊ハ城内ニ進入シ砲撃ハ固ヨリ凡ユル手段ヲ尽シテ敵ヲ殲滅スヘシ

#### (3) 第十六師団歩兵第三十旅団の南京城内掃蕩命令

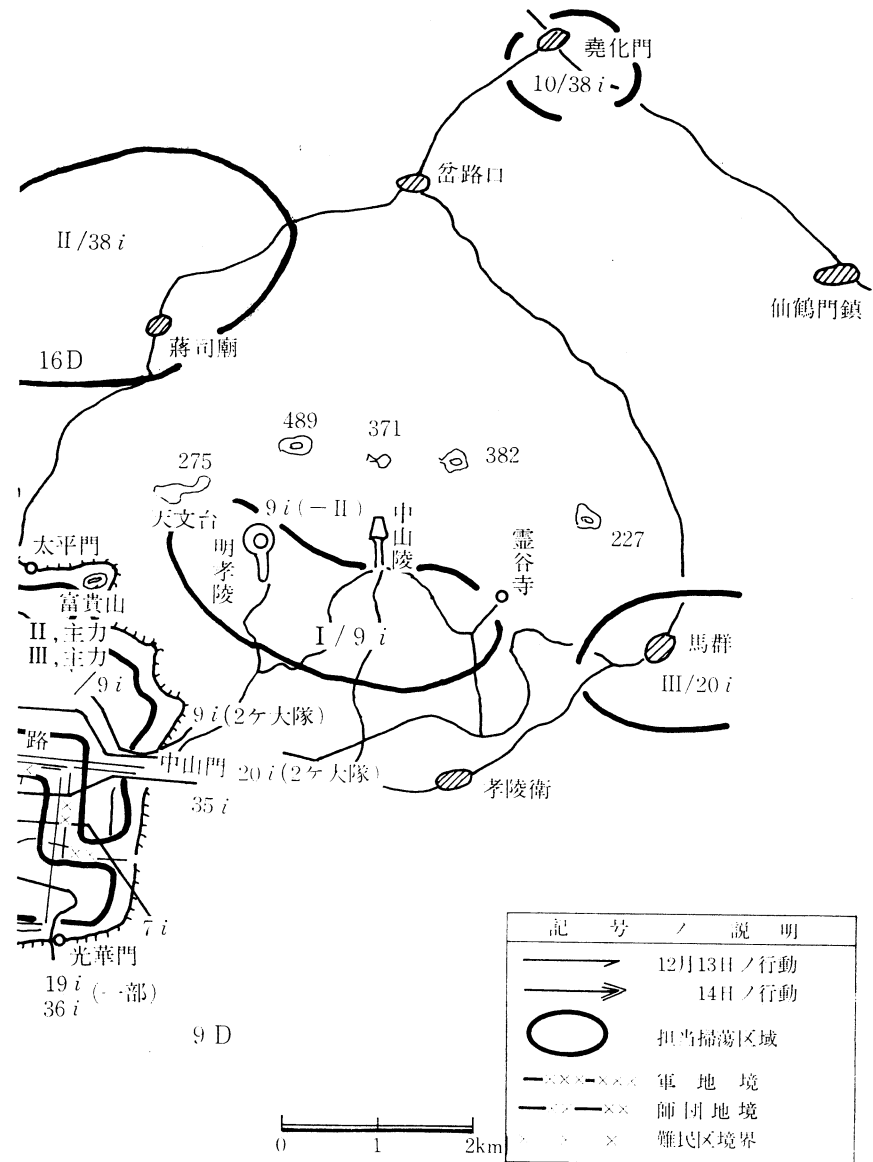
歩兵第三十旅団命令 十二月十四日午前四時五十分 於中央門外

- 一、敵ハ全面的ニ敗北セルモ尚抵抗ノ意志ヲ有スルモノ散在ス
- 二、旅団ハ本十四日南京北部城内及城外ヲ徹底的ニ掃蕩セントス
- 三、歩兵第三十三聯隊ハ……地帯ヲ掃蕩シ支那兵ヲ撃滅スヘシ
- 四、歩兵第三十八聯隊(第二大隊欠)ハ……地区ヲ掃蕩シ支那兵ヲ撃滅スヘシ
- 五、歩兵第三十八聯隊第二大隊ハ……ヲ掃蕩シ支那兵ヲ撃滅スヘシ
- 六、各隊ハ師団ノ指示アル迄捕虜ヲ受付クルヲ許サス

要図28 中支那方面軍の南  
12月14



京城内外掃蕩区域割要図  
日前後



敵を徹底的に追撃して捕捉殲滅しようとするのは兵学上の常識であるが、南京攻略戦の場合は、この追撃の終末戦が「城内掃蕩」という形で行われたことは注目すべき特色であろう。しかも、崩壊した中国軍の大部が第三国人の管理する安全区に便衣に着替えて流入し、一般市民とこれら便衣兵とが混淆して、その識別が極めて困難となったことが第二の特色である。

これがため、我が軍としては、まず安全区や第三国建物所在地区以外の敗残兵掃蕩を第一段階とし、次いで外交交渉のち安全区に潜入した便衣兵の摘出を第二段階の処置とした。

安全区内であっても、便衣兵を掃蕩する基本方針は変更されることなく実行された。(これらの詳細は第六章参照) 公式文書や指揮官の日記に記載されている掃蕩戦としては、安全区以外では前述の太平門守備の歩三三第六中隊、歩二〇第四中隊、獅子山砲台掃蕩の歩三三部隊の敗残兵掃蕩の記録しかない。

## 第八節 国崎支隊の戦闘

(要図29、地図6参照)

国崎支隊の戦闘詳報と陣中日誌によれば、同支隊の揚子江渡河後における戦闘経過は次のとおりである。

浦口に進出して敵の退路を遮断すべき任務を有する国崎支隊<sup>1)</sup>長歩九旅団長・国崎登<sup>19)</sup>少将、歩兵第四十一聯隊、独立山砲兵第三聯隊、工兵第五聯隊一小隊、独立工兵第二聯隊(戊<sup>1)</sup>折疊舟による大河の渡河を任務とする)、独立工兵第三聯隊第一中隊(甲<sup>1)</sup>野戦一般)、独立工兵第十聯隊(丁<sup>1)</sup>大・小発による敵前上陸を任務とする) 主力<sup>1)</sup>は丁集団作命甲五〇号により広徳より建平、水陽鎮を経て十二月九日太平府(当塗)を占領し、十日彩石鎮に達した。

### 一、揚子江渡河、烏江占領

十一日午前七時三十分、支隊は彩石鎮を出発し、正午過ぎ慈湖鎮付近に展開し、独立工兵第十聯隊長・永山喜一<sup>25)</sup>期中佐指揮の下に渡河準備を完了した。対岸・石馬河付近には大きな敵部隊はなく、また、右岸・乗船地は、遠浅で細砂、比較的堅硬で乗船に便<sup>1)</sup>であるが流速一<sup>1)</sup>舄もあり、舟は押し流される恐れがあった。

第一回渡河部隊は午後二時一斉に発進し、山砲掩護のもとに微弱な敵の抵抗を撃破して午後二時四十五分渡河に成功、後続部隊も夕方までに石馬河北側地区に渡河を完了した。

午後四時四十分、丁集団参謀長より飛行機による次の通報を受けた。

- 1、敵側ノ密電ニ依レハ南京守備軍ハ十二日南京ヲ撤退シ浦口ニ退却スルモノ、如シ
- 2、支隊ハ一部ト雖モ神速ニ浦口付近ニ進出セラレンコトヲ希望ス

よって先遣の第一大隊は、午後四時四十分、烏江鎮を越え浦口に急進したが、中国軍の強い抵抗が予想される江浦付近には払暁に到着するよう時間を調節し、夜半橋林鎮で五時間の大休止を行った。

## 二、江浦占領

十二日早朝、先遣隊は高旺鎮付近の敵約二百を撃破し、午前七時三十分から江浦南方清涼寺高地（標高六三崙）の敵約五、六百に対し攻撃を開始した。中国軍は逐次その右翼に兵力を増強し、我が方もまた第三大隊を第一大隊の左翼に進出せしめたが、敵は既設陣地により頑強に抵抗し、白兵戦をもって各拠点を逐次占領する状態で戦況の進捗意の如くならず、午前十時半頃の敵兵力は四千を下らぬものと推測された。

当時、聯・大隊砲、山砲は携行弾薬が少なく、浦口に於ける主戦闘に備えて約半数の射撃しかできず、歩兵は独力攻撃をせねばならなかった。なお独立山砲兵第三聯隊主力は独工一〇の大・小堯に乗船して、石馬河から揚子江左岸に沿って浦口に向かい前進した。

午前十一時半頃から中国軍は北西方向に退却を開始したので、正午前には六三崙高地を占領した。支隊は直ちに再び第一大隊を追撃隊として午後一時三十分、本道方面より浦口に向かい敵を急追させ、主力は午後二時江浦を出発した。また独工一〇に太平府から弾薬を江浦に急送するように命じた。（注・独工一〇の補給は結局、浦口戦に間に合わなかった。これは独工一〇が偶然、パネー号遭難現場に居合わせたからではないかと推測される）

## 三、浦口占領

追撃隊は午後四時、石仏寺高地の約五、六百の敵を攻撃し同六時これを占領、左翼第三大隊も頭段庄に達した。国

崎支隊長は石仏寺高地において左の攻撃命令を下達した。

### 国作命第二〇七号

国崎支隊命令 十二月十二日午後六時 於石仏寺高地上

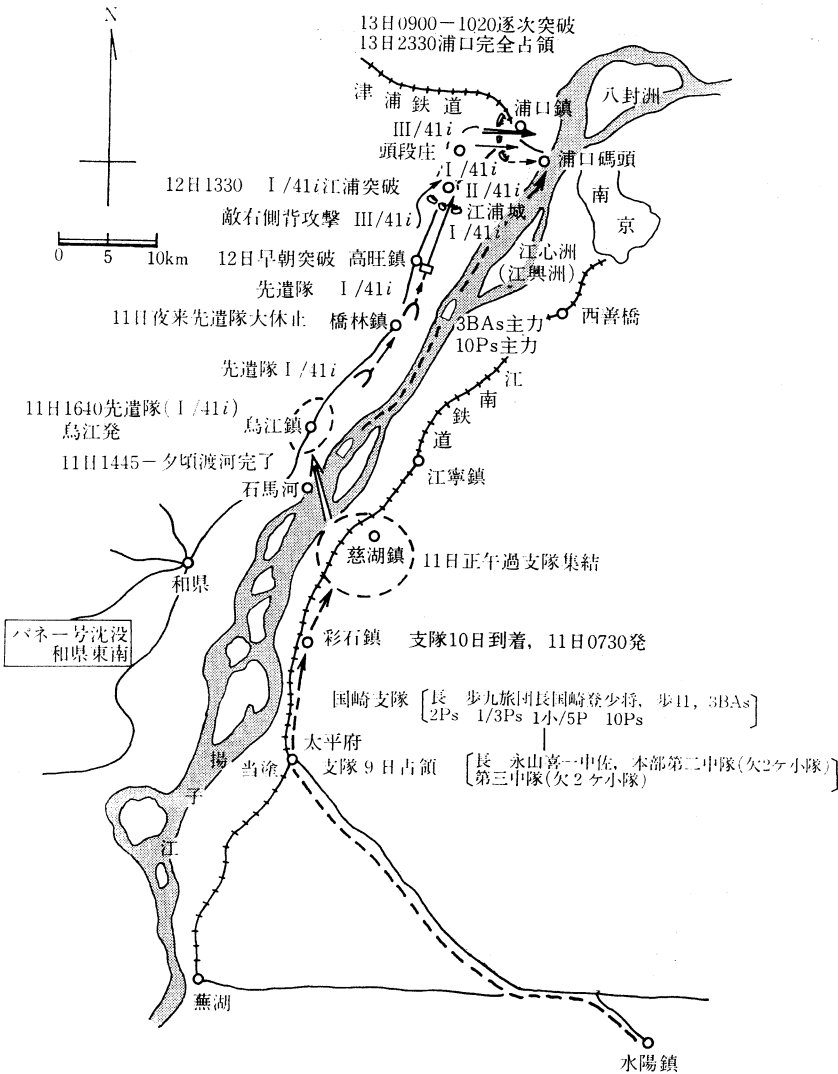
- 1、敵ハ浦口城附近ニ陣地ヲ占領シアリ 其主抵抗線ハ鐵路工場廠附近ヨリ概ネ城壁ニ平行スル城内高地ヲ経テ其北方地区ニアルモノノ如シ
- 2、支隊ハ本夜攻撃ヲ中止スルコトナク重点ヲ左方ニ保持シ東面シテ浦口敵陣地ヲ攻撃セントス

第一線は日没後引き続いて攻撃を続行した。中国軍はこの付近の複雑な地形を利用し、隆起部は総て陣地として抵抗したが、我が軍は幸い月明を利用して逐次拠点を奪取し、十三日払暁には西門街西方約千崙の高地に進出、城壁に対し攻撃を開始した。浦口付近の敵陣地は一般に東南面して半永久的に構築され、機関銃座には殆ど掩蓋をかぶせ、ベトンの暗路で連絡されたものもあった。

支隊は攻撃重点を左翼に保持し、東面して攻撃しようとしたが、この方面の掩蓋機関銃座は急造ながら四、五十を下らず、第一線は前日来の部署をもって夜間攻撃を続行したため、部隊の整理意の如くならず、攻撃は困難を極めた。ようやく午前九時、右第一線大隊は城壁の西方突角を奪取し、左第一線大隊は同十時二十分城壁最高所を占領し、逐次戦果を拡張した。

しかし城壁内の敵陣地は地形を巧妙に利用し、重火器主体の火力を發揮したために城壁奪取後のわが攻撃は意の如く進捗しなかった。加えて我が軍は重火器弾薬が欠乏し、特に山砲弾薬は緊急輸送に当たった独工一〇が到着せぬ以

要図29 国崎支隊戦闘経過要図



上如何ともなす能わず、第一線は一時苦戦に陥ったが、午後二時五十分、右第一線大隊は城内高地の一角を占領、工兵の爆破と相俟って逐次敵の拠点を奪取、次いで左第一線大隊は陽北門南方の城内最高地を占領し午後三時四十分城内津浦線の線に達した。

この頃、揚子江を溯航した海軍艦隊が南京に到着したため、支隊は予備隊であった第二大隊(実数一ヶ中隊)を浦口に進出させた。

支隊は夜間攻撃を続行、午後十一時以降戦場は静寂に帰し、十一時三十分、第三大隊は浦口鎮東端に進出して、浦口を完全に占領した。

#### 四、浦口占領以後

支隊本部は十四日午前十一時、西門街を発し浦口鎮に入城した。

碼頭占領部隊は十三日夜碼頭到着後付近の残敵を掃蕩し、十四日独工一〇および山砲三主力と連絡した。

十四日夕、「江興洲(江心洲のこと)に多数の敗残兵あり」との報告により、同夜碼頭守備隊の一部(歩四一の第七、第十二中隊)と独工一〇に掃蕩を命じ、同隊は約二千三百五十名の捕虜を得、小銃約六百、軽機約四十、重機約四十を鹵獲したが、捕虜は釈放して十五日朝帰還した。

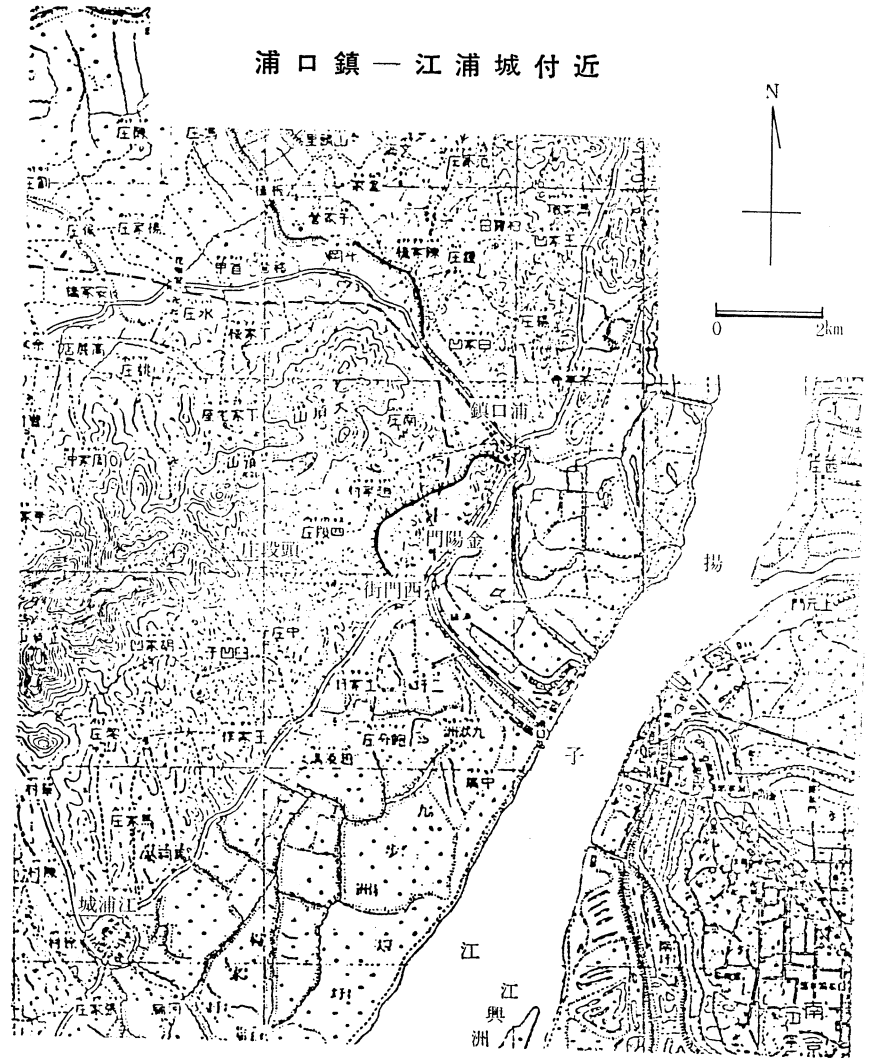
十五日、浦口付近を掃蕩したが大きな敵部隊を認めなかった。また江興洲になお多数の残敵があるとの報告により第三大隊に掃蕩させたが、「既に全く帰順の態度を示し、掃蕩の必要なく」(戦闘詳報の記述)十六日朝帰還した。

支隊は浦口碼頭に歩四一の第十二中隊、山砲一中隊、頭段庄西方鞍部には歩兵第六中隊の一部を置き、その他の部隊は浦口に集結し、同地の守備に任じた。



地図 6

浦口鎮—江浦城付近



### 第九節 第十八師団の蕪湖占領

(要図5参照)

第十八師団は北九州の子後備兵で編成された特設師団で、当初満洲派遣の予定で北九州に集結していたが、第十軍の編成と共にその隷下に入り、長崎から乗船し、洋上で第十軍司令官の指揮下に入った。

第十軍は十一月五日未明杭州湾に上陸し、その後第六師団を以て崑山、蘇州方面を攻撃させ敵の側背を衝くと共に、第十八、第百十四師団を西方、嘉善、嘉興に進出させたが、中央統帥部は、十一月十二日、伝宣命令をもって方面軍を太湖東側に停止させた。

中央統帥部は事変の短期終結を企図し、戦面の拡大を好まなかった。南京を攻略するか否かという問題は、単なる戦略的考慮を超えて、重大な政治問題であった。

柳川軍司令官は、速やかに南京を攻略すべき必要性を松井方面軍司令官および中央統帥部へ強く意見具申し、十一月二十四日、ついに制令線が廃止されたことは前に述べた。

方面軍が制令線に停止している間に、上海戦線にあった中国軍主力は南京を通過、中央直系軍は蕪湖で揚子江を渡り安徽省廬州方向へ、その他は南京—寧国—徽州を経て南昌方向に退却してしまつた。

こうして第十八師団は十一月十九日嘉興付近に進出後、しばらくこの地に止まっていたが、十一月二十四日制令線廃止に伴い、二十四日湖州、二十五日長興に進出、十一月二十八日、第十八師団の先遣隊は下泗安を、次いで三十日、国崎支隊と第十八師団の先遣隊は広徳を占領した。

(注) 中国戦史書は、寧国―広徳―泗安―安吉(泗安南方二十き)の地区の中国軍は第十五・第二十一集團軍の五ヶ師を配備と記している。

十二月一日、南京攻略の伝宣命令が下達され、第十軍司令官は第十八師団に対し寧国經由蕪湖に進出して敵の後方連絡線を遮断せよとの命令を下達した。

寧国(宣城)に向かった第十八師団は広徳を出ると、河南店(広徳西方十五き)付近において中国軍の激しい抵抗を受け停止するのやむなきに至った。

広徳にあった第六師団先遣隊長たる歩兵第三十六旅団長は、第六師団進路の左側背を安全ならしめることを考慮し、十二月三日、歩四五(第一、第二大隊欠)および野砲兵一大隊を第十八師団の戦闘に加入せしめ河南店を突破した。ついで十二月四日、第十八師団は十字舖付近に於て微弱な敵の抵抗を排除し、十二月七日寧国を占領した。

(注) 十二月八日、侍従武官・後藤光藏<sup>29</sup>期中佐は寧国の第十八師団司令部を視察した。

ついで、第十八師団は、九日江南線に沿い湾沚鎮を経て同日夕刻蕪湖東側に至り、十日蕪湖を占領した。蕪湖は南京に対する最も重要な補給基地であった。

国崎支隊の浦口占領と相俟って、南京防衛軍の退路は遮断され、南京の包囲網は完成した。

## 第十節 中国軍脱出部隊の我が後方襲撃

敵の脱出部隊(十二日夜南京からの突囲部隊のほか城外陣地に取り残されたものや鎮江から後退しようとしたもの)は、十二月十一日から十四日頃にわたってしばしば警備薄弱な我が軍後方を襲撃して南方地域への脱出を図った。敵脱出部隊の我が後方襲撃は主として第十六師団地域で惹起した。即ち敵として行動の自由を留保し得る南京東方地区(湯水鎮―仙鶴門鎮―堯化門)において、南に向かい脱出を企図したものと思われるが、攻撃は一部を除き概して無統制であった。

南京城西地区の第六師団方面においては、地域狭小のため、敵脱出部隊は我が歩兵との正面戦闘に終始した。以下概ね日次順にその戦闘状況、参戦者の証言等を述べる。

### 一、湯水鎮軍司令部襲撃

(要図33参照)

上海派遣軍司令部(方面軍の戦闘指揮所)は湯水鎮に進出していたが、十二月十三日午後より中国軍二―三千の攻撃をうけるに至った。(注・歩一九参戦者の証言によれば十二日との説もある)

当時付近にあった軍直轄部隊は、後備歩兵大隊一、戦車一ヶ中隊、野戦高射砲隊、照空隊などであったが、これら諸隊は協力して敵の襲撃を阻止し、また第九師団の予備隊であった歩兵第十九聯隊第二大隊が急遽、救援を命ぜられ、十三日夕トラック二十輛に分乗して湯水鎮に急行し、戦闘に加入したため軍司令部は危急を脱することができ

た。敵は十三日夜から十四日朝にわたり逐次四散した。

『飯沼守日記』は次のように記している。

「十二月十三日、敵ノ敗残兵午後軍司令部北側高地ニ来リ護衛隊之ヲ西方ニ撃退、小隊長（准尉）一戦死、兵一名負傷、午後五時頃再ビ北側高地ニ現ハレ高射砲モ射撃シテ交戦ス。」

「十二月十三日、軍司令部護衛ノ為9Dニ歩一大ヲ要求シタルトコロ19i全部、山砲一大隊ヲ派遣ストノコトニテ夕刻過一部到着セル筈。」

「十二月十四日、昨日ノ司令部附近ノ戦闘ニ於ケル我死傷ハ戦死准尉ニ其他十名許、負傷中隊長一、少尉二、其他二十名弱ナリ。本朝尚其残敵五百、司令部東北側ニ在ルヲ知り19i主力ヲ以テ全ク包囲投降セシメツツアリ。」同じく十二月十四日、「19iハ軍司令部附近ノ掃蕩ヲ終リ（百数十名ヲ掃滅ス）明十五日一大隊ト戦車一中隊ヲ残シ掃蕩セシメラル。」

## 二、我が集成騎兵隊に対する夜襲

（要図30参照）

『飯沼守日記』によると、「十三日、集成騎兵ハ本日午前一時頃、敵ノ敗残兵約三千ト衝突、天明頃迄ニ撃退、我死傷七〇、馬ノ損害二〇四、敵ノ遺棄死体ハ七百ヲ下ラス、鹵獲品多数トノ報告アリ」と記されている。

南京攻略戦にさいし師団騎兵はこれを集成して集成騎兵隊（3K・9K・17K・101K）として軍直轄部隊となり、騎兵第九聯隊長・森吾六<sup>23</sup>期大佐が指揮した。十二月十一日、第九師団と第百十四師団の間隙を閉鎖するために、徒歩部隊となって同方面に進出しようとしたが、軍命令により、紫金山北方地区を迂回して、下関付近に進出し、敵の退路を遮断することとなった。（3K史）

騎兵第三聯隊本部書記・加藤正吉氏<sup>少佐</sup>22期の回想によれば、

同日二十四時頃、第十六師団の右翼は堯化門付近に進出した。

明くれば十二日、天気快晴、各部隊は南京攻撃を前にして、人馬の補給を完整し、同夜は集成騎兵隊の前哨部隊として警戒配備についた。

十二日二十四時ごろ前哨中隊であった第二中隊（長木村正世<sup>43</sup>期大尉）正面に、銃声とともに爆発音が熾んとなり、伝令は『第二中隊正面に、兵力不明の敵大部隊が本道上を怒濤の如く東進中、第二中隊は目下この敵と交戦中』と報じた。

聯隊長・星善太郎<sup>24</sup>期中佐は直ちに非常呼集を命じ、各隊に戦闘配置の命令を下達した。

聯隊長は第一中隊、MG小隊の進出を確認した後、副官・川島大尉以下五名を前線に派遣した。戦場は一時小康状態となったが、再び激しい銃声がおこり本部付近に負傷者が次々と搬送された。

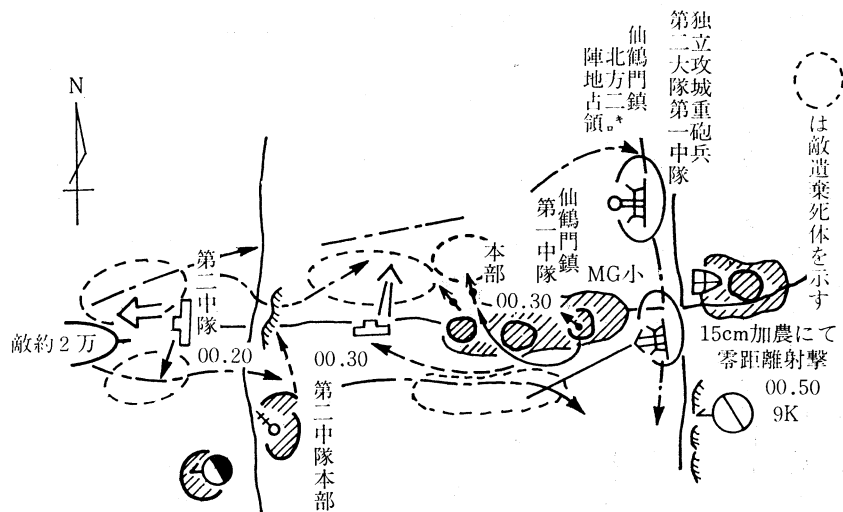
敵の大縦隊は無統制のまま夜陰に乗じて味方の屍を乗り越えて東進をつづけ、わが重砲陣地（独立攻城重砲兵第二大隊第一中隊）まで乱入した。この激戦は翌十三日午前九時ごろまで続き敵に与えた損害も大きかったが、わが部隊の犠牲も上陸以来の最大、戦死者十四名、戦傷者八名、戦死馬匹三十八頭に達した。

MG小隊長・福井正勝氏<sup>47</sup>期の日記によると、「当正面の遺棄死体約三千にして、同士討ちによるもの多し」と記している。数は正確に調べた数ではないが、百五十九師長の死体が含まれていることは注目される。

捕虜の言によれば、仙鶴門鎮付近に進出してきた敵は南京守備の第百五十九師を基幹とする約二万で、十二日、日没とともに玄武門を脱出し、玄武湖南岸を経て堯化門の南を通り、仙鶴門鎮に進出したものであることを確認した。

要図30 騎兵第3聯隊の仙鶴門鎮付近夜間戦闘經過要図

自 12月12日夜半  
至 12月13日未明



(注) 3 K史によると、南京城内に待機していた百六十師、百五十九師、三十六師、百五十六師、七十四師の五ヶ師が、紫金山北側地区を経て脱出してきたものと判断している。

しかし、中国側の『抗日戦争正面戦場』陸軍第六十六軍戦闘詳報(四三五ページ)には、「第百六十師は十三日二十四時仙鶴門以南の陣地を奪取し……」とある。以上中国側戦闘詳報によれば、中国軍第百五十九師は第百六十師の後尾に続行しているが、三十六師、百五十六師、七十四師(南京衛戍軍には第七十四軍はあったが、七十四師はない)等は建制部隊としてはこの戦闘には参加していなかったと思われる。

### 三、攻城重砲兵に対する夜襲

(要図30・33参照)

この戦闘は『小戦例集』(教育総監部編)第四輯第三十六(砲兵)に、次のように記載されている。

「十三日夜半、約五千の敵が、仙鶴門鎮の集成騎兵隊、攻城重砲兵第一中隊の一門を夜襲し、翌十四日八時、堯化門南方の楊坊山、新庄(攻城重砲兵第一中隊主力が位置した)に約二、三千の敵が来襲。十二時ごろ約七千名が堯化門附近において投降せり。」

(注) 仙鶴門鎮の集成騎兵隊に対する夜襲は、前項に記述したとおり十二月十二日二十四時から翌十三日九時ごろまでが正しいと思われる。

沢田正久<sup>49</sup>期少尉(独立攻城重砲兵第二大隊第一中隊観測班長)の証言

十二月十三日、仙鶴門鎮付近で中国軍首都防衛決死隊の夜襲をうけ多数の投降捕虜を得たので、その状況を略述します。

十二日夜、紫金山山頂が我が手に帰し、南京城壁の一部が占領されると、敵の一部は紫金山北側を経て東方に脱出を図り、仙鶴門鎮および新庄付近を夜襲したのです。当時、この地区には集成騎兵隊だけで歩兵中隊はおりませんでした。

中隊主力は十二日、仙鶴門鎮北方約二<sup>50</sup>キの墓地に陣地進入して放列(八九式十五<sup>51</sup>加農砲四門)を敷きましたが、私は観測班長として、墓地北西北西約一<sup>52</sup>キ、高さ約五十<sup>53</sup>呎の揚山に観測所を設け任務につきました。

十二月十三日、私は乗用車で佐々木支隊の進路を追い、約四<sup>54</sup>キ進んだところで左右から銃撃をうけ、これ以上

の西進は危険と感じ、もとの観測所に帰りました。

夜に入り宿営の用意にかかりました。当夜は真<sup>55</sup>暗でしたが、十時すぎ遙か西方から敵の大集団らしい喊声、チャルメラ、迫撃砲の音が聞こえ、だんだん我々に近づいてきました。

直ちに陣地に展開しましたが、これは射撃のためではなく自衛のためで、暗夜のため小銃射撃も一切禁止されました。やがて仙鶴門鎮付近で夜間戦闘が展開されましたが数時間の白兵戦の後、敵の主力は再び引き返してしまいました。

十二月十四日、夜明けの道路には敵の中尉が死亡しているのを発見しました。私は梶浦俊彦中隊長とともに自動車で仙鶴門鎮へ走り部隊を点検しましたが、庄野欧一少尉以下、火砲、人員ともに健在を確認しました。周辺には敵の屍体が累々として横たわっていました。

それから一時間ぐらいいして午前八時ごろ衛兵所に行ってみると、驚くなかれ、揚山に向かって西方から統々と敵の大部隊が登ってきました。中隊長に報告すると、中隊長は「友軍ではないか」と疑ったほどでした。

直ちに全員散開、このとき早くも放列付近には敵の弾雨が集中しはじめました。中隊長の命令により、わが方は取り敢えず火砲一門を操作し、威嚇のため零分画射撃をおこないました。

敵は山の反対斜面に移るとともに、稜線上の観測隊に向かってチェコ機関銃で盛んに射撃してきましたが、やがて友軍増援部隊が到着し、敵は力尽き白旗を掲げて正午頃、投降してきました。投降捕虜の取扱

投降兵の行動は極めて整然としたもので既に戦意はまったくなく、取りあえず道路の下の田圃に集結させて武装解除しました。多くの敵兵の胸には「首都防衛決死隊」の布片が縫いつけられていました。

捕虜の数は約一万でしたが（戦場のことですから、正確に数えておりませんが、約八千以上いたと記憶します）、早速、軍司令部に報告したところ、「直ちに銃殺せよ」と言ってきたので拒否しましたら、「では、中山門まで連れて来い」と命令されました。

「それも不可能」と断わったら、やっと「歩兵四ヶ中隊を増援するから、一緒に中山門まで来い」ということになり、私も中山門近くまで同行しました。（これらの捕虜は19ページに述べたように下麒麟門付近の仮收容所に護送され、二三日後に南京第一監獄所に送られた）

この首都防衛決死隊は、重機関銃、迫撃砲を中心に装備され、正規兵のほかに一般市民の志願兵（大学生など）も、かなり加わっていました。全員軍服姿でしたが、英語を話す者、ブローニングの肩掛け大型拳銃を持っている者も居り、集団行動はよく統制されていました。

さて、この首都防衛決死隊の行動を、どのように判断したらよいでしょうか。

この中国軍の大部隊は城内に布陣していたものではなく、紫金山を拠点とする重層陣地に配備されていた部隊が、日本軍の間隙を縫って東方に脱出を企図したものと思われまます。当時、日本軍は南京一番乗りを競って錐をもむように突進し面的に制圧したわけではなかったので、紫金山北麓一帯には多数の残敵が潜在（残存）していたものと思います。

仙鶴門鎮には集成騎兵隊が居り、戦闘の主役はこの集成騎兵隊で前哨中隊長は陸士45期前後の方だったと思います。また、この投降捕虜を引き渡した歩兵部隊名は思い出せませんが、麒麟門付近に待機していた軍か、師団の子備隊から派遣されたものと思います。

ちなみに、私が陸軍士官学校を卒業する直前の昭和十二年六月、市ヶ谷の大講堂で、飯沼守<sup>21</sup>期生徒隊長の記

念講演「捕虜の取扱いについて」を聞き、捕虜は丁寧に取扱わねばならないと教えられました。その生徒隊長は、いま上海派遣軍の参謀長であります。

卒業後、わずか五カ月の今日、「直ちに銃殺せよ」とは、いったい誰が決定し誰が命令を下したのか。当時、私の胸が痛んだ印象は、従軍中よりも今日に至るまで私の脳裡から離れません。

（注）この捕虜は歩三八第十中隊が收容し、後日南京城内へ護送している。（第六章参照）

#### 四、佐々木支隊後方部隊に対する襲撃

佐々木支隊主力（I/33 i・38 i（III欠））は、十二月十二日夕以降堯化門以西地区に前進し、主として歩三八第三大隊が後方（岡下―堯化門―仙鶴門鎮地域）の警備にあたり、十三日には第三大隊主力は下関に向かい掃蕩にあたった。

澄田政夫氏（49期歩兵第三十八聯隊第十一中隊小隊長）の証言

澄田氏は、今日まで保存されていた南京滞在間、家郷に送られた私信と、太平庄から下関に至る聯隊の行動経過要図をもとにして次のように証言した。

「十二月十三日、岡下の戦闘は不期遭遇戦でした。私たち第十一中隊は野砲兵大隊の護衛中隊でしたが、敵は不意に後方つまり東南方から現われました。

野砲は急遽、陣地を占領して零距離射撃で榴霰弾を浴びせ、交戦約一時間余で敵は多数の死体を残して四散しました。

この敵は、上海方面から敗走してきたものか、紫金山から敗退して脱出を試みたものか、あるいは南京城内から

脱出した敵であるのか不明でしたが、私にはどうも、上海方向から敗走してきた敵ではないかと思われました。」  
このほか『山崎正男日記』（33期第十軍参謀）には「十二日、長興飛行場、平湖付近において、十五日、溧水付近において敵敗残兵の我後方擾乱あり」と記されている。この種の不期戦闘は各所に起きていたようである。

## 第十一節 海軍第十一戦隊の南京碼頭突入

（要図29・31参照）

### 作戦経過の概要

鎮江より烏竜山砲台へ

海軍第十一戦隊（司令官・近藤英次郎少将、旗艦・安宅）は、揚子江の水路を啓開し陸軍と協力して敵首都を攻略すべき任務をもって、十二月十一日夕刻、鎮江に突入し南京に向かう溯航作戦を準備した。

当時、烏竜山付近下流までの南岸は、陸軍の天谷支隊（歩兵第十旅団基幹）の一部が進出して残敵を掃蕩中であったが、南岸には中国軍砲兵陣地があり、溯航部隊の進撃を極力阻止しようとしていた。

第十一戦隊は十二日午前八時三十分、前衛部隊（二見ほか五隻）、主力部隊（安宅ほか五隻）の順で進撃を開始し、左岸一帯の敵を制圧しつつ前進し、午前十二時三十分ごろ、烏竜山閉塞線付近に到着して啓開作業を開始した。北岸の劉子口付近から野砲、機銃、小銃の射撃をうけて一時掃海作業を中断したが、午後三時三十分ごろ、主力部隊が到着し、海軍航空機も烏竜山砲台および北岸陣地を砲爆撃した。

同夜午後十一時三十分頃、諸岡安一少佐指揮の工作隊が閉塞船をつなぎとめていたワイヤーを切断し箱舟やジャンクを取り除き、約三時間後に幅三百メートルの水路を開いた。

南京突入（十二月十三日）

烏竜山砲台の中国軍守備隊は十三日未明、第十三師団山田支隊の進出および海軍部隊の砲爆撃により敗走した模様であり、南京においては陸軍部隊が城内に突入しはじめていた。

近藤司令官は速やかに閉塞線を突破して南京に進出するに決し、午前十二時ごろ、各隊に進撃を下令した。これより先、保津、勢多は霧の晴れるのを待って午前一時三十分抜錨、閉塞線を突破して劉子口敵砲兵陣地からの射撃を反撃しつつ烏竜山砲台と水路を偵察し、命によりいったん引き返した。

前衛隊（保津、勢多ほか四隻）は午後一時三十分、主力隊（江風、涼風ほか三隻）は午後三時十五分、泊地を発進、単縦陣で閉塞線を突破し、南京に向かい進撃した。さらに主力隊の後には、第一水雷隊がこれを追った。

江上、江岸には敗走する敵の舟艇、筏が充満していた。各艦はこれに射撃を加え、さらに天河口、疏安工場付近の中国軍野砲陣地、その他の抵抗を排除しつつ前進し、先頭の保津、勢多は午後三時四十分、主力隊は午後五時南京に突入した。

第一掃海隊は南京到着後、ただちに泊地を掃海し、また浦口棧橋を確保した。陸軍部隊は同日夕刻、南京城を完全に占領した。

#### 米国砲艦パネー号遭難者の救援

十三日午前九時、長谷川（清）支那方面艦隊司令長官は、米国東洋艦隊司令長官から「十二日午後二時十分以降、砲艦パネー号との無線連絡が絶えた」との通報をうけた。調査の結果、前日、第二聯合航空隊の飛行機が、南京上流二十六湮付近において中国船と誤って撃沈した船が、米国砲艦パネー号および米国商船であったことが判明した。

長谷川長官は、航空部隊に対し揚子江における艦船の爆撃を禁止するとともに、遭難者救助に全力をあげるため、

南京突入直後の保津に、「即時、開源碼頭付近で遭難したパネー号の救助に向かえ」と命令した。

保津は直ちに下関を出港し午後八時三十分頃現地に到着、同地に在泊中の英艦ビービー号に先任将校・橋本以行大尉（海兵59期、のち米重巡インディアナポリスを撃沈した伊号第58潜水艦艦長）を派遣した。

同大尉は英艦の内火艇に乗り移り北岸の和泉に至り、夜を徹して同地に避難中のパネー号遭難者の救助、負傷者の収容にあたり、十四日朝帰艦した。

#### 南京突入後の行動

十四日、第十一戦隊は、敗残兵の掃蕩、航路の啓開を続行した。

「掃四」は蕪湖に進出、二見、熱海は草鞋峽水路を啓開、比良および「特掃」二隻は、鎮江において天谷支隊の渡江作戦に協力、特別作業隊は烏竜山閉塞線の拡大啓開、保津、鵠、安宅、鴻、江風は、パネー号遭難地にあつて救助作業に従事した。

また、各艦艇は陸戦隊を揚陸して、江岸の敗残兵を掃蕩し、下関の海軍碼頭、中山碼頭一带を占領した。

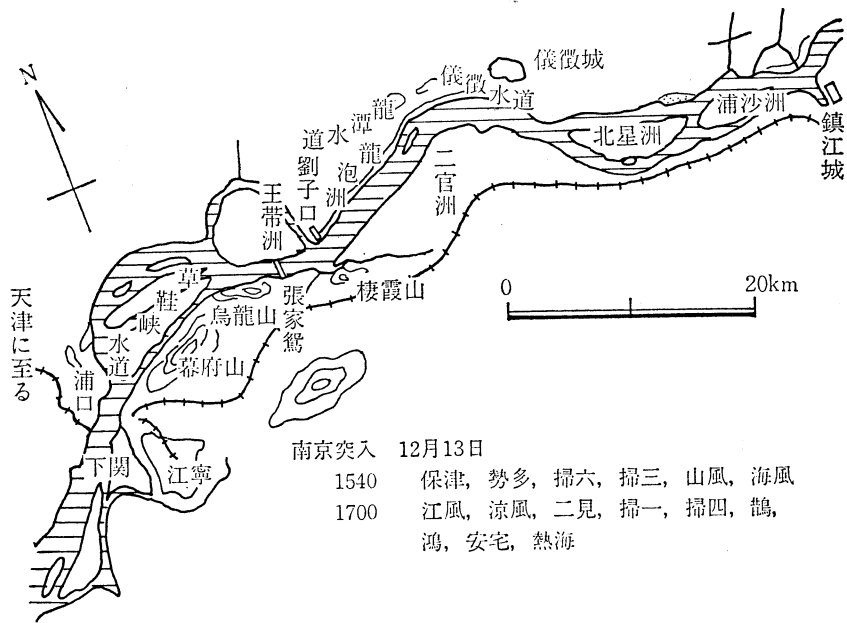
十五日、梶、「掃二号」は、それぞれ南京下流および竜潭水道において残敵掃蕩。保津、鵠は一晩中、執拗な敵の狙撃をおかして、パネー号遭難者の救助作業に従事した。

午前一時、米砲艦オアフ号および英砲艦レディバード号は遭難者の収容を終わり、鵠は両艦を嚮導して下江した。また、保津は夕刻、蕪湖に進出した。

十六日、南京付近に在泊の艦艇は、十五日夜から引き続き江上の残敵を掃蕩した。また、二見、勢多は陸戦隊を揚陸し、疏安工場一帯の敵陣地を占領した。



要図31 海軍第11戦隊溯航作戰經過要図  
鎮江—南京



十七日、午後、南京入城式  
長谷川支那方面艦隊司令長官、大川内（伝七）上海海軍特別陸戦隊司令官、近藤第十一戦隊司令官は幕僚を従えて  
挹江門から入城、中山路に堵列する上海特別陸戦隊の二ヶ大隊と、艦隊陸戦隊を閲兵し、式場の国民政府に向かっ  
た。

このとき、海軍航空隊と陸軍航空部隊が南京上空に飛来、分列式を行い、南京攻略戦はここに終結した。

## 参戦者の証言

橋本以行海軍大尉（保津・先任将校）の証言

橋本大尉は第十一戦隊の先頭保津に乗り組み、江上を脱出する敵を掃射しつつ十三日午後三時五十分、下関棧橋に横付けしているが、『流れる敵兵をかきわけて』と題してその回想を次のように述べている。

「溯ると小舟に乗った敵兵らしい者……棧橋用の箱舟や筏が現われた。近くの一隻から盛んに手を振る者がおる。我々を中国の艦艇と間違えたのかも知れない。双眼鏡で見ると、カーキ服を着て戦闘帽を被った姿である。近くを流れる戸板の上に横たわっている中国兵を見ると、顔をシャベルでかくして背後にチェコ機銃を横たえ、死んだようにしている。芦が生い茂っている草鞋洲（八封洲）に多数の中国兵が見える。

このような敵を射ちまくりながら前進したが、弾丸が欠乏して好目標しか射つことができない。後続の勢多が下関棧橋に近寄った頃には、江岸の一角には敵兵が黒山のように重なり合っているのが見える。

その後保津は棧橋を離れて沖合に投錨したが、城壁から江岸にかけて、一面に青黄色の軍服の上衣が脱ぎ捨ててあるのが、秋の木の葉を散り敷いたように夕陽に照らされていた。」

関口敏造海軍大尉（海兵59期勢多・次席大尉）の証言

勢多が下関棧橋に横付けするまでの戦闘状況は、橋本氏の証言と変わらないが、「十三日夕刻、陸軍大佐の率いる一団が勢多に來られ……これが南京地区における陸海軍接触の最初ではないか」と述べている。（注・歩兵第三十三聯隊本部の平井秋雄通信班長は勢多の寺崎中佐を訪れている）

十五日には、関口大尉は艦長の命令により単独で城内を偵察している。そして、星条旗を掲げた建物（鼓楼病院の裏手に在った）で Fitzroy（フィッツロイ）とどう Amembassy (American Embassy) と会ったこと、挹江門から下関碼頭に至る道路には、日本軍の検問所が多数あって往來する支那人を検問しており、海軍士官の制服が中国軍のものに似ているため危うく中国軍將校に誤認されかけたこと、挹江門から碼頭に至る道路西側に中国兵の死体を散見して、陸軍の肉弾相搏つ Face to Face の戦闘の悲惨さを実感したこと等を述べている。

住谷盤根氏（艦隊従軍画家、安宅乗組）の回想記

雑誌『東郷』（五十八年十二月号）によると、住谷氏は南京陥落直後（正確な日時不詳）、自動車により下関碼頭から累々たる伏屍を越えて興中門から市内に進入した。森閑とした人影まばらな市内の状況、夕暮れどき野犬が中国兵の死体を食い荒らしている状況、街路で日本の歩哨に中国兵と疑われて誰何され、すんでの所で一発撃たれるところだった状況など述べている。

また、帰艦後同日夜、暗がりの中で下関碼頭を左へ行った江岸の鉄の柵のところ、縛られた捕虜推定約千人足らずが陸軍の兵士によって五人ずつ刺殺される光景を目撃している。

泰山弘道氏（支那方面艦隊司令部軍医長・海軍軍医大佐）の従軍日記

泰山大佐は、南京入城式に参列するため長谷川司令長官に従って十六日午後、上海から南京の下関に飛び安宅に宿泊した。十六日～十八日にわたり城内外を視察し、新戦場の情景を克明に記録している。

「十六日、下関の棧橋を出づるや、揚子江の岸には敵が退却に際し捨てたる褐色にして打出の小槌の形をなせる手

榴弾、鉄兜が無数に散乱せるあり。下関碼頭より一直線の舗装道路を走るに、路面には小銃弾丸散乱して恰も真鍮の砂を敷きたるが如し。路傍の草原には生々しき支那兵の死体散乱するあり。挹江門を潜るに徐ろに進む自動車は空気を充滿せるゴム袋の上に乗れるが如く緩やかなる衝動を感じつつ軋るあり。これ車が無数の敵死屍埋れる上に乗れるなりと。漸く門を潜り抜けて南京側に出づれば、敵の死屍累々たるが、黒焦げとなり……市内に近づくに従ひ、敵の遺棄せる藍色木綿の便衣はあたかも襤褸の如く道路を埋め……午後四時四十四分、帰艦す。夜に入れば、満月に近き冬の月光は江上を照らし時々静寂を破る機銃の音は、抗日の執念抜くべからざる幾千の敵兵が魂消えゆく音なり。凄絶槍絶の光景、これ新戦場の夜半なり。」

なお、泰山氏の従軍日記の詳細は資料集を参照されたい。

## 第十二節 第三国人の見た城内外の情況

ここで視点を變えて、陥落前後の南京城内の様子、とくに「安全区」について、第三国関係の公文書、日記、新聞報道などに基づき要点に触れておきたい。

### 国民政府の重慶移転と安全区の設定

上海戦線の崩壊が決定的になった十一月十九日、国民政府国防最高会議は、首都の重慶移転を決定した。既に度々の日本機の爆撃や戦況の不振により富裕階級の逃避は始まっていたが、予想される日本軍の南京攻撃に備え、政府機関や重要美術品の移転、外国人、一般市民の南京退去と、逆に防衛陣地の構築、兵力の配備などにより街は急速に戦場の雰囲気がいじめた。

十一月下旬、南京に残留した外国人有志は、残留市民を戦禍から守るため国際委員会を結成した。これは上海・南京市でフランス人ジャキノー神父が設定して成功した安全地帯にならって同様のものを南京にも作るうという趣旨で、英米独各国大使の斡旋により日中両軍司令官と交渉が行われた。

この申入れに対し、十二月八日、日本大使館スポークスマンは不承認の声明を發した。その理由について当時、南京大使館参事官であった日高信六郎氏は極東軍事裁判宣誓口供書に次のように述べている。

(一) 此の地区の位置が、軍事上から見て南京市内で戦闘が行はれた場合、其の安全を保障するに都合が悪く、

(二) 其の地区内に中国側の高級武官が幕僚と共に居住して居り、(三) 委員会自体が此の地区内の秩序を確保し、外部から敗残兵其の他好ましからぬ分子が立入ることを防止し、以て其の「中立性」を保持する丈の実力を持たなかつたからであります。

このように正式の承認はされなかったものの、実際には中立性は尊重され、戦闘に際してこの地区への砲撃は行われず、「一発のそれ弾(四十人死傷)があつたほか、被害は無かつた」ことを国際委員会も認めている。

#### 安全区 Safety Zone へ国際委員会

安全区(日本側通称「難民区」)は城内新街口(中央ロータリー)の西北に位置し、南は漢中路、東と東北は中山路および中山北路、北は山西路、西は西康路を境界とする南北三き、東西二き、面積三・八六平方きの地域で城内面積の約八分の一を占めていた。この地区は日本大使館・アメリカ大使館・イタリヤ大使館・オランダ公使館等の外国公館、司法院・最高法院等の官庁、金陵大学・同付属鼓樓病院・金陵女子文理学院・教会その他ミッション系の建物が丘陵の間に点在する高級住宅地であつた。

南京安全区国際委員会は、委員会から日本軍にあてた第一号公文書によれば、別表のように委員長ジョン・H・D・ラーベ(独・ジーマンス洋行)、書記ルイス・S・C・スマイス(米・金陵大学教授)以下、委員は米・独・英・デンマークの商社員、宣教師、教師など十五名で構成されていた。この表には名が挙げられていないが地区の管理者はジョージ・A・フィッチ(米・南京YMCA副委員長)であつた。

別に国際赤十字南京委員会が委員長ジョン・G・マギー(米・聖公会布教団牧師)以下十七名(七名は国際委員会委員と重複)で構成され、外交部・鉄道部・国防部内の中国軍野戦病院の管理に当たつていた。

十二月一日、南京市長・馬超俊は退去に際し、警察・消防一切の市政府の職權と、米三万担・小麦粉一万袋を委員会に委託した。したがって日本軍入城の十三日まで国際委員会は事実上南京市唯一の行政機関であつた。

#### 安全区の収容施設、収容人員

(要図32参照)

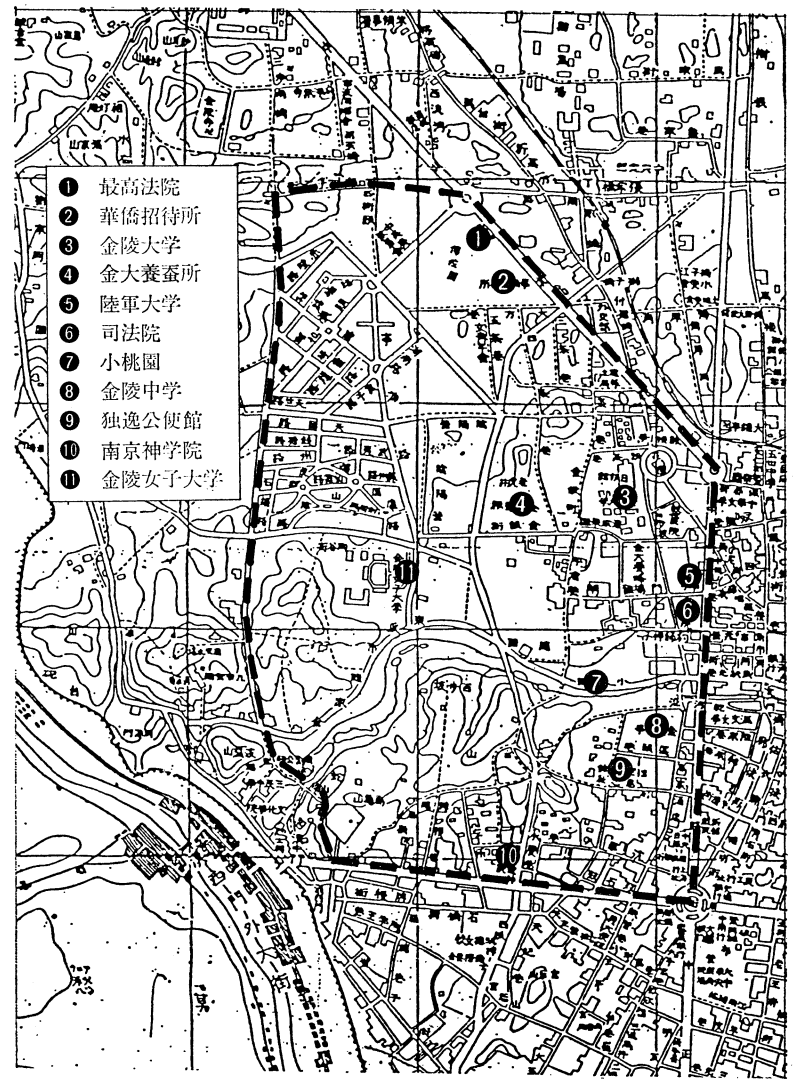
安全区に設置された難民収容所は、十二月十八日付で委員会から日本大使館に送ったT(英紙マンチェスター・ガーディアン特派員H・J・ティンパーリーが記録した文書の整理ナンバー・以下同じ)七号公文書付属の一覽表によれば別表のようである。

これら二十箇所の公共施設の収容定員は三万五千名であつたが、婦女子の間に生じた恐怖状態のため五万人にふくれあがり、またT六号公文書の記載では、十三日、日本軍入城の際、安全区内に一般市民のほとんどが集まつておりその数は二十万人とされている。

後日の記録としては、昭和十三年一月十四日のT一九号公文書には、日本軍に登録した市民は十六万人(十歳以下の子供及び年をとつた婦人を除く)で、同年三月の金陵大学スマイス教授による抽出調査では南京市の全人口は二十五〇二十万と推定されているが、この頃になると収容所に住んでいたのは二万七千五百人(調査人口の一二%)、収容所外の安全区に住んでいたものは六万八千人(同三一%)と安全区人口はかなり減少している。

日本軍側の推定はもっと少なく、『松井石根日記』が十二万余、第十六師団参謀長・中沢三夫大佐の述懐によれば「居住証発行状況よりの推算十数万内外」である。

要図32 城内安全区（難民区）収容所位置要図



堅壁清野

日本軍の南京攻撃が迫ると、市の内外は対戦準備と住民避難が交錯し、非常な混乱が始まった。中国軍は射界の清掃と、陣地構築の資材を獲得するため建物を破壊し、日本軍に利用されるのを防ぐため民家を焼却した。下関地区では城壁から二、三百メートルの民家・商店はすべて焼き尽くされ、一時間ほどで江辺は火の海となった。燃える音に混じって、泣き声や罵り叫ぶ声が聞こえた。

八十七師二六一旅長・陳頤鼎は鎮江より南京に転進の途中、七日夜、堯化門から孝陵衛まで夜行軍したが、通過した村落は到る所家屋が破壊され、焦煙の臭い鼻を刺し、鶏は鳴かず人の気配も無かった。【南京保衛戦】

この混乱の状況を伝える外電を『朝日』『東京日日』『読売』『ニューヨーク・タイムズ』『日中戦争史資料』洞富雄編その他)等の各新聞記事から構成してみよう。括弧内は原文の引用である。

「首都陥落を前にして支那軍は七日も南京市外十マイルの地域内にある全村落に火を放ち、日本軍の進撃に便宜を与へるやうな物はすべて焼払はんとしてゐるため南京市は濛々たる黒煙に包まれてしまった。記者(「ダーディン」)は自動車を駆つて南京市東部の戦線へ視察に赴いたが、中山門を出ると総理陵苑の彼方の低地は一面猛火の海と化してをり、焼け落ちた家々からは今まで踏み止まつてゐた村民の群が、僅ばかりの家財道具を背負つたり小脇に抱へたりして、よろめきながら城内指して逃げ込んで来る。【ニューヨーク特電・七日】

「中国軍の堅壁清野戦術により南京郊外の農村はほとんど焼払はれた。中立国軍事専門家の目には、この焼払ひは、軍事的には日本軍の阻止に殆ど役だたず、ただ農民たちに計り知れない惨禍をもたらすジンスカン以来の組織的破壊と映つた。【ニューヨーク特電八日・朝日十日夕刊・要約】

## 城内外の混乱と避難命令

十二月初めには、南京に通ずる道路には鉄条網、壕、トーチカが十重二十重に構築され、城門は土囊を積んで閉鎖の準備が始まった。

「城内では毎日漢奸狩りにかかつて銃殺されるもの数知れず、電柱、街角等にはこれ等の鮮血に塗れた晒首が到るところに見られ」貧民の餓死が続出するという混乱である。【読売上海・一日】

「落城前夜の南京城内は文字通り死の街と化し……街の辻々には憲兵が立つて戒嚴に任じて居り、折々將兵を積んだトラックがフルスピードで走っていくが、轟々と轟く砲声の合間々々には無気味な静寂が街全体を覆ひ、犬の遠吠が耳を衝く。揚子江対岸の浦口に移った火災は夜に入ると共に火勢益々物凄く、火災は月既に没した長江の濁流に映じ凄惨の氣言語に絶する。」【同盟・七日】

七日頃になると家を焼かれた城外の難民も加わり市内は騒然となつて来る。

「南京市民は逸早く国都を棄てて浦口その他に四散し市内には南京防衛の主力部隊と二十万の難民を残すのみとなつたが、これ等難民は在留外人の提唱になる避難地区に蝟集しつゝあり、……一帶の街路に砲声に怯える貧民が食もなく朝寒に震へてゐる様は悲惨の極を尽くしてゐる。」【同盟・七日】

「南京城外数百の村落は敗退する支那軍の放火によつて悉く焼払はれ、黒煙濛々として空を蔽つてゐる。焼払はれた各村落の住民は、着のみ着のまゝで市内の避難区に陸續と遁入、城内の危険区住民も亦雪崩を打つて避難区に逃込み混雑を極めてゐる。市内では早くも暴徒が民家の掠奪破壊をはじめた。官憲は暴徒に対しては嚴罰を加へ、すでに六名を銃殺に処したが殆んど手の着けやうのない有様である。南京在留諸外国人から成る避難民救済委員会は避難民

收容食糧供給の準備を急いでゐるが、避難民の数が多く手が廻りかねてゐる状態である。」【同盟ニューヨーク・八日

・A P】

「蔣介石委員長、宋美齡は早朝飛行機で遂に南京をおちた。漢口に向つたと伝へられたが行先は不明である。蔣委員長は都落ち伝はるや、全市民は家財を抱へて避難民区に雪崩込む。」【外人の日記・七日（東京日日新聞十二月二十日夕刊）】

「南京軍当局は八日朝正式避難命令を発しかねて準備中の国際安全区域委員会が安全区域の標識を掲げると待ち構へた避難民の群はわれ先にと殺到し瞬く間に安全区域は家財を山のやうに積上げた自動車、人力車が道路を埋めて身動きも出来ず老人、女子供はこの寒空に道路一杯、その数約八万と称された。南京安全区域国際委員会は全力を尽して区域内の建築物、学校、倶楽部等を接收し管理規則を設けて貧困者を優先的に收容し、すでに六万五千人を屋内に收容、紅卍字会、紅十字会は全力を挙げて炊出しを行つてゐる。南京衛戍司令唐生智はどさくさに乗ずる市民の暴動を恐れて七日朝来市内警備を一層嚴重にし少しでも怪しいものは手当たり次第に銃殺し、すでにその数、百名に及んでゐると支那紙は報じてゐる。」【東京日日・上海八日発】

## 中国軍の退却と掠奪放火

「土曜日（十一日）には中国軍による市内の商店に対する略奪も拡がつてゐた。略奪の目的が食糧と補給物資の獲得にあることは明らかであつた。南京の商店は安全区以外では経営者が逃げてしまつてゐたが、食糧は相当に貯蔵してあつた。」【ニューヨーク・タイムズ・二十二日上海発、T・ダーデン】

「城外の支那軍総崩れとなり八十七師、八十八師、教導総隊は学生抗日軍を残し市内に雪崩込み、唐生智は激怒し

て彼が指揮する三十六師に命じ、これら敗残兵を片つばしから銃殺するも大勢如何ともする能はず唐生智は憲兵とともに夜八時ごろ何処ともなく落ちのぶ、敗残兵の放火、掠奪なさざるはなく、電灯は消え月光淡くこの世の末かと疑はれる、電話全く不通となる。【一外人の日記・十二日東日】

十二日午後、中国軍の退却が始まった。

「支那軍ノ退却ハ市街南部ノ部隊ノ退却ヲ以テ徐々ニ開始セラレタ。退却命令ハ退却ノ開始ヲ午後八時ト定メテキタガ、實際ニハモット早ク開始セラレタ。午後五時迄ニハ退却ハ秩序アル集団トナツテ極メテ静粛ニ開始セラレタ。午後五時ヲ過ギルト調子ハ速クナリ、次第ニ秩序ハ乱レ、遂ニ真夜中近く、退却ハ本当ノ大潰走ニ変貌シタ。」

【ドイツ大使館報告・一ドイツ人の秘密見聞記】（極東国際軍事裁判提出書証）

暴徒化した中国軍は安全区全体に広がり、多数の者が軍服を脱ぎ市民から便衣を奪い、あるいは下着になって残された唯一の脱出路下関に急いだ。軍服と共に武器も放棄され、交通部の前あたりの街路は軍装品で埋まった。夜半この市内で最も立派な建物に火が放たれ、内部に貯蔵してあった弾薬が何時間も爆発を続け、翌十三日夜まで燃え続けた。

閉鎖された挹江門を通り抜けようとした中国軍は城門で阻止された。退却命令の不徹底から、狭隘な通路に殺到した中国兵たちと、潰走兵を武力阻止するよう命ぜられていた守備隊（第三十六師二二二団）が衝突し、双方が発砲して大パニックとなった。銃撃の死傷者と後方からの圧迫で多数の兵士が踏み潰され、高さ二メートルにも及ぶ死体の山が築かれた。それを乗り越えた兵士たちの多数が、垂直の城壁を急造ロープで降りようとして墜死した。教導総隊輜重營長・郭岐はこの阿鼻地獄を避け、部下五百名とともに安全区に入り、自身はイタリア領事館に潜入した。同じく光華門守備の工兵營長・鈕先銘もこの混乱で挹江門に近付けず、部下と共に金川門（京蕪鐵路用の城門）から辛う

じて脱出したが、行く手の下関は猛火に包まれていた。

その下関はまた、残された少数の船を奪い合う地獄であった。三万人は輸送できると期待した二隻の大型汽船は、一度渡江したまま再び岸に帰らず、運輸司令部として小型船を確保していた第三十六師のみが半数渡江できたが、他の多くの部隊が岸に残された。岸を離れた船の中には、積み残されて狂気となった兵士から銃撃されて覆るものもあった。数千の兵士が材木やベッドから果ては便桶まで使い、縄やゲートルで結んで急造の筏を作り、あるいは竹竿、天秤棒などおよそ水に浮くものを頼りに揚子江に漕ぎ出したが、途中で分解したり急流に覆ってその多数が溺死した。鈕先銘も川に落ちたが岸に泳ぎ着き、多くの見知らぬ兵士たちと共に北方、上元門方向に遁走した。

暗夜の碼頭に取り残され、首を伸ばして次の渡船を待つ兵士たちの哀号呼救の声は、遙か対岸まで伝わり、これを聞く者は、まさに人世の至惨にただ暗然と涙を流すのみであったという。

退却が始まった十二日夕刻より、日本軍の先頭部隊が到着するまでのおよそ二十時間の間に、挹江門から下関碼頭に至る地域では、撤退作戦の不幸際によって「空前未曾有の惨劇」（郭岐）が展開され、無数の中国軍兵士の生命が失われた。

この死体の山は、日本軍が入城後片付けるまでの一兩日の間は、板を渡して自動車を通さねばならぬほどの惨状であった。ニューヨーク・タイムズのダーディン記者はこの死体の山を「高さ六フィートの塚をなしていた」と報道したが、その原因を日本軍の下関門（挹江門）占領による大量虐殺と誤認し、死体の放置を、日本の恐怖政策（みせしめ）、と非難している。

十三日午後、日本軍が下関に到着し、袋のネズミとなった城内の中国軍は、武器を捨てて安全区に逃げ込み、外人の保護を頼んで市民の中に潜入した。（『南京保衛戦』『還俗記』その他による）

## 日本軍の入城

「十二月十三日午後遅ク、最初ノ日本軍ヲ市内ニ見受ケタ。最初日本軍ハ極メテ正当ニ且或ル程度鄭重ニサハ行動シタ。国際委員会ハ直チニ日本軍ト連絡ヲ付ケ、再ビ安全地域ノ承認ヲ得ルニ努メタ。右承認ハ拒否サレタノハ事実デアルガ、今ヤ広イ正面デ『ポツダムール』広場迄深く進出シテ来タ日本軍部隊ハ中立的態度ヲ持シテキタ。』【ドイツ大使館報告】

国際委員会と日本軍（歩兵第二十三聯隊第三大隊と思われる）との初めての接触は漢中路で行われた。中国軍退去の際の混乱が終わり秩序が回復されるものと期待した難民たちの中には、歓声をあげて日本軍を歓迎しようとした者もいたが、それは「失望から恐怖に変わった」という。

「十二月十四日早急ニ進出セル為充分ノ給与ヲ受ケテキナカツタ日本軍ハ、市中ニ解放サレ、正規ノ軍隊ニトツテ全ク言語ニ絶スル行動ニ出タ。』【ドイツ大使館報告】

十四日朝八時、日本軍の將校が国際委員会を訪れ、安全区の敗残兵搜索の許可（？）を求めたが、本部にいたラーベ、フィッチ、許伝音は「一人モ武器ヲ携帯シテ居ル中国兵士ハ居ナイ」「一度武器ヲ棄テテシマッタモノハ、私共ハ兵隊ト見做サナイデアリマス」「是等ノ人々ハ私ガ茲デ普通ノ人間デアルト同ジャウニ普通ノ非戦闘員デアリマス」【東京裁判・許伝音証言】として、これを拒絶し、十四日に発したT一号公文書において「逃げ込んだ兵士たちを平穩な市民生活に戻してやること」の許可を求めているが、当日行われた日本軍のきびしい搜索（掃蕩戦）に驚いたのか、翌十五日のT二号では「兵士と認められる者は合法的には捕虜と認めることを要望する」ことに後退し、「当委員会はこれらの武装解除された兵士の処置にあたって、日本軍が一般市民を巻きこむことのないよう十分に注意される

よう」希望しているのが注目される。さらに「捕虜にかんして広く認められている法律に照らして、また人道上の理由からして、日本軍がこれら旧兵士にたいし仁慈ある待遇をあたえることを、当委員会は希望するものです。彼らを勞務者として用いることもできるであろうし、できることなら市民生活に帰らせてやれば喜ぶことでありましょう」と、前日の要望を再び繰り返している。

## 負傷兵の処置

これよりさき、南京は上海に戦火が拡大して以来、その後方兵站基地であると同時に、後送される負傷兵の收容基地でもあった。

「戦死傷者の南京に護送されるもの極めて多く南京は戦死傷者の收容所と化し、全市に医薬の香瀾ひま漫し移転後の政府機関は勿論私人の邸宅も強制的に病室に当てられた。南京は男の町軍人の町と一変した。』【一外人の日記・十一月二十五日・東京日日十二月二十日】

中国軍の治療施設は極めて貧弱で、特に医師と看護婦が決定的に不足であった。病院はおびただしい数の傷病兵をとうていさばききれず、街路のいたるところに負傷兵の姿が見られた。負傷兵たちはびっこを引き、身をひきずるようにして小路を歩いており、メイン・ストリートでは何百人となく死んでいった。【ニューヨーク・タイムズ・十一月二十二日上海・要約】

「南京の停車場には、およそ二千名の負傷兵が送られて来たが、彼らをかまふものがをらず、二日間も放置されてゐる間に死んで行く者がふえた。』【フランクフルター・十一月十九日】

「南京陥落いよ／＼迫ると知つた南京衛戍司令唐生智は、昨八日遂に各城門に縋りつかんとする敗残兵及び負傷兵



の遁入を一切禁止した。これがため敗残兵及び負傷兵等は哀れな姿を寒風に曝されながら城門外を彷徨して居る。惨憺たる地獄風景を展開して居る。【同盟上海・十二月九日】【ニューヨーク特電・八日・朝日】

南京には第二救護総隊の下に医(病)院八、收容所四、接応所四があったが、毎日後送される千名からの負傷兵を收容処置するのに不便のため、九日に外交部と軍政部に集められ、さらに十一日には転送困難な重傷兵は国際赤十字委員会で保護するよう要請された。

十二月十二日、全軍退却に先立ち、負傷兵千余名は揚子江を渡るべく下関に向かったが、午後二時、すでに船は無く、辛うじて破船を修理して数百名は渡河したが、その後の安否は知る由もなかった。【蔣公毅『陥京三日記』】

日本軍進入時、市内の各病院に收容されていた約五百名の重傷の中国兵、中国人医師、看護婦は、十二月十三日夜マギー委員長ほか国際赤十字委員会の活躍によって外交部に集められた。十二月十四日、日本軍は外交部の建物を接收し、患者の保護にあたり、外国人のこの病院への立ち入りを禁止した。他の救護隊員はばらばらになって安全区に潜入した。

『東京日日新聞』十二月二十一日には「診療に喜ぶ敵傷兵」と題する記事中に、中国軍負傷兵が外交部に三百名、軍政部に二百名收容されていると記されている。

歩兵第二十聯隊第三中隊は軍政部に宿営していたが、林(旧姓吉田)正明氏の日記(資料編参照)には、中国人看護婦と共に「支那兵の患者が二百余名も居るのだ。日に日に全快を見る」と記され、前田音次郎氏は、中国負傷兵に残飯を与えたところ飢えた負傷兵たちは奪い合って食べた、と『歩二〇第三中隊史』に記している。

(注) 南京占領後の記録として、十二月二十七日の『上村利道(上海派遣軍参謀副長)日記』には「(朝香宮)軍司令官、支那傷兵ヲ見舞フコトヲ発意セラル。実ニ結構ナル思ヒ付キナルモ警戒上尚ホ注意ヲ要スルモノアリ」と記されている。

十二月三十一日、野戦郵便長佐々木元勝氏はこの病院を訪れ、負傷兵捕虜と会話している。【野戦郵便旗】

また、昭和十三年一月二十日、マギー師は外交部にある赤十字病院内の中国人傷兵の待遇が悪いと日本軍に抗議している。【極東国際軍事裁判提出『南京安全区檔案』南京暴行報告第一九九件】

さらに、歩兵第七聯隊第二中隊第三小隊の平本渥氏は、十三日夜の掃蕩戦の折り外交部で、各階の通路まで塞がった負傷兵を目撃した。後、武漢戦で右足を負傷して後送され、南京で治療していた昭和十四年一月十二日、当時收容されていた中国人が病院で働いているのと再会し「平本謝々、多多的辛苦」と感謝され、親切にされている。【陣中日誌『命脈』より】

安全区国際委員、国際赤十字委員、難民收容所一覽表

南京安全区国際委員会公文書による。『日中戦争史資料第九卷・南京事件II』洞富雄編・河出書房新社所収  
南京安全区国際委員会 寧海路五号

電話 三一九六一・三二三四六・三二六四一

委員名簿

氏名	国籍	所属団体
1 ジョン・H・D・ラーズ氏 委員長 (Mr. John H. D. Rabe)	ドイツ	シーメンス洋行 (Siemens Co.)
2 ルイス・S・C・スマイス博士 書記 (Dr. Lewis S. C. Smythe)	アメリカ	金陵大学 (University of Nanking)
3 P・H・ペンロ＝フケール氏 (Mr. P. H. Munro-Faure)	イギリス	亜細亜火油公司 (Asiatic Petroleum Co.)
4 ジョン・G・マギー師 (Rev. John G. Magee)	アメリカ	アメリカ聖公会 布教団
5 P・R・シールドズ氏 (Mr. P. R. Shields)	イギリス	和記公司 (International Export Co.)
6 J・M・ハンソン氏 (Mr. J. M. Hanson)	デンマーク	徳士古煤油公司 (Texas Oil co.)
7 G・シホルシホ＝ハンテンマン氏 (Mr. G. Schulze-Pantn)	ドイツ	興明貿易公司 (Shingmin Trading Co.)
8 アイヴァー・マッケイ氏 (Mr. Ivor Mackay)	イギリス	太古公司 (Butterfield and Swire)

9 J・V・ゴッカーリング氏 (Mr. J. V. Pickering)	アメリカ	美孚煤油公司 (Standard-Vacuum Oil Co.)
10 エドワード・スパーリング氏 (Mr. Edward Sperling)	ドイツ	上海保険公司 (Shanghai Insurance Office)
11 M・S・バイン博士 (Dr. M. S. Bates)	アメリカ	金陵大学
12 W・P・ミルズ師 (Rev. W. P. Mills)	アメリカ	北部長老派教会 布教団
13 J・リーン氏 (Mr. J. Lean)	イギリス	亜細亜火油公司
14 C・S・トリマー博士 (Dr. C. S. Trimmer)	アメリカ	鼓楼医院 (University Hospital)
15 チャールズ・リグズ氏 (Mr. Charles Riggs)	アメリカ	金陵大学

国際赤十字南京委員会 寧海路五号

電話 三二三四六・三二六四一・三二九六一

委員名簿

- 1 ジョン・G・マギー師 委員長
- 2 李俊南(訳音)氏 副委員長(中国赤十字社南京支部)
- 3 W・ロウ氏 (Mr. W. Lowe) 副委員長
- 4 アーネスト・H・フォーマスター師 (Rev. Ernest H. Forster) 書記
- 5 クリスチャン・クレーガー氏 (Mr. Christian Kroeger) 会計
- 6 ホール・ド・ウィット・トゥイネム夫人 (Mrs. Paul de Witt Twinem)
- 7 シス・ミニー・ヴァートルン (Miss Minnie Vaurin)

- 8 ロバート・O・ウィルソン博士 (Dr. Robert O. Wilson)
- 9 P・H・マンローフォール氏
- 10 C・S・トリマー博士
- 11 ジェームズ・マッカラム師 (Rev. James McCallum)
- 12 M・S・ベイツ博士
- 13 ジョン・H・D・ラーベ氏
- 14 ルイス・S・C・スマイス博士
- 15 W・P・ミルズ師
- 16 コーラ・ポドシヴォロフ氏 (Mr. Cola Podshivoloff)
- 17 沈玉書 (訳音) 師

南京安全区難民収容所一覽表 (一九三七年十二月十七日現在)

建物名称	難民数	性別
1 交通部旧館	一〇、〇〇〇以上	男性
2 五台山小学	一、六四〇	家族
3 漢口路小学	一、〇〇〇	家族
4 陸軍大学	三、五〇〇	家族
5 南京語学校 (小桃源)	二〇〇	男子
6 軍用化学工場 (華僑招待所裏)	四、〇〇〇	家族
7 金陵大学付属中学	六、〇〇〇	家族
8 聖書師資訓練学校	三、〇〇〇	家族
9 華僑招待所	二、五〇〇	家族
10 南京神学院	二、五〇〇	家族
11 司法部	空	空

12 最高法院	空	空
13 金陵大学養蚕所	四、〇〇〇	家族
14 金陵大学図書館	二、五〇〇	家族
15 ドイツ人倶楽部	五、〇〇〇	家族
16 金陵女子文理学院	四、〇〇〇	婦女子
17 法学院	五、〇〇〇	家族
18 農村師資訓練学校	一、五〇〇	家族
19 山西路小学	一、〇〇〇	家族
20 金陵大学寮	一、〇〇〇	婦女子
総人数	四九、三四〇~五一、三四〇	

### 第十三節 入城式と合同慰靈祭

十二月十七日（晴朝）午後一時三十分、陸軍部隊は中山門から、海軍部隊は挹江門から入城式を行った。

松井中支那方面軍司令官は朝香宮上海派遣軍司令官と共に湯水鎮から自動車で中山門外に至り、柳川第十軍司令官と共に各幕僚を従え乗馬で入城、堵列する中山東路北側・上海派遣軍、南側・第十軍の將兵を閲兵し国民政府に向かった。

「未曾有ノ盛事、感慨無量ナリ」（『松井石根日記』）

「……本日ノ盛儀ニ参列シ、而モ幕僚トシテ閲兵ニ随行シ得タル喜ヒハ実ニ何モノニモ例フルモノナク、全ク子孫未代迄ノ光榮ニシテ……」（『山崎正男日記』）

一方これに呼応して長谷川支那方面艦隊司令長官、大河内上海海軍特別陸戦隊司令官、近藤第十一戦隊司令官は挹江門から入城、中山北路に堵列する陸戦隊を閲兵した。

午後二時、陸海兩軍は国民政府到着、国旗掲揚、東方遙拜、乾杯、万歳三唱、式は午後三時終了した。（式次第は『上村利道日記』十二月十七日の項参照）

翌十八日（曇微雪）、城内飛行場において上海戦以来の陸海軍合同慰靈祭が厳粛に執行された。

この朝午前十時、松井大將は首都飯店の司令部に各軍、師団參謀長を集め、軍參謀長より指示、打ち合わせを行う

とともに、特に軍紀風紀の振肅と、支那人輕侮思想の排除、國際關係の要領について訓示を与えた。（『松井日記』）

『飯沼守日記』によれば訓示の要点は次のようであった。

「要ハ武威ニ悦服セシムルト共ニ皇軍ニ心服親和セシメ日支一体ノ必要ヲ感セシムル以外出征ノ目的達成ノ途ナシ。之カ為ニ、三注意ヲシ度イ。軍紀風紀ノ肅正。支那人ニ対スル輕侮ノ念多シ之カ禍ヲ為シ今日ノ事變ヲ生起シタルトモ言ヒ得、且軍人ハ滿洲ノ又ハ北支ノ支那人ニ対シタル觀念ヲ以テ此地方ノ漢民族ヲ同一視スルハ免レサルトコロナリ、漢民族殊ニ南方ノ支那人ヲ個人的ニ觀ルトキハ氣力、經濟力共ニ侮ルヘカラサル事實ヲ有ス。国民性ノ欠陥ハ統制ト團結力ナカリシニ在リ、故ニ之ヲ加フレハ恐ルヘキ力ヲ成ス。而シテ現今之カ実ヲ結ヒツツアリ、輕侮スルハ誤リナルヲ銘心セヨ。」

午後一時四十五分、式場に於いて松井方面軍司令官より兩軍司令官、各師団長に訓示があり、午後二時より神式により慰靈祭を施行、方面軍司令官、艦隊司令長官、川越大使の弔辭、玉串奉奠を以て午後二時四十五分終了した。

慰靈祭について、東京裁判での中山寧人參謀の宣誓口供書は次のように述べている。

「慰靈祭は初め、中国軍の戦没者も併せて祈り慰靈する様にせよ、これが日支和平の基調である」と、松井大將は參謀長に祭文其の他の準備をする様に命ぜられました。日時の余裕なく後日に譲ることとなりました。」

当日は「天候急變西北風強ク気温急降下ス」（『上村利道日記』）

『松井日記』には「今晚降雪少許アリ、天氣陰鬱ニシテ恰モ本日ノ忠靈祭ニ適スル天氣ニテ、天モ亦吾等ト共ニ泣ケルモノト思ハル」「予ハ祭主トシテ陣没靈前ニ進ミ、祭文ヲ朗読シ万感胸ニ迫リタルモ、往時ノ如ク声詰リ涕泣禁シ能ハサル如キ事ナク、何タカ一層ノ勇氣ト發奮心起リ、朗々祭文ヲ讀ミ忠靈ニ告クルヲ得タリ、蓋英靈此ク予ヲ激

励スルモノカ感亦無量ナリ」と記されているが、『飯沼日記』は「慰霊祭場面アマリ広クシテ感深キヲ得ス」と記し、『上村日記』は「忠魂を弔ふ原や風寒し」と詠み、『山崎日記』には「カク申セハ洵ニ失礼ナルモ本日ノ儀式ハ、昨日（入城式）ニ比シ、感激ノ程度非常ニ低ク、何トナク物足ラヌ感アリ。本日ハ非常ニ寒ク、祭場ニ於テブルブル震ヒ出シ水バナガ出ル。兵ガ休憩中ニ焚火シテ火ガ段々大キクナリ……開始前漸ク消シ止ム」と率直な体験が記されている。

通説では、この慰霊祭の後に松井軍司令官の声涙共に下る軍紀風紀に関する訓示があったとされているが（松本重治著『上海時代』ほか）、記録によればそのような事実はなく、これは第七章で述べるように翌昭和十三年二月七日の上海派遣軍慰霊祭の式後の松井大将訓示との混同であることが明らかとなった。

なお、十二月十八日、松井軍司令官が全軍に与えたのは次の訓示である。

#### 訓示

湖東会戦ニ引続キ勇猛果敢ナル追撃ニ依リ一挙首都南京ヲ攻略シ茲ニ歴史的壮挙ヲ完成シタルニ方リ重ネテ優渥ナル聖旨ヲ辱シ感激措ク所ヲ知ラス

不肖石根<sup>トゴシキ</sup>乏<sup>ト</sup>ヲ以テ克ク任務ヲ達成シ上 聖明ニ対ヘ奉ルヲ得タルハ実ニ参加将士ノ力戦奮闘ニ俟ツモノニシテ深く其ノ勞ヲ多トスルモノナリ

然リト雖時局ノ前途ハ遼遠ニシテ軍ノ任務ハ愈々重ク秋毫ノ倦怠ヲ許サス将兵相戒メテ一層奉公ノ誠ヲ竭サンコト

ヲ期スヘキナリ

全軍須ク統率ノ真義ヲ確認シ一層軍紀風紀ヲ振肅シ經驗ニ基ク教育訓練ニカメ戦力ノ充実ヲ図リ以テ次期作戦準備ニ遺憾ナキヲ期スルト共ニ警備ヲ敵ニシ軍機保護ヲ密ニシ治安維持ヲ全クシ以テ不逞ノ徒ニ蠢動ノ余地ナカラシムヘシ

若夫レ所在民衆ニ対シテハ東亜百年ノ計ニ稽<sup>カンガ</sup>ヘ皇国ノ伝統ニ則リ悪政ニ呻吟セル彼等ニ寧ロ憐愍ノ情ヲ加ヘ克ク指導啓蒙スル宜撫宜シキニ協<sup>カキ</sup>フヲ要ス

抑々皇軍ノ操守ハ戦事ノ繁閑ニ依リ差異アルノ理ナシ全軍將兵相戒飭シ戦果ノ維持拡大ニ最善ノ努力ヲ傾倒シ以テ皇軍ノ威信ヲ顕揚スヘキナリ

右訓示ス

昭和十二年十二月十八日

中支那方面軍司令官 松井 石根

## 第十四節 揚子江事件(レディバード号とパネー号事件)

十二月十一日午後六時、南京より退却する中国軍を撃滅するため、第十軍は次のような「丁集団命令」を発した。

- 一、敵八十数隻ノ汽船ニ依リ午後四時三十分頃南京ヲ発シ上流ニ退却中ナリ

尚今後引続き退却スルモノト判断セラル

- 二、第十八師団ハ蕪湖附近ヲ通過スル船ハ国籍ノ如何ヲ問ハス撃滅スヘシ

翌十二日早朝、野戦重砲兵第十三聯隊(長橋本欣五郎<sup>23</sup>期大佐<sup>23</sup>三八式十五榴二十四門)は霧の中を上流に航行する大型汽船四隻に砲撃を加えたが、間もなくこれは英砲艦レディバード号ほか英艦船であることが判明した。

この日午後、海軍第二聯合航空隊麾下の第十三航空隊は南京上流十五哩の揚子江上において大小汽船十隻とジャンクが多数の中国兵をのせて溯航中との情報に基づき、これを爆撃し損害を与えた。また別動隊は南京上流二十八哩付近で汽船四隻を攻撃、二隻を撃沈、二隻に火災を起こさせた。翌十三日午前九時、長谷川第三艦隊司令長官は米國東洋艦隊司令長官から、十二日午後二時三十分以降砲艦パネー号との無線連絡が絶えたとの通告を受け調査の結果、前者に英砲艦(クリケット号、スカラブ号)二隻、商船一隻が含まれ、後者の撃沈した船は米砲艦パネー号及び米商船(スタンダード石油会社所屬のメイアン号。他にメイビン号、メイシャ号は炎上)であることが判明した。

陸軍は「此ル危険区域ニ残存スル第三國民並其艦船カ多少ノ側杖ヲ蒙ルハ已ムナキ事ナリ、決シテ責任者ヲ処分ナ

ドスル必要ナキ意見ヲ東京ニ電報セシム」(『松井日記』)と強気であったが、海軍は「常には食事中愉快に談笑せらるる(長谷川)長官も俄かに緊張せられしにや、何事も語られず、未だ嘗てなき沈鬱な空気は将官室を埋めたり、長官の心中察するに余りあり」(『泰山弘道日記』)と衝撃を受けている。

長谷川長官は直ちに航空部隊に対し、何分の命あるまで揚子江上における艦船爆撃を禁止するとともに、南京突入直後の保津に開源碼頭付近で遭難したパネー号救助を指令した。

さきに述べた通り、保津は午後八時三十分頃現地に到着、同地に停泊中の英砲艦ビー号に先任將校・橋本以行大尉を派遣した。同大尉は英救助隊と共に英艦の内火艇に乗り北岸の和県に至り、夜を徹して遭難者の救助、負傷者の収容にあたった。一方、上海からは負傷者救護のため十四日朝七時、軍医、看護科員、衛生材料を乗せた水上飛行機が和県に出発した。

パネー号は白く塗られ、前甲板に米国旗を二つ大きく書き、斜桁に大國旗を掲げていたが、同艦に対する攻撃は十二日午後一時三十八分より約二十分続き、約二十発の爆弾が投下され、うち二発が命中し、艦首より沈みだし、午後三時三十四分右舷に転覆した。同艦には米國大使館員四名、外国人五名が便乗していたが、イタリア人サンドロ・サンドリ記者と乗員二名が死亡、大使館員三名と乗員三名が負傷、メイアン号は船長が死亡、乗員四名が負傷した。

政府はこの事件が国際的問題に発展することを恐れ、ただちに参謀本部から西義章<sup>31</sup>期中佐を調査に派遣するとともに、米、英兩國政府に陳謝と損害賠償の意思を表明した。特に米國の世論に対しては誠意を尽くしてその悪化を防ごうと苦心し、朝野をあげて慰謝につとめた。

小学生を含めた慰問文、見舞金が新聞社、米大使館に続々寄せられ、東京日日新聞のコラム「三角点」は募金による代艦建造を提唱し、岩波茂雄は一千円を寄託し、詩人・土井晩翠は「あゝパネー号」を発表した。

南京に到着した西中佐は鋭意調査につとめたが、過誤による爆撃を認めた海軍のほか、避難中のボートに対し陸兵が射撃したという件については陸軍が初め、これを認めず、『山崎日記』十二月十六日参照)、交渉が行き詰まった。しかし後に、海軍の有馬参謀が、国崎支隊の一部隊が民船で揚子江上を機動中、中国兵と誤認して発砲したという事実を耳にし、第三艦隊参謀高田利種少佐が東京へ飛び、結局陸軍側もこれを認めた。そこで高田少佐は二十三日午後五時半、山本五十六海軍次官、柴山兼四郎陸軍省軍務課長とともにグルー大使を訪問、率直に陳謝した。(高田利種氏証言)

十二月二十二日の大本営陸軍部発表、二十三日の西中佐の外国人記者会見、および二十四日ワシントン國務省発表の「上海米海軍査問委員会報告書」によれば、付近を民船で行動中の陸軍部隊は誤認発砲の後、パネー号に乗艦したが、その間も海軍機の攻撃は続行され、日章旗を振っての合図も空しく日本陸軍側にも死者二、負傷四を出している。

十二月二十四日、広田外務大臣はグルー駐日米國大使を招き、事件は全くの過誤に基づくもので、誠意をもって賠償等の米國側要求を容れ陳謝するとの正式回答文を手交した。これに対し二十六日、グルー大使は広田外相に満足の意を示す米政府通牒を通告、ここにパネー号事件は解決した。

ついで十二月二十八日、広田外相はクレイギー駐日英國大使を招き、レディバード号事件に対し、朝霧に加えて煙幕による遮蔽のため英國旗が見えず敵艦と誤認したもので、戦場の実相止むを得ざるものがあるが、その結果については真に遺憾である旨の回答文を手交した。英國にはなお不満が残ったが、米國が満足した以上同意せざるを得なかった。

## 第六章 南京攻防戦の結末